マルキシズム概論

（唯物史觀と勞働價値說の略吟味）

目次

一　序言。若干の參考書
二　社會主義より共產主義へ
三　社會主義と共產主義との合成としての唯物史觀と唯物辨證法
四　階級鬪爭の理論
五　階級鬪爭の始期についての吟味
六　社會制度の變遷
　　ゲンス共產制。婚姻制度。私有財產制度
七　人類社會發展行程中に於ける階級鬪爭の運命
八　自由の世界と必然の世界
九　プロレタリア獨裁の意味と國際共產運動
十　唯物史觀の史的再吟味
十一　マルクス勞働價値說の由來
十二　客觀主義の價格論と主觀主義の價格論

十三　ジョン・ロックの勞働價値論
十四　當爲としての價値論
十五　社會的必要勞働と等價形態
十六　指導原理としての勞働價値論
十七　均衡原理としての勞働價値論
十八　勞働の賣買と勞働力の賣買

一　序言。若干の參考書

千葉縣中等教育研究會の御招きを受けまして、今日から三日に亙つてマルクス主義概論殊に唯物史觀と勞働價値論とについて、極大要の御話を申上げて、これに若干の批判的吟味を加へて見たいと思ふのであります。千葉縣が御主催になつて、主に中等教育に從事される方々、小學教育に從事される首腦の方々が御聽き下さるといふことでありましたので、御依頼を受けたのはツヒ先日のことで、準備をする暇がありませんから、本來ならばお斷りしなければならぬのであるにも拘らず、私は喜んでお引受致した次第であります。其の趣意は、教育に從事して居られる諸君は、先づ日本の社會の中で最も公平な考を持つて居られる方に相違ないのでありますから、善きものは取り、惡しきものは捨てるに一向躊躇せぬと云ふ立場に居られる。私から改めてお願を致さなくても、平常諸君の執つて居られる仕事がさうでなければならないのでありまして、從つて、最も公平なる聽衆を前にしてお話をするわけと存じました、是が私が喜んで御引受けした第一の理由であります。第二の理由は、縣廳が主催せられると云ふことを甚だ多とするのであります。マルクス主義の如きものは、初めから耳を塞いで冒かざらんとすることが、從來官廳の人々の執つて居つた態度でありましたが、今は縣廳が主催して、進んで教育に從事される諸君に、マルクス主義の大要と、之に對する批判の講話を聞かしめられると云ふは、餘程進んだ考へ方であると思つて之を喜ぶのであります。更らにまた、私は二三年來マルクスに就て講演若くは執筆を致したことがないのであります。其の趣意は、近來猛烈なる勢を以てマルキシズムが流行して居ります。私は流行に投ずるといふことは至つて嫌であります。抑ゝマルクスの學說を日本に紹介したのは、私などは隨分舊い方で、三十年近くの昔からであります。今盛んに流行して居る時分に、其の仲間に投じて、一緒になつてやる必要はない、先づ口を緘して語るまいと考へて居たのであります。また之に就ては大分誤解がある、其の誤解を一々辯ずるといふことは、迚も一時間や二時間の講演では出來ない。趣意をよく述べないと、益よりも寧ろ害があるかも知れない。ホンの一場の講演ならばしない方が宜い。雜誌上の短い一つの文ならば、却つて書かぬ方が宜いといふことを考へて居りました。故に近來は筆も執らず、又演壇に立つてもマルクスに就いてお話をすることを寧ろ避けて居つたのであります。

所が此頃になりましてから、マルクス主義は、謂はゞ一つの轉機を持つたやうに考へられるのであります。今迄のやうな單なる流行でなく、靜かに省て、其の長短を公平に考へるといふことに、日本の民衆

が餘程導かれて來たやうに考へられる。謂はゞマルキシズムに對する態度の決算期が稍〻近づきつつあるのではないかと考へられます。其の時に當つて稍〻ゆつくりと冷靜に聽いて下さることの出來る聽衆諸君に向つて、謂はゞ決算的の意味で、マルクス主義に對する私の考、平常學んだ所、竝に批判的意見を陳述して見るといふことは、或は時宜を得て居るのではないかと考へつゝあつたのでありまして、幸に其の機會が今回の講演會に依つて與へられました。それ等の理由に依つて私は喜んでお引受けを致し、是からお話をする次第なのであります。併し三回九時間の時間と雖も、實は不十分なのでありまして、十分に申し盡すことは到底出來ないのであります。最近に出ました河上肇博士のマルクス經濟學の大綱といふ本がありますが、マルクスの經濟學の大綱だけでも、可なり大きな、四百頁ばかりのものになつて居るのであります。中々九時間位の時間で其の大要をお話することは容易ではないのであります。從て今回の御話しは、概論の概論ぐらゐの程度に止るものと御諒承を願ひます。

初に參考の書物に就て、少しお話をして置きたいと思ひます。マルクスに關する書物は澤山出て居りますが、大部分は飜譯であります。一部分は飜案であります。全く獨自の立場から、自分の工夫を以てマルクスを學び、之に批判を加へたものは誠に少いのであります。初めからマルクス主義を論破する、或は排擊するといふ態度を以て書かれたものも相應にありますけれども、それ等の總てを通じての缺點は、マルクス主義は惡いものと初めから定めてかゝつて居ることで、マルクスの說の神髓は如何なるものであるかといふことを冷靜に公平に述べて、それに付て內在的の、或は超越的の批判を加へたものは甚だ鮮いのであります。就中駁擊論、マルクスの說を能く了解しないで、或は誤解し、或は分つて居ると言つても半ばしか了解しないで、自分が攻擊するのに都合の好い所だけ取つて攻擊して居るものは少からずあるのであります。之は批評としても無效であるのみならず、却つて有害であります。マルクスの說は左樣なものではないといふことが分れば、骨を折つてマルクスの說の或部分を而かも誤解に基いて排擊することは、益がないのみならず、却つて反動的の作用を持つことになる。是等は餘程注意して見て頂かないと困ります。無論マルクスの說の全部を盡さないまでも、是がマルクスの說であるといふことを言はんとならば、その云ふ所は確かにマルクスが說いたことでなければならないのであります。所が左樣な所までの洞察が行屆かざるものが大分多いのであります。これらは諸君が御研究なさる上に於て寧ろお捨てになつた方がよいと考へます。

先づマルクスの說を忠實に傳へるものとしては、前述の河上博士の『經濟學大綱』といふ書物を措いては殆どないと言つても宜い位であります。河上博士の態度は大體に於て私の執らざる所でありますが、此の『經濟學大綱』といふ書物に於ける態度は、大體に於て私が見て、是ならば學問的の要求に大して外れて居ないと思ふ所の態度であります。同じ河上博士のものでも此の以外のものは必ずしもさうではありません。『經濟學大綱』だけは京都大學に於ける講義を本として述べられたのですから學問的の要求にさまで外れて居ないと思ふのであります。其の代り若干難解といふ嫌は免れませんが、再讀されて吟味されたならば、少しも難澁ではありません。同じ河上博士に『マルクス主義經濟學』と

いふ書物があります。之は極めて簡單なもので、別に學問的といふことは出來ません、洩れた所もあります。併し併せてお讀みになれば、若干の參考にならうと考へて居ります。其の外に批判的の態度を以てマルキシズムに對して可なりの了解を以て書かれたものは、小泉慶應義塾大學教授が筆にされたもの、殊に『社會主義と價値論』追記。其後同教授の筆に成るものに『マルクシズムとボルシエヴキズム』と題する一書もあると云ふ書物は餘程優れたものであります。併し是はマルクス說の大要を傳へるといふよりは、寧ろ或る部分に就て批評を加へられたもので、殊にマルクスの間違を鋭く指摘されたものであります。それから近く亡くなられた高畠素之氏の『マルクス學解說』といふ書物があります。是も割合に好く出來て居ります、大きさからいへば手頃のものであります。先づ私の見る所では其の位なものであらうかと考へます。追記。其後日本評論社發行の『現代經濟學全集』中に高畠氏の遺稿を門人諸氏が更らに補訂した『マルクス經濟學』と云ふ一書が刊行されてゐる。これは河上博士の『經濟學大綱』と好一對をなす甚だ善き書物である。殊に門生諸氏の補訂の部分は立派な出來榮を示してゐる。高畠君の學の斯くして永く傳へられることは、學問上喜しいことであるのみならず、師弟の情誼の快く美しい發露の一例として、甚だ會心に堪へざるところである。

西洋のものに付て申しますと、マックス・ベーアといふ獨逸の學者の書いたものに『カール・マルクスの一生と事業』といふ書物があります、此の原書は獨逸文でありますが、英譯も佛譯もあります。手頃の本で、可なり活字が細かく組んでありますが、頁數にして百四十頁ばかりであります。併し注意しなければならぬことは、ベーアといふ人はマルクス信者の一人でありますから、批評も加へて居りますけれども、大體マルクスを讃美するといふ態度であります、其の點は念頭に置いて頂かなければなりません。併し此の人は優れた學者でありまして、又綿密に研究する人でありますから、今の所では、西洋に於けるマルクス評論家として普く認められて居る一人であります。英譯などは多分日本にも澤山來て居ると思ひます。次にヴヰルブラント教授の著に『カール・マルクス論』と云ふのがあります。著者は社會主義者でありますけれども、公平な態度を持して渝へない尊む可き研究者であります。マルクスに對して深い同情を有ちつゝ、其短所を決して看過しては居りません。これは赤松要教授の邦譯本が先年刊行されて居ります。極く新しく出たものには、政治學者であるロンドン大學教授のラスキといふ人此人は『政治學大綱』といふ有名な書物を書いた人であります。其の人が或る叢書の中に『共產主義』といふ小さな本を書いて居ります。一册一圓ばかりのものですが、中々好い本であります。西洋にも日本のやうな圓本があるのです。而も其の本の內容は、第一流のものであります、頁數は二百五十頁ばかりで、丸善邊には澤山來て居ります。昨年初めて出た本であります。是は共產主義の大要を述べて批判したもので、其の批判は終りの方に行くと、可なり猛烈でありまして、極力共產主義の誤りを指摘して居りますが、併し頭ごなしに惡口を言つて居るのではなく、學理的に見て取るべき所は十分に批評を盡して居ります。先づ十分の三は個人的の立場に立つて居りますが、十分の七は公平なものと言つて宜しい。それから英國のオックスフォード大學の高等學校――大學豫科に當るバリオル・コレッヂの校長のリンドゼーといふ人、此人は有名な古典學者、希臘語及び希臘哲學の大家でありまして、プラトーンの『國家論』の飜譯などは非常に優れたものです、本來は古典學者であり乍ら、傍ら經濟學、社會學にも通じて居る人であります。此人が『マルクス資本論入門』といふ本を書いて居ります。マルクスの『資

本論』だけに就て、マルクス説の大要を極めて簡潔に百五十頁位に書いて居りますが、それが實に要領よく出來て居ります。ラスキ氏は英語で書いたもので、此の書ほど、マルクス説の神髄を傳へたものは今までに見たことがないと言つて褒めて居ります。兎に角大體を通じて見るに、極く公平な立場で書いて居ります。結局はマルクスの説を否認するのですが、其否認するに至る道行は、少しも諒解と同情を缺かない、どんなマルクス信者が讀んでも、之を讀めばマルクスの取るべき點は何であるか、缺陷は何であるかと云ふことを十分首肯出來るやうに書いてあります。それは勞働者の團體、無産黨の大會で講演を致した其の骨組を綴つたものであります。英吉利の勞働者が如何に理解が高いかといふことは、之を讀むと能く分ります。之を日本語に飜譯したら、日本の勞働者には或は分り兼ねると思ふ。相當の知識がある人でも、注意しないと理解に苦しむ位で、可なり調子の高いものでありますが、それを英吉利の勞働者は聽いて、十分咀嚼し得るものと見えます。如何にも羨しい次第であります。私の此講演は迚も及ばぬことではありますが、せめてリンドゼー氏の眞似なりともして見たいと思ふものと御承知を願ひます。

其の他部分的のことに就ては、マルクスに關するものだけでも大きな圖書館が出來る位多いのでありますから、一々擧げることは出來ません、極く手頃のものだけを申上げて置きます。今一つ新しく出來たものに、ロンドン大學の教授で政治學者、憲法學者であるヘルンショーといふ人の『社會主義檢討』といふ大きな書物がありますが、是は色々な書物を引き、多くの人の言つたことを擧げて書いて居ります。併し頭からマルクス主義竝に社會主義を打壞す目的で書いたものでありますから、公平といふ點に於ては遺憾な節が多いのであります。但し英吉利人の一部、殊に英吉利の學者の一部にさう云ふ意見があるといふことを知るには、參考になるであらうと考へます。尚ほ、マルクスを全然信仰する立場から書いたものは讀んでも致し方がありませんから、それは略して置きますが、諸君の御研究が稍ゝ進んだら、さういふものを御覽になつても害はありません。併し初めからさういふものを見ることは、公平な立場を失ひ易いから、能く吟味を願ひたい。相當研究が進んでから讀むならば、マルクス信仰の立場から書いたものを讀んでも害がないと思ひます。近頃さういふものが我邦にも大分殖えて參りましたから、今回の此の講演を御聞きになつてから御覽になつたならば、大體判斷が出來るやうになりはしないかと考へて居る次第であります。

追記。其後大坂の大原社會問題研究所から『日本社會主義文獻』と云ふ極めて周到綿密な書目が刊行された。邦文の社會主義著類は殆んど洩れなく集錄し、懇切な説明が添へてある。又同研究所雜誌第六卷第一號（昭和四年九月）中に『邦譯マルクス・エンゲルス文獻』なるものがあつて、凡そマルクス及エンゲルスの著書にして邦譯のあるものは、殆んど一の遺漏なく列擧してある。

マルキシズムなるものは、大體三つの部分に分けて見ることが適當であらうと思ふのです。即ち第一に社會哲學として、第二に一つの經濟學説として、第三に一つの政治學説として、これであります。今回は、時間の關係上政治學説までは及び兼ねます。經濟學説は私の專攻の課目でありますし、少し詳しく申し上げたいと存じます。殊に今マルキシズムの最も勢力のあるのは第一の社會哲學、第二の經濟學説であります。政治學説は寧ろ大部分が將來の問題であつて、現在の問題としては、ロシアのあの狀態が生れたことに依つて有力になつたので、それまでは有力なものではなかつたのであります。

二　社會主義より共産主義へ

先づ第一に、社會哲學としてのマルキシズムについて簡單に申上げます。社會哲學としてのマルキシズムは、言ふまでもなく社會主義と共産主義とであります。此二つの主義が、マルクスの拔群なる頭腦によつて、いとも巧妙に結び付けられて出來たものが、彼の社會哲學であるのです。社會主義と共産主義とは何處が違ふか、是は殆ど區別の付かないやうに普通は解釋されて居りますが、併し私は其の區別は是非せなければならないものと確信して居るのであります。ツヒ近い頃まではマルクス主義と云へば一般に社會主義と見られて居つて、共産主義と云ふことは餘り言はれなかつた。併しマルクス自らは、初めから自分は社會主義者といふよりも、共産主義者だと言つて居つた。有名な『共産宣言』といふものがありますが、是はマルクスが自分の哲學、經濟學、政治學の全體を概括的に披瀝し、又實際運動上の方針を提示した有力な一の文書であります。それは明かに共産宣言(初めの題名は『共産黨宣言』)と題してあつて社會主義宣言としてありません。さうして其中所々に『吾々共産主義者は』といふことを繰返して言つて居ります。マルクス竝にエングルスは共産主義者を以て自ら任じて居つたのです。社會主義者を以つて任じて居つたのではありません。

併しマルクスの說いた所の大部分は共産主義でなくして、社會主義でありました。此の意味からいへば、マルクスは共産主義者といふよりも、寧ろ社會主義者だと言はれて居つたのは、必ずしも誤りではありません。抑も社會主義に於きましても、共産主義に於きましても、非常に遠い將來の事を考へる。其遠い將來について、兩者は相容れざる底の相違を有つて居るのであります。乍併當面の問題のみについて見ましても、端的に如何なる主張を立てるか、如何なる行動を可とするかといふことに於いても、共産主義と社會主義との間には著しき違ひがあるべき筈であります。そこに社會主義と共産主義とは明かに區別されなければならないのであります。社會主義の期する所は、具體的の例を以て言へば、現在の露西亞のやつて居る所が、先づ曲りなりでありますけれども、それを現して居る。現在の露西亞は、結局共産主義を實行して居る譯ではありません、歸する所は無論共産主義であるが、迚も共産主義へ一足飛びに行くことは出來ないから、今は社會主義を取つて居るのであります。だから、勞農露國の國名を『社會主義的ソヴエート諸共和國聯邦』と云ふのです。其の社會主義と云ふものは生産の手段、それは主として資本であるが、資本を社會の有にする。其の社會といふものは、國家といふものが之を代表して居る。從つて生産の手段を國家の有に歸する。國家の手に之を纏めて私人が之を各々分有(分用は別です)することを認めないといふことに重きを置く、それが社會主義であります。社會を以て本體とするといふ意味で社會主義といふのです。

併し今日は、社會と云ふものは、國家を離れては現實にあり得ないのです。國家なき社會と云ふことは共産主義に於て始めてある。社會主義に於ては國家はある、而も其國家は十分働かなければならぬ、否一番働かなければならぬ。此の點に於ては、社會主義と國家主義とは、目的は大いに異り、其の意義精神も違ひますが、其の手段に至つては殆ど選ぶ所なき位に同じなのであります。國家主義の最も力の

強いもの、國家主義の最も理想通りに行つたものが社會主義であると言つて能い位であります。從つて社會主義の中にも國家社會主義といふことを言ふ人があるのでありまして、或度までは、其れは當然の歸趨と認むべきであります。我邦に於いては、近頃物故せられた高畠素之氏及其門下の人々は、此思潮を代表するもので、其は學問上から申せば、先づ以て最も徹底した社會主義の主張でありまして、共產主義とは、嚴密に區別さるべきものであります。社會主義は總て國家の手に於て行ふといふこと、是は一つの議論よりも寧ろ實行上の問題として重要なことになつて居る。唯、現在日本、英吉利其の他の國家の行つて居ることは、所謂社會政策である。社會政策は、社會上の問題を解決し、弊害を取除く道行として、國家の力を強くすることに結局はなるのでありますが、社會主義と違ふ所は、生產の手段を、原則として國家の手に收むべしとはしない。生產の手段は何處までも私人の有に歸して置いて、唯だ其の間に起る弊害を除く爲めに、國家が其の力を以て、其の立法を以て、其の行政を以て努力する、而して、保護すべきものは保護する、是が社會政策である。從て、今日のロシアの樣になれば社會政策は消滅すべきであります。其の點に於ては、社會政策と社會主義とは全然違ふ。社會主義は個々の事をすることに重きを置かないで、總ての社會上の弊害の根本は私有財產制度にあるのであるから、之を國有にすべし、國有に依つて結局社會の有に歸する準備をすべしとするのであります。

共產主義は、左樣なる國家の手で行ふ生產手段の統制といふことを認めない。結局は社會の手に歸するのだが、其の社會の代表者、社會の一つの最も有力なる機關としての國家がそこに立つことを認めないのであります。それが社會主義と共產主義と非常に違ふ所であります。マルクスの考も結局は國家を認めないといふことに落ちて來るのですが、併しマルクスの考では、それにはかなり長い時期が必要である、此の時期は短縮することは出來ないと云ふのであります。此の點に於ては、マルクスの考へ方は必ずしも終始不動的ではありません、變つては居ります。併ながらマルクスの本心を言へば、一足飛びに共產主義に行くことは到底出來ない、其の前に長き社會主義の時代がある、社會主義の時代は共產主義への準備の時代であると云ふ風に考へたのであります。私は曾て『ボルシェヴキズム研究』といふ書物を書いたことがありますが、其の中にレニンの國家論と云ふ可なり長い論文を載せて居りますが、レニン說の要領は、社會といふものは大體次のやうな順序に變つて行くものであると申すのです。

一　封建時代　　二　資本主義時代
三　社會主義時代　　四　共產主義時代

今日は資本主義の時代でありまして、此の資本主義の時代になる前は封建時代である。(其以前のことは略して置きます)。資本主義時代の後に當然來るものは社會主義時代である。社會主義時代は次で當然共產主義時代になる。此の封建時代、資本主義時代、社會主義時代は總て國家と云ふものが統制して行く。社會主義時代といへども國家の統制と云ふことを認めて居る。それを終つてから始めて本當の共產主義時代が來ると申します。其の中で諸侯の獨裁の時代が封建時代であり、資本家の獨裁の時代が資本主義の時代であり、プロレタリアの獨裁の時代が社會主義の時代と云ふのである。社會

主義の時代は經濟的には、まだ資本主義時代と根本的に變る所がない。經濟的の變化は一番長く掛るものであるから、急には變らない。其の間は矢張り現在の資本主義時代と大差なき經濟狀態が續かなければならぬ。併し此の社會主義時代の中で、段々資本主義時代の經濟狀態が變つて行つて、時が熟すると共產主義の時代が來る。共產主義時代は政治的變革と經濟的變革が合致する時代である。社會主義の時代は、政治上の變革の方が經濟上の變革より早く來た時代である。資本主義の時代は、資本主義的政治に資本主義的の經濟が合體して居る。共產主義の時代には共產主義的の政治と共產主義的の經濟とが竝び存するやうになる。其の中間に位するものが、過渡時代としての社會主義時代である。此の過渡期時代たる社會主義の時代には、政治の形態と經濟の形態とは著しく一致しない。經濟上に於ては、資本家といふものは全く無くならない。資本家の完全な消滅といふことがまだ實現されない。從つて資本家が勞働者を搾取することは經濟上では全くは消えない。併し政治上に於て、政權をプロレタリアの階級が取ると、其の政權を利用して段々に經濟上に於ける資本家の獨裁を止めて行く。此の長い練習の時期を名けて、プロレタリア獨裁の社會主義時代と謂ふ。露西亞の現在やつて居る所が卽ちそれである。明かに之を意識してやつて居るのであります。結局落ちて行く先は共產主義で、資本家といふものが政治上に於ても消滅してしまふと共に、經濟上に於ても消滅して、本當の平等の經濟と、平等の政治とが行はれると申すのであります。是は昔からの共產主義及び社會主義の思想が段々に、或は變り、或は發達して、結局十九世紀になつて到達した所であります。レニンはマルクスの諸著作を涉獵して、彼の眞意は卽ち玆に在りと斷言して居るのであります。

此の他にも色々變つた考へ方がありますけれども、それ等は今日は殆ど其の影を潛める位にマルクス主義に依つて壓倒されてしまつたのであります。澤山の流があつたが、マルクスが一度出て來てからは段々それがマルクスの主義に集中されてしまつた。マルクスの生きて居る時分には、まだそれ程ではなかつた、殊に無政府主義といふものが、マルクスから見れば眼の上の瘤であり、大なる敵であつた。マルクスが折角堅めた勞働者の陣營は、無政府主義の爲めに屢々搔き亂され、學問上に於ても屢々議論を鬪はして居つたのでありますが、マルクスが死んでから後は、マルクスの考へ方が段々勞働者の間に勢力を擴張して來て、遂には之に對抗するやうな思想の流れは跡を隱してしまつた。ところがそれは思想上だけの話で、實際の社會はマルクス主義でもなければ、無論無政府主義でもない又社會主義的思想に支配されるといふ所までも行つて居ない。社會主義も、共產主義も、亦其敵である無政府主義も主に思想上から生れたものである。今日の流行語で言へば、イデオロギーとして、人生觀、社會觀として、次第に勢力を得つゝあつたと言ふに止まつて、社會上、經濟上、政治上、實際の勢力とはなつて居らなかつた。無論勞働運動が段々盛んになつて來るに從ひ、其の或ものは、マルクス主義の考へ方に依つて支配されて、其の考へ方が運動の上に間接には現はれて來ましたけれども、吾々人間社會の何れの部分にもマルクスが說いた所の社會主義なり、或は共產主義なりを實現した所はなかつた。一つの社會哲學のイデ

オロギーたるに止つて居つたので、吾々の實際の生活とピタツと合つたものではなかつたのであります。佛蘭西には澤山の社會主義者があつた、共產主義者もあつた。英吉利に於ても、社會主義者の數は殖えて來た。獨逸に於てもさうであります。けれども其の何れもが、實際の生活を實際に左右するだけの力は持たなかつた。殊に共產主義的の考へ方は、實際の意味に於ては何等の實現を見なかつた。社會主義的の考へ方は、社會政策の上に幾らかの影響を及して居り、勞働運動の上にも相當の影響を及して居りましたが、共產主義的の考へ方は極めて理想的で、理想に走る人に取つては一種の力であつたけれども、現實に卽して居る人には風馬牛であつて、之を知らないといつても差支へない位であつたのであります。

所が今日は、さうは行かなくなつた。どんな時勢に逆ふ思想家でも、兎に角今日の實際の社會の上に於ては、共產主義的の考へ方、或は、社會主義的の考へ方が、一つの大きな力となつて居ることは度外視することが出來なくなつて來た。其の理由は澤山ありますけれども、主なるものは世界大戰爭後の歐羅巴の狀態の變化であります。世界大戰爭に依つて、民衆の力を藉らなければ、如何なる國と雖も結局は之を維持することが困難だといふことが分つて來た。そこで勞働者の勢力が非常に强くなつて來た。政治上何等の變革が行はれなかつた國に於ても、其の勢力は增大して來たのであります。又勞働者を支配して居るイデオロギーは、既に戰爭前に於て大部分マルクス主義的なものになつて居つた。純マルクス派でなくとも、間接にマルクスの影響を受けて居つた。勞働者が勢力を得て來ると、彼等は實際社會の上に於て、或は政治上に、或は經濟生活の上に色々の主張を立てる、其の場合、彼等はそれまでに養成され來つたマルクス主義のイデオロギーに立脚した樣々の主張を立てるやうになつた。それが數の上に於て非常に多數であり、從つて大なる力となつて來たのであります。

第二には獨逸、墺太利、匈牙利に於て政治上の革命が起りました。是は世の中を共產主義にしよう、社會主義にしようといふ考からではない。所謂民族自決の主義、民族自治の主義といふものをウイルソンが唱へ、之に他の者が同意して出來上つたものである。多年の歷史を持ち、舊い傳統を有する歐羅巴の舊國を打壞した。就中墺太利及び匈牙利に君臨して居たハップスブルグ王朝といふものは、現在の歐羅巴の王朝の中では最も由緒のある舊い王朝であつた。殊にフランツ・ヨセフ老帝は、信用あり、德望の高い方であつて、國內に色々な問題が起つても、老帝の御在世の間は國が分裂するといふことはなかつた。フランツ・ヨセフ老帝が崩くなつて新帝になつてからも、國內に動搖が起つたけれども、尙ほ分裂はしなかつた。然るに歐羅巴大戰爭の結果は、ヴエルサイユ平和會議に於て、其の墺太利も遂に分裂しなければならぬことになつた。此の老大國の墺太利を分割したと云ふことは、少くとも政治上に於てはどの位人心を變へたか、其影響は獨り歐羅巴のみに止まらず、歐羅巴以外の天地に波及して居るものと私は考へて居るのであります。兎に角墺太利を分割して、所謂民族自決主義に依つて小さな國を澤山拵へた。其の事が政治的方面からいへば社會主義的の考を著しく促進することになつたと、私は考へて居るの

であります。

第三には露西亞の革命であります。ロシアの革命は獨逸の革命、墺太利其の他の國の革命とは大分趣が變つて居りまして、明かに意識されたプロレタリア獨裁政治の爲めの革命であります。資本主義時代から明かに時期を劃して、截然と社會主義時代に入る爲めの革命でありました。而もその革命は政治上の革命のみではなくして、社會上の革命と謂はれる。或は共産革命で『あると言つても宜しい。共産主義に入り込む第一道程があの革命であると謂はれるのであります。ケレンスキーの革命は、一の政治革命にすぎざるものであつて、社會革命ではないのです。ケレンスキーの革命の後を承けてレニン、トロツキー等の手によつて革命が行はれた。この革命は明に社會革命である、共産革命である。此の革命に於て第一に行れたことは、從來資本家の階級が支へて居つた政權を、勞働者の手に奪ひ取つたと云ふことであります。是は確に出來た。尤も今日の現狀は其の奪ひ取つた政權を維持することに汲々として居る狀態であるが、兎に角マルクスの說を全然實際に行つたのであります。從來の革命は、それ〴〵思想的の淵源は持つて居る、佛蘭西革命の如きは、ルーソーの思想が直接間接に影響をして居るのであるが、併しルーソーの說を其儘實行したのではない。ルーソーの考からは、大分脫線した結果を見たのです。所が露西亞の革命だけはさうでなく、少くとも形だけはマルクスの唱へた所を其の儘行はなければ已まざるものであります。革命の先達たちは何事を行ふにもマルクスの本を引張り出して來て『資本論』に斯う書いてある、『經濟學批判』には斯う書いてあると言つて、お經の文句かバイブルからでも拾ひ出すやうにして、マルクス曰く、エンゲルス曰く一點張りで、其の外の事は認めないのであります。マルクスとエンゲルスとの書き殘して置いた事を、唯だ眞面目に文字通りに實行しようとした。玆に於てマルキシズムといふものは、單なるイデオロギーでなく、一の大なる實際の事實となつた譯であります。兎に角あの澤山の民衆を擁して居る大きな國が、マルクスの說に依つて、從來の革命とは全然違つた革命を遂行し、悉くマルクスの說に依つて、マルクスが書いた通りの事を實行の上に移して見せると云ふことになつたので、世界思想界のマルクス說に對する考へ方が全然違つて來たのです。今までは學究の言として聞流して來たけれども、斯うなつては捨て置けないと云ふことに考が變つて來たのであります。

日本に於けるマルキシズムの流行といふことも、やはり其の一つの波動と見て宜いと思ひます。マルキシズムを學問上から研究し、研究の結果マルキシズムの眞なることを認めて、之に歸依した人は甚だ少ないと思ふ。我邦マルキシズムの學問上の權威として有名なる河上博士にしても、世界大戰爭なかりせば、果して今日の立場にまで突進せられたでせうか否か、私はこれは一つの疑問であらうと思ふのであります。同君は學問研究の道を進んで來られた人でありますけれども、それでも今日到着された同君の立場は、實際上の大きな事實に刺戟されたと云ふことは拒むことが出來なからうと思ひます。況や其の他の者に至つては、學問研究の結果、當然そこに落ち來つたと云ふよりも、寧ろ世界を動かして居る大きな思想の波動を受けたものと見るのが妥當ではないかと考へて居ります。兎に角、マルキシ

ズムを解剖して、之に向つて批判を加へようとするならば、十數年以前とは全然違つた態度で掛らなければならぬのであります。世界大戰爭以前に於ては、マルクスの說は一の學說として、又勞働者に影響を及ぼしつゝある一のイデオロギーとして見て居つたのでありますけれども、今日はそれでは足りません。單なる學說や部分的のイデオロギーとしてのみではなく、實際運動の上に大きな力となつて居ることを認めなければ、之を十分に了解することも批判を下すことも出來ないやうになつて居るのであります。

三　社會主義と共產主義との合成としての唯物史觀と唯物辨證法

マルクスの社會哲學思想の由て出づる所には、二つの大きな淵源があるのであります。此の二つの淵源其ものは、全然相反したる、枘鑿相容れないものであります。是はマルクスの說を了解する上に最も肝要な點であります。而して其れは社會哲學の上に於てばかりでなく、經濟學說としても、又政治學說としても、さうであります。

マルクスの思想は、二つの相容れないものゝ間から出て居るのであるが、それが或る時には一方に多く附き或る時は他に多く附いて居る。今でもさうであります。是はマルキシズムに纏はる常山の蛇で、頭を叩けば尻が立ち、尻を叩けば頭が立つ。頭で解決したと思つても尻が立つて來る。尻の問題を捉へて解決したと思ふと頭が上つて來る。現に現在の露西亞の實行しつゝある諸々の事柄の一部分には其の矛盾が現れて居るのであります。

マルクスの思想の由つて出づる所の、二つの相容れない淵源とは何であるかと申すと、一は英吉利に於て發達した功利主義の哲學、殊にベンタムの功利哲學であります。功利主義の哲學は、昔日本では陸奥宗光、西周などといふやうな人達に依つて『利學』(陸奥氏に『利學正宗』と云ふ著述があります。)といふ名前で紹介され、一時は日本の一つの指導的思潮であるとまで考へられたものであります。それがマルクスの思想の一方の淵源を成して居るのであります。私は、これを廣い意味に於いて、個人主義的思潮と見ます。而して其究極するところは、卽ち正確の意味に於ける『共產主義』(無政府共產主義をも含む。)これであると觀察しつつあるのであります。(此點反對論あるべきは、十分に知つて居りますが。)

マルクスの思想の淵源を成して居るところの第二の思想は、獨逸の理想主義の哲學、觀念主義の哲學、其の中でも殊にヘーゲルの哲學であります。私は此思潮を、正確の意味に於ける『社會主義』と見て居ります。(同く反對論を豫期します。)此のヘーゲルの理想哲學と、ベンタムの功利哲學の二つに依つて養ひ上げられたのがマルクスの主義、マルクスの思想であります。然るが故に、マルキシズムは共產主義であると共に社會主義であるのであると、私は考へて居ります。(此意味に於いて、これを『集產主義』といふ、的なものだといふ惡口をいふ人もあります。)

ベンタムの功利主義から出て來るものは英吉利流の個人主義、自由主義であります。就中、個人主義的の自由主義であります。自由主義にも色々の分派が出來て居りますが、最も純粹なる自由主義は、個

人主義の上に立脚して居るのである。個人が萬事である、社會國家と云ふものも、唯だ個人が集つて出來て居るものに過ぎない。社會哲學の問題を取扱ふにしても、經濟上の問題を取扱ふにしても、政治問題を取扱ふにしても、何でも個人から出立する。さうして其の最後の歸趨とするところは、個人の最大の幸福、個人の最大の滿足と云ふことであります。

所がヘーゲルの理念主義的の考へ方は、それとは全然相反して、何時でも全體と云ふことが先になる。部分は常に全體に從屬する。全體の中でもヘーゲルは、最高の人格の實現者は國家であると見た。國家至上主義である。而も其の國家は法律上に謂ふ所の國家のみでなく、道德上の國家卽ち法律上に於て、政治上に於て、吾々の生活を統制するのみでなく、吾々の道德生活の統制者でもある、又其の實現者である。人間の道德の最高の實現者は國家である。國家に於てのみ人間は其の最高の道德を實現し得るのである、其の他の團體に於ては、自治體に於ても、法人に於ても、人格の完全なる實現は出來ない。何れも部分的のものである。從つて不完全である。最も不完全なものは個人である。個人の道德の實現は、人間の道德の中の最も不十分なる實現の仕方である。人間の道德が進んで行けば、總て國家に包攝される。國家は人間を支配する所の觀念精神を皆含んで居ると見るのであります。これ卽ち、純粹の意味に於ける『社會主義』であらうと存じます。而して、此の純粹の意味に於ける社會主義の代表者は無論マルクスではありません、却つてマルクスによつて甚だ蔑視せられてゐたところのロドベルトス其人こそ其の最も典型的なる代表者と云ふ可きであらうと存じて居ります。

ヘーゲル哲學とベンタム哲學、理想主義と功利主義、此の二者は、元來到底相容るゝことの出來ないもので、兩者は、對蹠的に對立して居るものであります。而して此の二つの思想の流れは、人類の歷史の全體を通じて並び存して居るものと考へられます。汎く名付ければ、一はゲマイン・プリンチップ（共同原則）、又はゾチアール・プリンチップ（社會原則）、若くはゲザムト・プリンチップ（全體原則）他は、インヂヴヰヂユアル・プリンチップ（個人原則）とすべきでありませう。或は又少し看方をかへて云ひますれば、一は有機原則で他は原子原則であるとも言ひ得られます。西洋の學問界に於いて、此の對立する二つの原則の二大代表者は、一はプラトーンであり、他は、アリストテレースでありませう。プラトーンの共產主義は、徹底した原子原則又は個人原則の產物と見られ得ます。之れに反し、アリストテレースの國家論は、全體は常に部分に先つてふ全體原則又は社會原則の典型であります。プラトーンの國家論は、個人正義の發現としての國家論であることは、其の題名の書を御一覽なされば、直ぐ判明することであります。之れに反し、アリストテレースの正義論は、配分の正義と云ひ、匡正の正義と云ひ、將たまた流通の正義と云ふ、何れも全體に立脚する正義でありまして、個人的正義ではないのであります。本書第一篇の一參考。茲に主張したことに對しては、大なる異論あるべきことを豫期して居ります。

此の二つの思想の對立は、西洋中世の哲學の上にも絕えず其跡を示して居ります。或意味から申せば、西洋中世の社會哲學思想の發達は、此の二大思潮一消一長の歷史であると稱しても大過ないと思ふのであります。而して、ライブニッツ以後のドイツの社會哲學は、アリストテレースの全體原則を更ら

に展開したものであり、マルブランシュ、ドルバーク、ルーソー以下のフランスの哲學は、個人原則を徹底せしめたものと見るべきと存じます。此の兩者は枘鑿相容れないものとして、學問上に對立して居たのでありまして、一は社會主義思想の淵源を成し、他は共産主義思想を養ひ育てたものと存じます。フランスの社會主義者たちは、此の枘鑿の間に彷徨して居たのでありますが、マルクスの一日の先輩たるプルドーンに至つて、徹底的個人主義としての共産主義を打開するに至つたものであり、其反對にドイツに於いては徹底的全體主義としてのロドベルトスの社會主義を産み出すに至つたものと、私は見て居るのであります。（此點も亦た異論あることを豫期します。）

然るにマルクスが出て來て、此の相容れない二つのものを、彼の偉大なる頭腦の中で融合して、此の間から彼の說を編み出したのであります。他の語を以て申せば、共産主義と社會主義とを打つて一丸とした人其れが卽ちマルクスであると言ひ得ると思ふのであります。乍去、如何に彼の頭腦が偉大であり、彼の包攝力が强くあつても、元來違つた考へ方が、渾然として融合する筈はない。從てどうしてもそこに矛盾が起る。所がマルクスは、玆に大なる工夫をして、其の矛盾が容易に現はれないやうに、兩方の長所を巧く取入れることの出來るやうな考へ方をした、それが卽ち唯物史觀の辨證法（唯物的辨證法）であると、私は考へて居るのであります。

此の辨證法と云ふものは、古く希臘の哲學者の間にも認められて居つたものでありますが、希臘哲學に於てはヂアレクチック（辨證法）と云ふものは、善い意味と惡い意味と兩方に取られた。寧ろ惡い意味に多く取られたものであります。ヂアレクチシアン辨證家と云へば、多くは惡く言つたことになる。彼の詭辨學派（ソフキスト）と云ふものもさうである。ソフキズムと云ふものは、多くは惡い方に濫用された。プラトーンは自分の言ふことはヂアレクチックのやうに聞えるか知れないが、外に論辨の方法が考へ付かぬので、姑らくヂアレクチックによることを許して貰ひたいといふことを度々書いて居る。卽ち辨證法的にやることは、プラトーンは成るべく避くべき事として居る。それは希臘哲學の殆ど全體の見方であつた。其の意味に於ての辨證法は、議論の爲めに議論をする、實效の如何を眼中に置かない、結果はどうあらうと、それは議論に關係はない、議論は議論としてのみ意味を持つものであるといふのである。議論の爲めの議論といふことも結構である。恰も、將碁を指すのは、天下國家の爲めに指すのではない、面白いからさすのだと言つて居るのと同じである。所が議論の爲めの議論と云ふこと、學問の爲めの學問と云ふことは、兎角濫用され易い。學問の爲めの學問といふこと、これは無論さうでなければならないけれども、之を餘り强くすると、實效などゝ云ふことは全然度外視して、そんなことは考ふべきではない、學問は學問の爲めの學問である、外の目的があつてはいけないと云ふことになり、結局益のない空理空談に耽ると云ふことになり、世道人心に益が無いものである、是が辨證法が惡い意味に取られた點であります。

辨證法を善い意味に取つたものは、議論の爲めの議論、學問の爲めの學問と云ふけれども、結局は世道人心に益がなければならぬ。併し議論をして居る時は、左樣な雜念を交へてはならぬと云ふのであり

ます。議論する時に雜念を交へてはならぬと云ふことを強く言つたのが、辨證法であると云ふ、是が善い意味に取つたものであります。ところで、善い意味に取られた辨證法は、次の如き論法で進んで行くのです。實效如何を考へないで、唯だ議論の內容から論を立てるとすれば、どうしても一つの論だけでは進めない。二つの論があつて、相對抗するのでなければいけない。一つの論を何所までも論じつめて行くと、結局は反對論を生じなければならぬ。反對論を生じないやうな議論の立て方は、議論としては間違つて居ると云ふ、其處を大變強く見るのです。例へば人間は親孝行をしなければならぬと云ふこと、之を普通に言つて居れば誰も異議はない、而も之を強く人間は親孝行をしなければならぬと云ふと、親孝行以外には何もしてはいかぬと云ふことになる。さうすると反對論が起る。人間は親孝行ばかりではない、忠でなければならぬ、同僚に對しては信でなければならぬ、子に對しては慈でなければならぬ、色々の道德上の義務がある、唯だ孝行さへすればよいと云ふのは間違つて居ると云ふ反對論が起る。或る論を論じ詰めて行くと、反對論が出る。反對論が出るまで、論じ詰めなければならぬ。反對論が出るまで論じ詰める、さうすると又それに第二の反對の議論が出る。併し第二の反對論は、第一の反對論とは違はなければならぬ、同じやうな反對論ではいけない。一體人間は何の爲めに議論をするかと云へば、自分の智能を進めて行きたいからである。從つて第二に出る反對論は、初の反對論とは進んだものでなければならぬ。同じ水準を保つて居るのではヂアレクチツクでない、水準が上つて行かなければならぬ。其の上つて行く道行をヘーゲルは『止揚』と名けて居るのであります。

前の議論を繰返すのではいけない、反對論が出て、それを論じ詰める、論じ詰めて止める、併し止めるだけではいけない、揚げなければならぬ。止めて揚げる、唯だ揚げるのでなく、一段高い所に揚げるのでなければならぬ。反對論を出すことに依つて、前の議論を繰返す必要がなくなつて、他の議論が出て來る。其の論は一段高い所に上つた議論でなければならぬ。だからヂアレクチツクは正・反・合となつて行く。正と反とがあつて、ウンと主張する。ウンと主張すると、必ず反對論が出る。其の反對論を主張すると、又反對論が起るが、それは元の論ではない、元の反ではない、合である。其の合をウンと主張すると正になる。正に對して又反があつて、次に又合がある。正反合々々々で進んで行く、其の爲めに人間の思想は段々進んで行くと云ふのである。是れは論理上の一つの進化論であります。

以上は我々の思想の發展を論理上說明したものであります。然るにヘーゲルは、此の思想界の原則を更らに我々の生活其ものの上に押及ぼして、社會進化の理法にも辨證法的發展が行はれることを說いたのであります。これヘーゲルの一大事業と看做されるところであります。吾々の考が正・反・合の經過を辿つて進化して行くのみならず、社會の事實、吾々の社會生活も亦正・反・合の段階を踏んで上つて行く、是が社會進化の根本原理であるとヘーゲルは說いたのです。それはヘーゲルの獨創の考へ付と言はなければならぬのであります。勿論似寄つたものを尋ねれば、其の以前にもあつたけれども、ヘーゲルの說いたやうな明瞭な說き方はなかつた。ヘーゲルは進化論者であつた、さうして彼は進化論だけで終つた。進化論に矛盾するやうな、是と相容れないやうな考へ方は說かなかつた。ヘーゲルの有

名な歴史哲學は、一つの辨證法的進化論に依る社會觀、歴史觀であつて、纒まつた體系を成して居るのであります。マルクスはそれを其の儘採つて來た、其の意味に於て、彼はヘーゲル流の社會進化論者である。それが今日まで傳つて、レニンでも誰でも、苟もマルクスの徒であれば、それは進化論者であるけれども他の要素が大分入つて來て、純粹のヘーゲルの徒でなくなつてしまつたのです。ヘーゲルの時代にはまだ社會進化に關する研究は誠に幼稚なものでヘーゲル以上のものはなかつた。從つてヘーゲルの說は、一時は非常に有力なものとなつた。マルクスは其の時分に學問をし始めた人であります。マルクスの生れたのは今から百十年前、千八百十八年でありましたが、ヘーゲルは其の時分に大きな著述を世の中に出して居ります。マルクスが大學生になつた時分にヘーゲルは死んだのですが、ヘーゲルの說は當時の青年を非常に支配してゐました。當時の青年の心を最も捉へたのは、正・反・合と辨證法的に行くと云ふ社會進化論であつた。從來のやうな融通の利かない社會觀でなく、社會は流動して居る、其の流動の道理の說明が正・反・合で巧く出來て居ると云ふことが、若い學徒の心を著しく牽き付けたのであります。

ヘーゲルは社會の進化を精神現象とのみ認め、理念、觀念哲學の上から說いたのです。社會の進化は要するに大きな人間の精神、人間の理念から起る。吾々人類には磅礴たる一つの大なる理念がある。此の理念が昔から人類を始終敎導して文明を形造らしめた。此の理念が實現せられんとして吾々は共同して行くのである、其の共同生活の上に起る形が社會進化の形、正反合の形であると云ふのであります。從つて彼の辨證法は唯物的ではない、其の正反對の唯心的の辨證法である。物は少しも見ない、心ばかりを見るのであります。ところが、マルクスは其辨證法の形ちだけを採り、其の辨證法を生み出す所の、ヘーゲルの考へた人間の精神、人間の社會生活を嚮導して行く最大統制原理である精神は全然取つてしまつて、其の代りに物質を持つて來たのです。そこで彼は、己れの辨證法はヘーゲルの辨證法だが、併しヘーゲルのは頭が下で足が上になつて逆錯立をして居つた、それを己は足を下にし、頭を上にして起直らしめたのだと言つて居ります。之をコペルニクスの囘轉だと言ふ。即ち地球が中心で太陽が其の周圍を囘るのではない、太陽が中心で地球が其の周圍を囘るのである。吾々人間社會の正反合の發展は、人間の精神作用ではない、物質生活の中に此の正反合の發展があるのである。法律、政治、倫理、宗敎、藝術、人間社會の萬端の發展は、皆物質から出て來る辨證法的の進化の中に漂つて居る。進化を起す源は政治の力や法律の力ではない、宗敎の力でもない、藝術の力でもない、全く經濟の力である。吾吾の物質生活即ち經濟生活のみに其の原因があるのであると主張します。是は唯物的辨證法と言つても宜い、經濟的辨證法と言つても宜いのである。經濟的辨證法と言つた方が宜いと思ふ。何故かと云ふと、唯物的と云ふと、哲學に於ける唯物論と同じもののやうに誤解されることがありますからです。マルクスは哲學に於ける唯物主義を其まゝに取つた譯ではありません。彼が唯物的と言つたのは、經濟的と云ふことを手取早く言ひ現はしたに過ぎないので、決して精神の働きを無視した次第ではありません。從て唯物史觀と云ふ代りに、歴史の經濟觀、歴史の經濟的解釋とも謂ひます。即ち人類の歴史

的發達の跡を顧みて、それを總て經濟的の原因を以て說明すると云ふことす。或はまた歷史的唯物主義とも謂ひます。單なる唯物主義でなく、歷史的の唯物主義であります。マルクスは之を歷史哲學として唱へたのであるが、其の歷史哲學は、同時に社會哲學であります。社會の進化の跡を歷史的に繹ねて、今日竝に將來の社會の發展の方向を知らうと云ふのであるから、歷史的と云ふことゝ、社會的と云ふことゝは殆ど同意義になり、歷史哲學卽ち社會哲學と云ふことになつて居ます。今日の社會學者の中には、社會學といふ特別な學問はない、其れは畢竟するに一の歷史哲學であると主張する有力なる學者例へば、バルト氏の如き)もありますが、是はマルクスの考へと大體に於いて一致してゐるのであります。

さて、斯の如く辨證法を採りながら、それを精神的理念的に解釋しないで、物質的經濟的に解釋すると云ふことは、必しもマルクスに始つたことではないのです。マルクスの前に少くとも一人の先輩がある。それはヘーゲルから生れて、ヘーゲル學派の一人であつたが、段々研究の結果、ヘーゲルの說に叛旗を飜したルードウヰッヒ・フオイエルバッハといふ哲學者であります。マルクスの思想發達の道行を段々研究して見ると、彼れがヘーゲルの中から唯物史觀辨證法を導き出して來たに就ては一つの階段があつたことが明かになりました。それが卽ちフオイエルバッハの說であります。從て、マルクスを能く知る爲めには、フオイエルバッハも研究しなければならぬと云ふことになりました。殊に近頃はマルクスに關するものは斷簡零墨と雖も爭つて蒐めるやうになつて居るので、其前驅の一人たるフオイエルバッハの著書も塵の中から救ひ出されて、先頃其の全集が新刊されるやうになりました。(フオイエルバッハ其ものは、大して價値のあるものとは思はれませんが。)乍去、フオイエルバッハがなくてもマルクスは其處へ氣がついたかも知れません。偶〻フオイエルバッハがあつたから、彼は其の研究の過程を幾分か省略することが出來たのでせう。フオイエルバッハがなければマルクスの說が出來なかつたとは言へないと思ひます。唯だ當時マルクスは未だ三十歲前後の靑年であつたので、可なり勉强した人ではあるけれども、マルキシズムの如き大きな說を直ちに獨力で形づくるまでには行かなかつた。併し一度フオイエルバッハを通して、ヘーゲルの中から自分の本領を見出したマルクスは、終生渝る所なく唯物史觀の上に立ち、次第に工夫を加へて、其の說を緻密に致したのです。

其間若干の變遷はありましたけれども、終生渝ることなかつた彼の說の本領は次の如くであります。經濟上の力の中でも、最も重要なのは生產の方面である。經濟上の現象を生產、交換、分配、消費と別けるとすれば、生產の方面、物を造り出す方面が支配的の力を有つ。生產でない方面、之を總稱して流通と名づけます。此の流通の方面にも原因はあるが、是は寧ろ第二義的のもので、あつて、第一義的の原因は生產にありと申すのです。其の生產上の原因は何所にあるか、それは生產事情の變化(技術の發展程度)——例へば產業革命が起るまでは家內工業、手工業でやつて居つたが、蒸汽力の發見に依つて、機械工業に變つた。さう云ふ生產事情の變化が、有ゆる社會の進化を起し、又社會の色々の變遷を喚び起す最根本の原因である。生產事情の變化が、斯の如く大きな力を持つと云ふは何故であるかと云ふに、生產事情の變化なるものは、畢竟するに生產力を高める必要から起つて來るのである。生產事情が變らずに居り、

技術の進度に變化が起らなければ、生産力も變らない。それでは人間の數が殖えて來、人間の欲望が增して來ても、之に應ずることが出來ない。生産力を增進することがすべての事の根本である。生産力を增進するには、生産事情を變へ生産技術を發展せしめなければならぬ。生産事情と云ふものは社會の下層建築である。一番土臺の基礎建築を成して居る。社會の政治的の組織、法律的の組織と云ふものは、上層建築である。上に載せてあるものである。二階三階である。下層が壞れゝば、二階も壞れなければならぬと云ふのであります。是は中々むづかしい解釋のある所で、河上博士の本には詳しく其の事が書いてありますが、大要はそれであります。

斯の如くマルクスはヘーゲルから出立して、唯物的辨證法なるものを立てたのでありますが、前に述べました如く、彼れの思想にはもう一つの大きな淵源があります。それは英吉利の個人主義、殊に個人主義的經濟學であります。英吉利正統學派（古典學派とも邦譯します）の經濟學と名づけて居る經濟學は、純然たる個人主義的經濟學であります。此の點から言へば、マルクスは獨逸の理念哲學の綜合主義、解り易く言へば國家萬能主義の政治哲學と、英吉利の功利哲學の個人萬能主義の經濟哲學とを繫ぎ合せて、其間から一種獨特の社會哲學を編み出したと言つて宜いのであります。

此の社會哲學、唯物的の辨證法は、世界大戰爭後殊に露西亞の革命の爲めに非常な違つた意味を與へられるやうになりました。今までマルクスの議論を批評する者は、第一に彼れの經濟學說に着目したのです。從つて價値論と餘剩價値論に就ての批評が最も發達して居つたので、事經濟學に關する限り彼れの說の缺陷、彼れの說の短所、否誤謬は、縱橫無盡に把羅剔抉されて居つたと言つても宜い。思へらく、マルクスの經濟學說と云ふものは、經濟學理として見れば斯の如くに不十分なものである、然らば他は推して知るべきのみだから勞働者の經濟知識が段々發達すれば、マルクス主義崇拜の夢から目覺めて來るだらうと。斯ういふ風に主張するものも尠くなかつたのです。奚んぞ知らん事實は全く之に反して、マルクスの經濟學說は全然破られてしまつても、彼れの價値說、彼れの餘剩價値說が共に維持出來なくなつてしまつても――それは中々むづかしい事であるが、假にさうあるとしても、尙ほ玆に彼れの唯物的辨證法が殘つて居る。之を十分批判するに非ざれば、マルクスの說を破ることが出來ないのみならず、勞働者階級を支配する所の力は、寧ろ勞働價値說、或は餘剩價値說よりも、唯物的辨證法が遙かに多くこれを有してゐることが見出されたのであります。此事は、世界大戰爭前にも少數の先覺者は認めて居つたのですが、大多數の人はさうは考へて居らなかつた。果して世界大戰爭後、露西亞革命の先達たちがマルキシズム宣傳の最有力の武器としたものは、經濟學說の勞働價値說でも餘剩價値說でもなくして、社會哲學たる唯物的辨證法であつたのです。日本に於ては此の變化は大正十三年（福本和夫氏の出現の年と思ひます）から十四・五年に掛けて行はれたやうであります。それまでのマルクス評論と云ふものは、マルクスの說中殆ど其の經濟學說のみを目當にしてゐたのであります。其の狀態が一變して、價値論には必ずしも重きを置かず、只管唯物的辨證法論に焦點を求めるやうになり、マルクスの經濟學說を主としてゐたのが、社會哲學の方へ移つて行き、其の考へ方が餘程進んで來ました。

然るに今日マルクス主義研究の最も進んで居り、最も多くの材料を持つてゐて、これを他國に供給する國は露西亞であります。戰爭前には、獨逸の學者の研究を參考としなければ、マルクス説の研究は出來ないといふ有樣であつたが、今日ではマルキシズムの研究、宣傳に最も重要な貢獻をするのは露西亞の學者であります。其の露西亞の學者の間に於ても、マルクスの政治哲學を研究する者は、レニンが死んでからは餘りありません。レニンは主として社會哲學と政治哲學を研究して、それを著述に澤山殘して居る。所が今は主として社會哲學、殊に辨證法の方面に進出して來た。其の進出さ加減は、マルクス自身が墓場から蘇つて來たならば一驚を喫するだらうと思ふ位であります。マルクスの殆ど考へ及ばなかつた點、マルクスの研究の屆かなかつた點まで研究されて居る有樣で、謂はゞ其處に一つの大きな未開の鑛山があつた譯であります。大抵掘り盡されて、大した收穫はなからうと思つた所が、新しい方法を以て掘出したら、非常な收穫があつた。今後も尙ほ出るであらうと考へられて居ります。日本に於ける最近四、五年間の思想の變化は、此の世界全體の思想の變化に伴つて居るのであります。河上博士等の研究も著しく變つて來て居ります。（但し、博士はこれを否認せられてゐるやうです。）前には經濟論のみに集中して居つたのが、最近は經濟論のみに集中しないで、更らにフォイエルバッハからヘーゲルへ遡つて行くといふやうになつて來て居るのであります。其れら、就中、哲學方面のことは、此講演に於いては、全く論及しません。

四　階級鬪爭の理論

さて、唯物史觀辨證法の中最も強い議論であり、露西亞革命以來世界に於て、少くとも歐羅巴に於て、非常な力を持つてゐるものは階級鬪爭の理論であります。此の理論は、唯物的辨證法を具體的に說明するに最も適してゐる。實に眺向きに出來て居る。それは學問上の强味であり、思辨上の威力であるが、それよりも遙かに大きな力となつて居るゆゑんは、この理論がマルキシズムに於ける最も重要なる方面の基礎になつて居ることにあります。前に述べましたやうに、マルキシズムは歐羅巴大戰爭までは イデオロギーとして有力なものであつたが、それはイデオロギーとして有力であつたと云ふだけで、實際の生活を左右して居るのではなかつた。未だ諸國民、諸民族の運命を支配して居るものではなかつた。然るに、今日はさうでなく、マルキシズムを採るか採らないかに依つて、其の國の運命に大變な違が起つて來て居るのです。國內にマルキシストがどれだけ居るかと云ふことは、どんな冷淡な政治家と雖も無關心では居られない。殊に勞働階級に澤山のマルキシストが居れば、政治家の行動は、それを考慮に置かなければならぬやうになつた。戰爭前には勞働運動とマルキシズムとは、必ずしも明に結付いて居るものではなかつた。所が戰爭後は、マルキシズムに指導されない勞働運動は、勞働運動としては極めて力の弱いものである。反對にマルキシズムを指導原理とする勞働運動、マルキシズムのイデオロギーに依つて導かれる勞働運動は、最も戰鬪力の强い、底力の大なるものであることが疑ふべからざる事實となつて來ました。英吉利の炭坑ストライキは、總ての勞働者がマルキシストになつた譯ではなかつたけれども、あれだけの大規模なストライキが續け得られたのは、要するにマルキシズムのイ

デオロギーの支配が英國炭坑夫の間に非常に強かつたからであります。

英吉利の勞働者がどうして斯の如くマルキシズムに耳を藉すやうになつたかと云ふと、それは唯物的辨證法から出て來る所の階級鬪爭の理論が、勞働運動の指導原理として最も大なる力を持つて居るからであります。勞働運動は必ずしも階級鬪爭運動ではない。時としては階級鬪爭運動の形を取つた勞働運動もあるけれども、戰爭前までは勞働運動は必ずしも階級鬪爭運動ではなかつた。主として經濟運動であつた。而も多くは賃銀爭議であつたのです。

勞働爭議は、之を二つに大別することが出來ます。一は解釋爭議、一は將來爭議であります。解釋爭議と云ふのは、爭議の中心點が解釋の相違にあるものであります。勞働者と雇主との間に雇傭關係が成立する時には、雇傭契約と云ふものがある。それは契約書を作つて調印などはしないでも、今日の法律は雇傭關係を一つの契約關係と見て居るのです。其の契約は大抵は雇主の都合の好いやうにのみ出來て居るのですが、兎に角契約關係として當事者双方の意思の合致の上で成立したものといふ形式になつてゐる。而してさう云ふものとして取扱ふについて、雇主と勞働者の間に存在する雇傭契約關係はどう云ふものであるかについて、双方の解譯が違ふことが起ります。これが解釋爭議です。

今までの勞働爭議の八九割までは解釋爭議であつた、日本などに於ては殊にさうである。而して此の解釋爭議の中の主なるものは賃銀爭議であります。それから解雇手當の問題がある。此れは日本の解釋爭議の特色である。西洋には、此の解雇手當の問題は餘り多くはない。兎に角以上二つが數に於ても勞働爭議の七八割までを占めて居る。解釋爭議の第二種は待遇爭議です。即ち勞働時間を短縮するとか、延長するとか、食事時間を三十分にするとか、十五分にするとか或は寄宿舍の問題とかは、何れも待遇に關する爭議であります。解釋爭議は、其二種とも既存現在の契約關係に立脚しての爭議であります。之れに反して將來爭議は將來に關する問題の爭議である。解釋爭議の爭因は過去に於いて取結ばれた勞働契約の條項中にある、其反對に將來爭議の、爭因は將來の問題に存する。例へば今までは此の賃銀で宜かつたけれども、將來は少くとも生活の最低限を保障して貰ひたい如何に不景氣になり、如何に事業が不振に陷つても、或る額以下には、決して賃銀を引下げないと云ふことを、今から豫め約束して置いて貰ひたいといふ。これは最低賃銀又は生存賃銀の爭議であります。これに對して、雇主の方ではそんな事は出來ない。或は將來は賃銀を引上げるかも知れないが、それは其の時に定める、今から必ず一定額は如何なる場合でも支拂ふといふ約束は出來ないと答へる。勞働者の方では、それではいけない、今言明して貰ひたい、或は何ヶ月の後から必ず實行すると云ふことを約束して貰ひたいと言ふ。さう云ふやうに將來の問題に關する爭議がある。此の間の海員の大同盟罷業の焦點は此の問題にありました。あの海員爭議は、最低賃銀を定めて呉れと云ふ要求をして、下船をしてしまつたので、船が動かなくなつた。船主の方では最低賃銀の要求は容れたが、其の代り解雇手當を減らした、勞働者の方では解雇手當の事は言出さなかつた、そこに手拔かりがあつたのです。最低賃銀を定めても、解雇手當を減らされては、勞働者として貰うものは差引善くはならない。此の場合は、雇主の方が悧巧な

やり方をした譯なので、將來爭議を起させない爲めに、現在爭議として解決したのですが、場合に依つては現在爭議を將來爭議に持越すことがあります。東京市電の爭議はさうでありました。當分は此の賃銀で我慢するから、其の代り解雇手當を增して呉れと云ふやうな要求をする、勞働者の理智が發達する程、勞働爭議は解釋爭議から將來爭議へ向つて行く傾向があります。

將來爭議の中で今我邦に於いて重要な殆んど核心的の問題とも云ふべきは、團體交渉權の認容に關する爭議であります。何か爭議が起つた場合に、勞働者が個々に雇主に對抗するのでなく、團體として、組合として交渉することを認めて呉れと云ふ要求に關する爭であります。是が日本では將來爭議の最も重なるものであります。西洋では、此問題は最早殆んど解決し盡されて、團體交渉權を拒むやうな雇主もなく、從つてこれに關して爭の起ることはないのであります。但し米國は別です。現に米國の大企業者たるフォードの日本工場では、團體交渉權を頭から否認し刎付けてかゝつて居るのであります。勞働組合が普及し、其基礎が鞏固となり、其統制が十分に行はれるやうになると、勞働者の勢力が強くなる、それは雇主に取つて不便であるから、雇主の方では成べく組合を交渉の相手方とすることを認めないやうにしたいと希望する。勞働者の方では反對に、團體として交渉することを原則として將來に認めて呉れと云ふ。これが、今我邦の勞資關係に於いて、最も重要な爭點となつて居るのであります。

斯の如く勞働爭議は、解釋爭議から段々將來爭議に移つて來る、手近の小さな事よりも、長い將來に亙つた、謂はゞ根本問題に觸れるやうになつて來ると、茲に何かの指導原理がなければならぬ、何かしつかりした方針目標がなければ、勞働運動は基礎鞏固なものになり得ない。然るに其の指導原理としては、階級鬪爭の理論が其の要求に最も適つて居ると認められるに至つたのであります。是が階級鬪爭の理論が啻に理論としてのみならず、實際上にも非常な力を最近數年間に得て來た所以であります。マルキシズムの外の諸點は捨てゝも宜い、殊に經濟學說の價値論、餘剩價値論などは捨てゝも宜い、或は遠い將來の政治論などは捨てゝも宜い、國家論などもさうである。たゞ階級鬪爭の理論さへ持つて居れば吾々は勝つと云ふやうに勞働者は考へるやうになつて來たのであります。

階級鬪爭の理論がどうして唯物史觀の理論から出るかと云ふと、それは矢張り、正反合の運用から出て來るのです。マルクスは千八百四十八年に公にした『共產宣言』の中に此の道理を明に書いて居る。人間社會の歷史は一言を以て言へば階級鬪爭の歷史であると言つて居る。それは有名な句になつて居ります。マルクスはそれを斯う云ふ風に說明して居る。希臘に於ては奴隷が主人に對して反抗した、羅馬に於ては貴族と平民、封建時代になつては君主と領民との爭があり、資本主義時代の初には、手工業に於ける親方と弟子との爭があり、近世の勞働運動に於ては、ブルヂオアとプロレタリアとの鬪爭になつたと云ひます。

是はヘーゲルの辨證法の最も巧みなる運用であります。但し一面から見て、ヘーゲルの考へた事の外には、何ものも附加へてはいけないと云ふ人から言へば、大なる濫用と言はなければならぬでせう。併ながら廣く思想の流れを見て行く人から言へば、最も巧みなる運用と謂はなければならぬ。何故か

と云ふと勞働運動を指導して、勞働者をして共産主義的の思想、マルクス主義の加擔者たらしめようとするには、マルキシズムのイデオロギーなくしては勞働者は其の運命を進めて行くことが出來ないと云ふことを知らしめるのが一番有力であります。外のどんな理論を持つて來ても、勞働者に必死的の覺悟を持たせるやうなイデオロギーを與へることは出來ないが、階級鬪爭の理論を以てすれば是が出來るとマルクスは考へた。彼の考は果然的中したのです。此の點に於ては彼は實に先を見透した大豫言者でありました。

抑も、階級鬪爭とはマルクスが初めて之を言出したものではありません。マルクスの前に若干の先輩がありました。佛蘭西の學者にもあつた、獨逸の學者にもあつた。殊にマルクスの直接の先輩としては、墳太利のロレンツ・シュタインと云ふ學者があります。此の人は、伊藤公爵が西洋へ行かれた時に、日本の憲法はどう云ふ風にしたら宜いかと云ふことを諮問された人であります。當時海江田信義(後の元老院議官)といふ人を學生として、シュタインに就いて學ばせました。海江田氏は其の聽取した講義を日本語で出版しました。『須多因先生講義』と云ふ書名で、たしか、元老院の藏版にかゝる本です。それが日本で初めて憲法を作る時の御手本となつたと言ふことです。卽ちシュタインから教はつた所に依つて、日本の國體に合した憲法が出來た譯なのですが、其のシュタインは一方に階級鬪爭を說いて、マルクスよりも數年前に之に關する著書を出して居ります。シュタインは君主政治の最も熱心なる擁護論者でありますが、其の人に依つて階級鬪爭が說かれたことは、餘程面白いことゝ言はなければならぬ。彼は早くから佛蘭西に留學して、佛蘭西の社會主義運動の狀況にも精通した人であつた。當時獨逸の學者は、社會主義の事などは殆んど知らなかつた、それに氣がついたシュタインは、先覺者と言はなければならぬ。のみならず彼は、佛蘭西に二年ばかり滯在して居る間に、どの學者も及ばない位に、十八世紀の終から起つた社會主義、共産主義の思想をすつかり究め、更に社會主義、共産主義運動の眞相をも究めたのであります。

社會主義といふ語は英吉利で始めて用ひられたのです、それに反して共産主義と云ふ語は佛蘭西から始まつたものであります。思想の上から申せば、社會主義、共産主義と判然區別せず、兎に角現社會に對して根本的批判を加へると云ふ考へ方は、佛蘭西思想界の產物と申す可きでありまして、而して私の解するところによれば、其れは社會主義たるよりも、むしろ何れも共産主義と目すべきものであります。英吉利にも社會主義の思想がありましたが、それは佛蘭西の哲學的、思辨的の共産主義思想に刺戟されて發達したものでありました。思潮としては、佛蘭西の產物であつた。而して其れは、自由・平等同胞主義の徹底化としての共産主義であつて、ドイツ理想主義の社會觀から生れ出でた社會主義ではなかつたのであります。階級鬪爭と云ふことにも、明には言はなくても、さう云ふ考へは橫はつて居つた。勞働運動、社會運動、社會問題は階級鬪爭と云ふ事實を認めなければ解決することが出來ない、階級鬪爭の事實があることを十分に知るにあらざれば、社會問題の解決は出來ないと云ふことを看破して佛蘭西から歸國したのがシュタインであつた。そして彼は『佛蘭西に於ける社會主義並に共産主義』と云ふ大

きな書物を公けにしました。それはマルクスが二十五六歳の時分のことでありますから、マルクスは此の書物を讀んだらうと思はれます。マルクスは其のシュタインの思想のみを學んだのではありますまいが、兎に角階級闘爭と云ふことを初めて學問的に述べたのはシュタインで、マルクスはシュタインからこれを學んだと言つてもよいかと思ふのであります。但し此點については贊否兩論が喧しいのであります。私は色々取調べた結果肯定論の方に傾いてゐるのです。

シュタインは階級闘爭を事實として見た、彼は自己の立場に立つて、社會問題、社會運動に於ては階級闘爭の事實を十分認めなければならぬと云ふことを詳しく說いた。所がマルクスは之を事實として說いたのみならず、之に社會哲學的の解釋を與へたのです。事實として認められるのみでなく、階級闘爭の理論は、やがて將來の社會を動す所の最も大きな力になる、將來の社會運動の指導原理となると云ふことを說き、何が故に然るかと云ふことを根本に遡つて究めて、之に社會哲學的の基礎を與へたのがマルクスです。從つてマルクスの說いた所と、シュタインの說いた所とは、實際上の重要さに於ては非常な違があるのです。

マルクスはどう云ふ基礎づけを與へたかと云ふと、之をヘーゲルの辨證法に結び付けて、凡そ人間の社會があれば、必ずそこに階級が出來ると云ふのであります。其の階級と云ふことに就ては、マルクスは判然とした定義を下して居ないので、人に依つて色々に言ひますけれども、先づ間違のない所は、マルクスの謂ふ階級は、可なり範圍の廣いもので、經濟上に於て利害を共にして居る人々の團集、相對抗する利害を持つて居り、また事實に於て相對抗する所の團集である。一つの階級に屬する者は共通の利害を持つて居る、それに對抗する階級は、亦共通の對抗的利害を持つて居る、而もそれが敵對關係にある、之を名づけて階級と謂ふ。其の意味に於ける階級は、人類の社會が起ると共にある、さうして是等の階級は、決して團栗の脊比らべ的に併立して居るのではなく、其の中の或る階級が他の階級を抑へ付けて、自分達の階級を伸して行く、權力を自分の手に握る、それが階級の性質である。何となれば階級は利益の支持と對抗から成立つて居る、自分の利益を支持して、之に敵對する利益に對抗して行かうと云ふのであるから、共存共榮など、言つては居られない。先方を抑へ付けなければならぬ、相手の階級を抑へ付けるにあらざれば、自分の利益を支持することは出來ない、從つて階級の性質は闘爭的である、共存共榮的ではない。所が社會進化の理法は、正反合の道理に依るものであるから、或る階級が段々勢力を得て來ると、自ら反對の勢力も强くなる、一方が絕頂に達すると、それに敵對する勢力も强大となる。相對抗する勢力が絕頂に達すると、そこに社會の進化がある、社會が一段上に昇る、上へ昇つて勢力を得て、其の利益を伸張すると、又對抗する階級が出て來る。併し是は前の階級ではない、卽ち正に對する反、反に對する合の力が段々强くなつて之を倒す。倒して上つて行くと又之を倒す、又上ると又倒す。さう云ふ風に、正反合的の階級の闘爭の連續が人間社會の歷史である。昔は奴隷階級が主人の階級に對し、小作人の階級が地主に對し、小さい商人が大きい商人に對し、小さい資本主が大きな資本主に對して、階級を成して反抗して居つたが、今や左樣な幾つもの細かい階級は無くなつてしまつて、二つの全然相容れな

い利害關係を持つた大きな階級が對立するやうになつた。其の一方の階級はブルヂオアの階級、他方の階級はプロレタリアの階級である。かくて、ブルヂオア對プロレタリアの階級鬪爭が始まると云ふのです。マルクスが此說を唱へ出した當時に於てはそれを意識した人はまだ極めて少數であつた。又實際の事實としても勞働爭議は階級鬪爭的ではなかつた。解釋爭議、賃銀爭議、待遇爭議が多かつた。當面の問題が多かつた。それが段々將來爭議に移つて來るに從つて、階級意識が次第に目覺めて來る、階級意識が盛んになれば階級の對立從つて階級鬪爭と云ふ考が强くなる。

マルクスが『共產宣言』を書いた時分には、未だ左樣ではなかつた。其の後獨逸に於ては、社會民主黨がマルクスの思想、殊に階級鬪爭の思想を宣傳したので、勞働者は吾々の戰ふのは單なる解釋爭議であつてはならない、吾々のストライキ、吾々のサボタージュ、吾々の雇主に對する對抗は、より深い意味を持つたものでなければならないものである、卽ち階級鬪爭の手段として勞働爭議を行ふのでなければ、永久に吾々の運命を改める事は出來ないと考へるやうに、次第に養成されて來た。世界大戰爭の起つた當時は、勞働者に對して殆ど拔け道の無いやうに此の思想を詰込んでしまつた。それまでは階級鬪爭の考を詰込んで來たのであるが、今度は此方から押掛けて向つて行くやうになつた。階級鬪爭論でなければ、勞働運動を盛んならしめて、效果を擧げることは出來ない、マルキシストにならなければ勞働運動は駄目だと云ふ風に、こつちから向つて行くやうになつた。マルクスは明に今日あることを豫期し、豫言して居つた、確に先見の明があつたと言はなければならぬ。所が彼の社會哲學に於いては、此の階級鬪爭論は非常に大なる發見であると同時に、大なる矛盾、根本的の矛盾を含むのであります、私の所謂常山の蛇の第一幕は玆に於て開かれるのであります。明日其御話を致しませう。（以上第一回講話）

五　階級鬪爭の始期についての吟味

昨日の御話の終に於きまして、マルキシズムに於ける階級鬪爭理論は重要な理論であることを、御話し、同時に是は一つの大きな矛盾に陷つて居るものであるといふことを述べ掛けたのでありますが、今日は其の矛盾とはどういふことであるかといふことから御話を申上げて、社會經濟史研究の立場から極く簡略に、唯物史觀の吟味を致して見ようと存じます。

其の顚末は稍〻ヤヽコシイ事であつて、私が本年の始に出しました『唯物史觀經濟史出立點の再吟味』（改造社刊行）と題する書物があります。唯物史觀に依る所の經濟史、卽ちマルクスの說いた所の經濟史の抑〻出立點なるものは、從來は餘り疑を挿まれて居なかつたのであるけれども、私を以て見ると、それが餘程問題である。出立點が問題となるから、從て到着點が問題となる、此の書物の少くとも一番始の章だけを御讀み下さると、何が其の問題であるかといふことが直ぐ御分りになりますが、今簡單に申上げて見ませう。

抑〻唯物史觀に依る階級鬪爭理論は、前述の通り人類の歷史は總て階級鬪爭の歷史である、斯ういふ所から書起してあるのであります。此の文句は有名な共產宣言の抑々劈頭に現はれて居る文句であ

ります。然るにエンゲルスが後から其一節に註釋を一つ加へて居るのであります。マルクスとエンゲルスとが共同で共産黨宣言を出した時には、人類の『歴史は階級闘爭の歴史であると唯だ書放しであつたのであるが、何時の頃から此の脚註を入れましたか、是はまだ一寸比較が出來ませぬが、多分マルクスが死んでから後、エンゲルス一人が生殘つて、後に出した新しい版（恐らく一八八三年版）に於て加へたのであらうと思ひます。小さな註でありますが、決して輕視するを得ざることが加へてあるのであります。其の註とは次ぎの如きものであります。

『玆に歴史といふのは、正確に言へば文書に依つて傳へられた限りの歴史の意味である、共産宣言起草の時、一八四七年には社會の前史、記錄せられた歴史に先つ社會の組織のことはまだ殆ど知られて居なかつたといつても宜い位である、一八四七年以來、露西亞の學者ハックストハウゼンは、露西亞に於ける土地共有制度を發見し、マウラーは同じ制度を以つて、總ての獨逸民族が歴史的に出立した社會的基礎であることを證明した、さうして土地共有制度を持つて居る村落團體が、印度から愛蘭に至るまで――東の端から西の端までといふ意であります――社會の原始形態であるといふことを見出すに至つた、而して終には此の原始的の共産社會の内部の組織は、ゲンス（日本で謂ふ昔の氏に當ります）の眞の性質と、其の氏族の中に於ける地位とに關する、モルガンの最終完成的發見に依つて明にされた。特立的にして、而して終に互に對抗せる諸階級に社會が分裂されたのは、ゲンス共産制度の解消と共に始まつたことである』

是が大なる違ひを惹起したのであります。共産宣言の初の文句に依れば、一の取除けなく、人間に歴史が在ると同時に、階級闘爭があつて、階級が互に闘爭した、人類の歴史は階級闘爭と共に始まつて、今日まで階級闘爭の連續である、斯やうに、解釋すべきであります。然るに今讀上げましたエンゲルスの註釋に依るとさうではない、階級闘爭は人類の長い歴史の途中から始まつたものと解釋せねばならぬのであります。

Aは人類の一番初の時代であります、何時とは申上げられませぬが始の出立點であります、Bを此れに次ぐ時代、Cを將來とします。初の共産宣言の言表はし方に依れば、Aから階級闘爭が始まつて、ずつと今日を經過して、更に將來まで卽ちABCを通じて續く。而して將來の或點、例へばbに於て社會主義の時代が始まり、更らにb′點に至つて階級闘爭が終り、終つた時から共産主義時代が始まる、斯ういふことになつて居ります。

所が今のエンゲルスの註釋に依りますと、さうではなくして、人類原始の時代には、階級闘爭はなかつた。此處にゲンス共産制といふものがある。此のゲンス共産制度は或る時期に於て消滅して、其の消滅した時から階級闘爭が始まる、卽ち右圖で云へば、aが階級闘爭の出立點である。斯ういふことになる、さうすると階級闘爭の始まる前に何百年であつたか何千年であつたか計られないが、兎に角ゲンス

共産制度時代といふ或る時期（圖で云へばA）が長いか短いかあつたといふことになるのです。

唯物史觀に依る經濟史の出立點は、xにありとするのか、aにありとするのか、明瞭でない。左樣な解釋が下せれば、果して何方にマルクスの考があるか、エンゲルスは明に出立點を手前のaに置いたが、マルクスも同じ考であつたか、それとも出立點をxに置いたのか、これが大なる疑問となるのであります。

是が軈て階級鬪爭の理論といふものゝ性質を、吾々に示したものであります。卽ち、階級鬪爭といふことを骨子として居る唯物史觀辨證法の妥當する範圍は、人類と其の運命を共にする程のものであるか、それとも人類の長い思想發展の中に於ける、又人類の現實の生活發展の長い經過の中に於ける、或る一つの時期に過ぎないのか、何方であるか、何れがマルキシズムの眞意に適ふものであるか、これが問題となるのであります。

マルクスの眞に考へて居つたことは何方であるかといふと、マルキシズムの本旨、マルクスの考から言ひますと、唯物史觀辨證法で說明し唯物史觀辨證法の骨子となつて居る階級鬪爭といふものは、決して人類の運命と長さを同じくするものではあり得ない。人類の運命と全然同長同延長のものではなくして、其の長い經過の中の唯だ或る階段だけを言つて居る可き筈のものであります。卽ち始あつて終あるものである。然らば共産宣言の始の文句よりも、寧ろエンゲルスが後に註釋を加へて、之を直した意味の方が當つて居ると考へられるのであります。卽ち右の圖で申せば、階級鬪爭は、xに始るのでなくa點から始まると見るべきものと云ふことになります。

六　社會制度の變遷

ゲンス共産制。婚姻制度。私有財産制度

ゲンス共産制とは如何なる事を言ふのかと申しますと、是はマルクスが新しく發見したのではありませぬ。マルクスより先輩の學者、或は同時代の學者が段々研究して、凡そ何處の民族でも、昔に遡つて研究して行くと、マルキシズムが最も仇として狙ふ私有財産制度少くとも土地の私有制度といふものは存しなかつた、土地に付ては明に共有であつて各〻が分けた私有の土地を持つて居るのでなく、一定の土地は一つの部落か、村落か、或はゲンス（氏族）か、兎に角何等かの社會的團集、共同體の共有であつて、それが長い間續いたか、短い經過の中に消えたか知らぬが、兎に角消えてなくなつて打壞れた、その後へ出來上つたものが、土地の私有制度なり、又は財産の私有制度なるものである。始があるものならば終りあるものであつて、何時か是が消滅するといふことは、理論上容易く考へられるのであります。

從來の法律學、政治學、經濟學に於ては、私有財産制度なるものは、神聖にして侵すべからざるもの、今日の社會のみならず、人類の社會、人類の國家の大黑柱であり、基礎であり、又左樣であらねばならぬものである、故に此の財産私有制度を壞すといふこと、之を共有制度に變へるといふことは、卽ち社會の基礎を破壞する所以である、國家の基礎を危うするものであるといふ考を固持し來たのであります。ところがマルクスの出る以前、既に十九世紀の前半、千八百二・三十年代から、歐羅巴に於ける社會學者、社會經濟

史學者、法制史學者、政治史學者、憲法史學者等の研究は、其の大多數を擧げて左樣な事は決して無いものである、歴史を遡れば、昔はどの民族も、どの種族も、財産私有制度といふものは持つて居らず、財産は共有であつた。就中土地の共有といふことは、世界の東といはず、西といはず、卽ち印度から愛蘭に至るまで、普く行はれた制度であるといふ事實を、段々擧げて來たのであります。今日の社會の土臺である私有財産制度なるものは、數百年の間續いて發展し來つたものたるに相違ないけれども、併ながら既に始あつて、人類の何千年かの歴史の中の一時期にしか存在しないものとすれば、其の制度が又人類の進歩發達と共に段々なくなつてしまふといふことは十分に考へ得られることである。少くとも是は萬古不拔の制度でないことだけは疑ふ可からざることとなります。私有財産制度は無くとも、社會は立派に維持せられ、國家は安泰なる基礎の上に立つことの出來る時代の有得るといふことは、理論上首肯し得られることである。社會の制度は、總て皆進化し變つて來て居るものであつて、不易の制度といふものは、一つも之を擧げることが出來ないことは、殆ど一般に認められて居る事實である。皆變つて來て居る、家族の制度、財産の制度、其の相續の制度、結婚の風俗皆變つて來て居つて、社會進化の眼を以て觀ると、不易なる制度といふものは一つもない。其内について最も明に分つて居るのが、人類婚姻の歴史であります。婚姻の形の變化は、軈て吾々の生活の基礎をなす家族制度の變遷を伴ひます。家族制度の變遷は、又財産制度の變遷と或は先となり或は後になつて伴つて來て居るのであります。此の社會を形造る單位たる家族制度が、既に幾度か變遷して來て居るものでありとすれば、それに依つて出來上つて居る社會制度一般も、亦た幾たびか變遷して來たものであることは、一目瞭然たることとなります。

今、簡單に婚姻制度の變遷を述べて見ませう。極く昔に於ては婚姻といふ制度は、全然無かつたと主張する學者もあるが、是は一部の學者の説であつて、定説とはなつて居りませぬが、マルキシストの大多數は、其説を採用いたして、婚姻といふことはなかつた、所謂無婚時代、或は雜婚亂婚など唱へられる狀態が、一般原始の男女關係であつて、それから漸次に奪婚又は買婚といふことが起つたと説くのであります。女子は經濟上に於て有用なる働きを爲す一つの價値ある物件、有價物件と考へられた、隨つて只で之を人に遣ることを肯んじない。或は暴力に訴へて之を奪つて來るか、或は代物を出して之を買つて來るので、今日遺つて居る制度にも、奪婚時代のことを想はせるやうな事實がある。例へば新婚旅行、密月旅行は奪婚時代の遺物であると言ひ得られる。他の氏族に行き、他の家族に行つて、其處の娘を奪つて逃出して、其儘自分の家に歸つて來る、後から追つて來るから、自分の家には歸らないで、何處か遠くに暫く身を匿して、さうして馴染んだ上で、初めて家に歸つて來る、其の風俗が今も殘つて蜜月旅行となつてゐる。婚姻すると家へも歸らず、里へも寄らず其儘溫泉や海岸に新婚旅行と洒落るのは、文明の習俗たるよりもむしろ奪婚時代の遺風である、と説きます。

日本でも、婚姻の際には嫁さんを伴れて逃出す形を爲し、嫁の里では追駈ける眞似をする、無事に夫の家まで嫁さんを伴れて歸る、後から追駈けて來る嫁の里の人に摑まらなければ、そこで婚姻は有效なるものと看做されて、始めて酒宴を開いて、大に祝ふといふやうな風俗の遺つて居る所があるさうであり

ます。是なども右の解釋に從へば、奪婚時代の遺物と謂はなければなりますまい。

或は羅馬の歴史を繙いても、大規模なる奪婚が行はれて、羅馬の社會は是から起つたといふことが、普通の萬國歴史の本には書いてある。あれは事實が餘程違つて居りますが、左樣な見方もされ得るのであります。然るに其の奪ふといふことは、長く續かないから、金を出して買ふといふことになる。卽ち身ノ代金を出すといふことになる。例へば今日の日本に遺つて居る結納の制度といふものは是である。前に約束をして結納を贈るのは、お前さんの娘さんを買ひましたといふ、謂ば手付金である。所が女子の地位が段々高くなつて來て、奪ふといふことも、又金を出して買ふといふこともしなくなる。併ながら矢張與へる親から言へば、是は價値ある一つの物件でないまでも、半物件であるから、容易くは手放さない。從つて其の間に仲人が入つて色々交渉を重ねて、差上げませう、貰ひませうといふ。卽ち渡す方は娘を人に遣るといふ、此の時代は卽ち買婚の次の貰婚時代である。ホンの形ばかり結納金として、買ふと言うては失禮であるから、詰りお印として昔買つた時の形見を僅かに存して實は只貰ふ。其の代り買つた嫁さんのやうに、酷いことをしないで、只だ來て呉れたといふので大分大事にされる。女權が幾らか擴張して來た。西洋の言葉でも to give a daughter in marriage 娘を嫁に遣るといふことを言ひます。貰ふといふことは、聞いたことがありません。日本では嫁に遣ると言ひ、それから娶る方は貰ふといふ、貰ふといふのは卽ち只貰ふといふことである、「メトル」といふのは支那の字でも女を取ると書く。此娶といふ文字は顚倒すると女を取るである。買婚時代を過ぎて、貰婚時代になつて貰ふといふことも矢張娶るといふ。昔は奪つて來た、今日は合意で貰ふ、其間に金を出して買ふ時代があります。第一は暴力的に取り、第三は合意的に承諾を得て取る。只貰ふのは何方も同じである。遣る取るといふことは、丁度價値ある物件を扱ふと同じに觀て來たもので、是が今日の婚姻制度の發達であります。次に來る時代は、女を私有財産的に見ない時代であります。婚といふ考へ方は、盜んで來るか、買つて來るか、貰つて來るか、此の三つの觀方しかなかつたが、此時代に至つては、女はモハヤ物でないから、盜むのでも取るのでも貰ふのでもなく、兩方から相寄合つて一緒になる。全く平等のものが一緒になるのであつて、今までの婚姻といふ考へ方を以てしては言表はされない、卽ち契約の關係であります。全然自由の意志に依つて成立するものでなくてはならないことゝなります。

斯の如くに婚姻の制度が變つて來たことは、財産制度の發達と相伴つて居るのである。財産の制度も始は奪ふといふことが主であつて、次で買ふといふこと、貰ふといふ時代を經て更に互に相寄るといふことになる。民法上の所謂夫婦財産制度、是も經濟上から見て非常に興味のあることでありますが、其點迄述べると大分長くなりますが、婚姻制度の發達に伴つて夫婦財産制度も變つて來たのである。妻が財産の一部分と看做された時代には、財産の一部分であるものが、財産の主體となる譯がないから、其の當時の夫婦財産制度といふものは、妻に何等の權力なく、夫のみが權力を持つ財産制度卽ち夫のみの所有、管理の夫婦財産制が行はれます。併し妻が若干の財産を所有するに至れば、妻の特有財産權を認めなければならない。此の間に介在するものが勞働力としての妻である。夫は財産を持つ且勞働

を爲す、妻は財産は持たないが勞働力を携へて嫁に行き、而して夫婦共稼ぎで財産を作れば、それは夫のみの財産ではあり得ない。妻にも若干の權利ある制度卽ち共同管理の夫婦財産制度であらねばならぬ。然るに今日の社會に於ても、夫婦共稼を營まないところの夫婦關係に於ては、婦人は依然として財産の主體に非ず、勞働力も亦た持つて居ないから、事實は夫が全部を所有し管理する夫權萬能の夫婦財産制度（卽ち我日本の民法に所謂『法定財産制』）が行はれます。其れは、實際の事情には段々合はなくなる、何となれば妻の獨立の財産は、既に認められて來て、又獨立の財産を段々持つやうになる。それは嫁に行く時には持たなくても、嫁に行つて勞働の收入を貯蓄して、財産を所有することになれば、夫のみに自由の處分を許すべきでない。夫婦合意でなければ財産を處分する能はずとするか、更らに進んで妻は自由意思に依つて勝手に財産を處分し得るやうにならなければならないことになつて來た、其點は唯物史觀に依つて能く說明することが出來るのであります。卽ち婚姻制度といはず、家族制度といはず、あらゆる社會制度は總て經濟關係が基となつて變つて起つて來るのである。

其婚姻制度の發達に於て、女子の地位が漸次高まつて來たのは、畢竟するに女子の經濟上に於ける地位が高まつて來、その經濟上の重要さが加はつて來たからであつて、女權擴張といふことは可なり昔から主張されて居る。男女を同權として取扱ふといふことは、二千數百年前に於てプラトーンが其の理想國に於て既に說いて居る。それ以來女權擴張論者は少からずあつたけれども、それ等は唯だ議論に止まつて居つた。丁度共産主義は、マルクスが出るまでは單なる議論に止まつてゐた如くでありました。然るに今日は議論の時代ではない、婦人の家族制度の上に於ける地位がどんどん高まり、遂には政治上の地位も男子と同じやうに漸次進みつゝある。選擧權の如き男子のみが之を持つて居るといふことは全然間違つて居る。婦人と雖も男子と同じ選擧權を持つべき筈のものである。所が今日の婦人に選擧權を與ふるにしても、時期尙早であるとか、或は之に制限を付せなければならぬといふ議論が、可なり有力である。是がもう少し經つと、何であの時には、あんな馬鹿なことを言つて居つたかと、必ず言ふに相違ないが、今日ではまだ是が相當眞面目な議論、而も愼重の議論と聞かれて居る、それだけ婦人の經濟上の地位が高くなつて居ないのである。歐羅巴の先進國に於ては、さういふことは既に問題ではない。政治上に於て男子と女子の區別を付けるといふことは、これを考へるさへ間違つて居るといふのは、事實上に於て、婦人が産業上大に活躍し、産業上に於て地位を高め、財産の所有者としても、婦人の重要さが加はつて來たからである。是がなくては、依然として經濟上に於ける男子の從屬者であり、否な男子に依つて養はれ、自ら主となつて經濟上の働きをするものでない限は、どんなに政治上に於て、宗教上に於て、法律上に於て婦人の權利を主張しても、それは實際の事實とならない。議論は左樣盛でなくても、婦人が實際經濟上に於て働くやうになれば、婦人の地位は漸次高まり、婦人の政治上、社會上、家族上に於ける權力は、男子と同じ所まで當然進むに決つて居るのである。之を唯物史觀を以てすれば確然と解けるのであります。此の如くに、有ゆる人類社會制度の發達は、その最も主なる原因を經濟上に持つて居る。經濟上の理由が具はらなければ、如何に外の事を改良改革しても、それは畢竟無效である。

經濟上の實が具はつて來れば、他の點の改良改革を行はないでも、自ら改善改革の實が擧つて來る。これが唯物史觀の敎へるところです。

斯の如くに人類社會の制度といふものは、歷史的に變つて來るものであるが、其始に於ては、今日の如き私有財產制度ではなくて、共產制度であつたと說くことはエンゲルスの註釋に依つて明になつたが、マルクスの考に於ても既に左樣であつたとして見ると、今日の社會の中軸になつて居る私有財產制度は、決して萬代不易の制度でなく唯だ途中の謂はば過渡時代に起る現象に過ぎない。ゲンス共產制度の存在して居つた時は、無論私有財產制度はない。其の如くにまた、社會主義の時代が終つて、共產制度になれば私有財產制度は無くなつてしまふ。人類の長い經驗に於て、人類の長い文明に於て、私有財產制度時代は一つの序論たるに過ぎない、一つの過渡の狀態に過ぎない。打勝たるべきもの、克服せらるべきものたるに過ぎない、決して本質的のものではない。人類の總ての發達が不十分であり、人類の濟力の發達、其れに伴つて、社會・政治・法律の發達が不十分である間こそ、私有財產制度といふものが是非なくてはならないのであるが、人類が本當に發達して、有るべきだけの發達をなせば、私有財產制度といふものは過去の事實となる、飜て見なければ見出し得ない過去の制度になつてしまふのであると。唯物史觀は斯く說くのであります。

七　人類社會發展行程中に於ける階級鬪爭の運命

そこでマルクスは明に次ぎの如く言つて居ります。今までの人類の發達を見ると、そこには色々變つた社會制度、社會の形があつたけれども、大摑みに之を大別して見ると、亞細亞的、希臘・羅馬的、封建的、それから近代ブルヂオア的等の形がある。是等の形は何れも皆敵對的の形態であつた、殊に相異つた力が互に鬪ひ合つて居る戰爭狀態であつた。ところが、此の最後のブルヂオア社會の中に於て、此に取つて代つて、新に興るべき勢力が、段々孕まれつゝある。是が發達すればブルヂオアの社會は無くなつて、プロレタリア社會となる。さうすると其處には階級といふものは無くなる、階級が無くなるから、階級鬪爭が無くなる、階級鬪爭が無くなると共に、一つの階級が他の階級を壓迫するといふ事實が無くなつて、人間は如何なる形に於ても、一方が他方を壓して、始めて社會を成して居るといふことが要らなくなる。斯くなれば財產の私有といふことも無くなつて、完全なる共有制度が興つて來て、共產主義社會が實現される。此處に到つて始めて人類の本當の歷史、適當な歷史が始まるのであつて、此處までは人類社會から見れば一つのプレヒストリーに過ぎない、本當の歷史でない前史であると、斯く說いて居ります。故に、此の觀方から言へば、今日はまだ本當の社會に入つてゐない準備時代に過ぎないのであります。露西亞の如きは稍〻一步進んで、本史に入り掛けて居るが、併しまだ本史には入つては居ない。共產主義が實現せられて居ないからである。共產主義が實現せられて、階級が無くなり、從て階級が階級を

壓迫することが無くなり、階級と階級が鬪爭するといふことが無くなつて、其處に本當の圓滿に調和した人類社會が出來るのである。斯うマルクスは說くのであります。

此の觀方から言ひますと、階級鬪爭は、前申す通りに、人類の運命と同延長のものでないのみならず、人類の運命がまだ十分に伸びて居ない時に於てのみ見出される現象である。故に本當の人間の使命、人類の高い立場から觀れば、階級鬪爭なぞのあることが間違つて居るといふことになる外はありません。然らば何故にマルクスが、此の階級鬪爭を以て本體とする唯物史觀を以て、彼の社會哲學としたか、是は大なる矛盾ではないかといふことになりませう。彼が力瘤を入れて、否なマルキシズムと言へば、第一に人がそれを直に想ひ出さずには居られないところの階級鬪爭の理論といふものは、本當の人類の社會哲學ではあり得ない。人類の發達の不完全な間に於てのみ見出さるべき事であつて、人類が十分發達すれば、それは全然消滅してしまふべき現象であるのです。

然らば過去に於いて數百年續いたことではあるけれども、人類の本來の運命、約束と同延長に非ざる階級鬪爭を理論的根柢とする所の唯物史觀辨證法なるものは、吾々の社會哲學としては甚だ賴りないものでありはしないか、其の妥當性といふものは極く限られたものであると謂はなければならぬのでないか。然るに左樣に限られた妥當性しか持つて居ない唯物史觀辨證法が、マルキシズムの最も强い武器であり、これが世界の革命的プロレタリアを今指導して居る指導原理であるといふことは、甚だ以てをかしなことではないかといふ問題が自ら起り來らざるを得ないでありませう。これはマルキシストに取つては、或意味から言へば致命的の問題であり、或意味から言へば殆ど解決し能はざる程の難問題であると言はなければならないでせう。公平に第三者の地位に立つて、マルキシズムを研究する者から言ひましても、マルクスが果して眞面目に左樣考へたのであらうか、若し眞面目に左樣に考へたとすると、其の矛盾は何處に其の原因を持つて居るのであらうかを究めなければならないのであります。マルクスの說が間違つて居るといふことを、唯だ頭ゴナシに言ふことは易々たる話である。併しそれは幾ら間違つて居るといつて主張しても、マルクスの指導精神に依つて導かれて居る今日のプロレタリア階級は、それはお前の方から言へば間違つて居るが、俺の方から言へば間違つては居ないと言つて、結局水掛論に終るのである。人類の長い運命から觀、人類の最高の使命、任務から考へて見て、どれが吾々の指導原理とすべき社會哲學であらうかといふ點から、マルキシズムの社會哲學に對して批評を下すのでなければ、本當の批評とはならないのであります。

そこで、マルクスは其の著書の中には書いて居りませぬけれども、可なり早い頃――一八五二年――或人に與へた私信の中に斯ういふことを明に言つて居ります。近世社會に於て階級が存在して居るといふこと、階級は絕えず鬪爭して居るものであるといふことを發見したのは、決して私の功績ではない。ブルヂオア的の歷史學者等は、吾々より先きに階級並に階級鬪爭の事實を明に知つて居り、而して其歷史的發達を述べて居るのである。私が自分の功績として、敢て任じて居る所のものは、決して是等の發見其の事ではなくして、次の二つの事實にある。第一は、階級の存在といふものは生產の一定の歷

史的發展の階段に係はつて居るといふこと。第二は此の階級闘爭なるものは、必然的にプロレタリアの獨裁政治――現在の露西亞が行つて居る勞農政治はそれであります――に導くものであるといふこと、これである。而して此の獨裁政治といふものは、軈て又一切階級なるものを止揚する、階級といふものが全滅するといふことに導く運命を持つて居るものであるといふこと、隨つてそれは階級なき社會の出現の原動力であるといふこと。此の二つを發見したのが自分の功績である。斯う明に言つて居るのであります。

階級闘爭の發見若くは認承といふことが、マルキシズムの本體であるのではなく、階級階級闘爭に、一定の解釋を與へたことが卽ちマルキシズムなのであります。マルキシズムの本體は、階級階級闘爭の理論を立てたといふことではなく、階級階級闘爭に就いて、或種類の理論を與へ、或特定の解釋を與へたといふことにある。其の解釋とは、第一に、抑も階級の存在することは、必ず生產の一定の關係から起るものであると云ふことです。而して、此意味に於ては、階級といふことは、二つの意味に取られ得るといふことを注意しなければならないのであります。前段に階級といふものは、共通の利益を持つて居る人、而してそれに對して異つた利益を持つて居る他の團集があつて、其の團集と對立し得ないといふことを意識して居る團集をいふ、とこのやうな定義を下して置きましたが、此のやうに更に詳しく見て行きますと、玆に二つの甚だ似寄つた併ながら事實上は非常に違つた解釋が成立つのであります。第一の解釋は、階級といふものは經濟上に於て、就中經濟上の生產に於て、偶同じ利害關係を持つて居るものが、其の共通の利害關係を擁護し、之を扶助し、之を防衛する爲に、其の目的の爲に形造る所の團集である。斯ういふ意味にも取られる。是が階級についての第一の解釋であります。普通言ふやうに、勞働者は資本家の爲に虐げられて居るといふ點に於て、勞働者は共通の利益を持つて居るものである。其の虐げられて居るといふ具體的の狀態に於ては、それ〴〵異つて居るが、虐げられて居るといふことは同じである。勞働者は、或は一日に五圓の日給を取る人もあるであらうし、或は一日一圓より取らない人もあらう、或は手先の仕事をして居る人もあらう、高尙なる頭腦を要する仕事をして居る人もあるであらう、各々違つて居るが、併ながら彼等は皆雇主に對しては共同の利害關係を持つて居る。卽ち雇主は共同の敵である。雇主は勞働者達の賃錢を減らさうとする、働き時間を延ばさうとするが、自分達は成るべく賃銀を餘計貰ひたい、成たけ働き時間を短くしたいと希望する。此の點に於て勞働者は、利害關係を一にして居るから、勞働組合を組織して、雇主に對抗しよう、若し要求を出して聽かれなければ、ストライキをしよう、サボタージュをやらうといふ。自分達が利害を共同に持つて居るから、その共同に持つて居る利害關係を、其同的に防衛し、或は主張する爲に取る共同動作の本體としての階級といふものも成立ち得るのです。

右の意味に於ける階級といふものは、マルクスの言つて居る階級ではない。又た前に述べたヘーゲルの社會觀念に合する、有機體的の考から見た階級でもない、英吉利流の個人主義的の考から來た階級であります。何故とならば人は皆個人的の利益を持つて居る、其の個人的の利益は個人として防衛す

るより、共同の階級として防衛した方が、より能くより有力に出來るからさうしやうといふのであつて、其の動機は何處までも個人的の利益を中心とする。英吉利の個人主義的觀念は何處までもそれである。個人主義の社會觀念に哲學を與へた者は英國の哲學者ホッブスである。ホッブスに依れば、人は皆自然の狀態に於ては、狼の如きものである。各人相互に利害を異にして居るものであつて、絶えざる戰鬪の狀態にあるものである。『總ての者の總ての者に對する鬪ひ』是が人類の最も自然なる狀態である。然るに人間の理知が發達すると共に、それでは御互が損である事を、發見して來て、そこで相互に約束をして、社會を形造り國家を形造つて御互の利益を出來るだけ伸暢する。と共に他に依つて侵されることを出來る限り防ぐ爲に、或程度までは、個人の主張する自由を制限する事を承諾して出來て來たもの、是が社會であり、國家である。故に國家といふものは、何處までも個人が本である。個人が集つて國家が出來、個人が集つて社會が出來て居るのであつて、根本觀念は何處までも個人にある。國家存立の理由も、社會存立の理由も、畢竟するに個人の利益擁護といふ事に存すると云ふのです。是が個人主義的の國家觀、個人主義的の社會觀である。此の個人主義的の社會觀から言へば、階級といふものは今のやうな解釋より外は下せないのであります。

所が階級についての第二の解釋はさうではないのであります。個人としては、或は利益が一致しないことがあるかも知れない。大部分は一致するが時としては疎隔することがあるかも知れぬ。しかし、個人が共同の利益を意識的に共同に防衛する爲には、自分達の個人的の利益は假令害され、或は滅ぼされても尙且つ厭はない、共同の目的の爲には身を捧げるといふ意識の下に出來て居る團集、之を名付けて階級といふのであります。是は明にヘーゲル流の有機的の獨逸理想哲學的の國家觀、社會觀に一致する階級觀であるのであります。

マルクスの言つたことの中に第一の意味に解され易いこともあることはある。併しそれはマルクスの本意でないことは明である。マルクスの本意は、第二の階級觀、即ち個人主義的ではなく、全體主義的の、國家主義的の、即ち正確な意味にて云ふ社會主義的の階級觀であるのであります。個人が先でなく、全體が先である。個人よりも階級が先である。故に階級の存立の爲に必要なるものは、階級意識を植付けるといふこと、階級意識を強くするといふこと、之を絶えず尖鋭ならしめて置くといふことであります。若し放任して置けば、個人利益の念は、兎角增長し易いものである。個人の利益の念が增長すれば、階級は維持出來なくなり、階級は崩壞して來る。是は勞働者の運命を高める爲に、最も禁ずべきことである。故に勞働者の個人的の利益は、自ら之を擲つても、一の團集であり一の全體である階級の爲に盡すといふ階級意識を強くすることが必要である。あらゆる勞働運動を、機會ある毎に階級意識を高める爲に使はなければならぬ。賃銀を十錢上げて貰ひたいとか二十錢上げて貰ひたいとか、或は退職手當を五圓殖して貰ひたい、勞働時間を三十分減らして貰ひたいといふ、左樣な當面の利害問題を目的とする爲のストライキは、洵に低級なものである。意味の極めて輕いストライキであつて、重んずるに足りない。今後の勞働運動、勞働爭議はさういふ事の爲でなく、縱令目前の利益は害され、それが爲に

勞働者の待遇は惡くなつても宜い、結局に於て勞働者の階級としての利益がより能く防衛されるやうになれば宜しい、それが爲にストライキ、サボタージュを爲すべし、勞働運動を爲すべし、畢竟するに階級意識を高め、終に階級なき社會に導く爲めに一切を捧ぐべしといふのであります。而して其の階級は、決して唯だ階級意識を高めるといふ精神的の作用に依つてのみ強くなるものではない。精神的の作用を強くするには、其前提として必ず其の時に存在する生産の狀態に合致することを要する。生産の狀態と背いた道德の敎は、幾ら之を說いても何も效能はない。機械を使ふ時代の生産の狀態の下に於ては機械を使ふ生産狀態に應じた階級意識が發達して來なければならない。手先の工業の時代とは全然違つたものでなければならないと申すのであります。

八　自由の世界と必然の世界

ところが、生産の事情といふものは、マルクスの觀方に從へば、人間の自由の意志を以て左右し得るよりも、人間の自由意志を超越したものである。生産の世界は自由の世界、意志自由の世界ではなく、必然の世界である。生産の世界を支配する根本原則は必然原則であつて、人間がどう思つても、どうもなるものではない。人間は唯だ之に從ふあるのみである。併し此の必然の世界である生産の世界に於ても、人間意志の自由が全然無いのではない。第一原則として必然性が支配して居る、併し人間は此間に於て、やりやうに依つては、意志の自由を働かせることが出來る。卽ち此間にも矢張自由世界は見出せる。是はマルクスの引いた言葉ではありませぬが、マルクスの趣意を能く說明するものとして、有名な哲學者のベーコンの言つた次の名句をあげ得ると、私は存じます。

Nature to be commanded must be obeyed.

如何にも簡潔なる漢文句調である。『自然は支配せらるべくは服從されねばならぬ』。之を漢文にすれば『欲制天者先順天』とでも申したら宜しいでせう。天は制する事が出來るが、併し制する前に先づ從はなければならない。自然といふものは必然的であるから之を破る事は出來ない。水は低きにつく、運動の法則、引力の法則を吾々は破ることは出來ない。併ながら吾々は此の運動の法則を利用して今日の工業の技術を作上げた。吾々は電氣の法則を一寸も曲げることは出來ないが、此の法則を益〻究め、益〻知ることに依つて、電氣の天然の必然性に從つて、之を吾々の意の儘に動かして、電燈を點け、電車を走らせ、或は干物を燒く焜爐にまで使つて居る。天は斯くなると哀れなもので、吾々の爲には奴隷の如く働いて居るが、天を奴隷とする前に吾々は先づ天の奴隷とならなければならぬ。天然の法則に少しも背かずして忠實に從つて行くことに依つて、之を利用して行かなければならぬ。茲に人間の自由がある。併し先づ天に從はなければならぬ。天に從ふといふ必然の世界に吾々は十分入り込むことに依つて、却つて自由の意志の儘に天を使ふことが出來る大なる自由を、吾々は其處に得ることが出來るのである。

併し自然といふものは、多くの必然的の法則を持つて居るものである。而して吾々が經濟上に於て

營む生産といふことは、天然に對してすることで、人間に對してすることではない。交換、分配といふことは、人間の間に於て營むことである。生産といふことは、人間が寄つて集つて營むことであるが、相手は天である。天然の材料に吾々が加工して、人間の用を足す物を作出すのである。例へば木を伐つて來てテーブルを作る、悉く人間の命令の儘になる。四角いテーブル、丸いテーブル、長いテーブル、如何樣にでも出來るが、併し之を作るには、先づ木の性質を究めなければならぬ。木を伐るにしても木の性質に從つてやらなければならぬ。卽ち天の供給する材料、天の供給する力、天然物と天然力に對して人が爲す是が生産である。故に生産の世界は必然の世界であつて、自由の世界ではない。併しそこに自由がある。

マルクスは、資本論第三卷第二册の三百五十五頁に、次ぎのやうに申して居ります。『自由の世界は、實際に於いて、窮迫と在外的合目的性とによつて決定せられる勞働が停止するときに始まる。從つて、其れは、本質上、本來の物質的生産の彼方に横はつてゐるものである。蠻人が彼れの欲望を充たし、彼の生命を支へ、子孫を産む爲めに、天然と鬪はねばならぬ如くに、文明人も亦た鬪はねばならぬ。而して、彼は此の鬪ひを、すべての社會形態の中に、可能的なるあらゆる生産方法の下に於いて爲さねばならぬのである。彼の發達すると共に、必然の此世界は擴大する。何となれば、人の欲望が擴大するから。乍去、これらの欲望を充たすべき生産力も亦た同時に擴大する。されば、社會を組成する人々、連合せる生産者たちが、彼れらの材料變化を天然と共に合理的に調節し、旨ひたる力によつての如くこれらによつて支配されずに、これを彼れら共同の管理の下に持ち來たす限りに於いて、而して、力の最小支出を以て、且つ彼れらの人間的本性に最も値し、これに最もふさはしい條件の下に、これを執行する限りに於てのみ、此の範圍に於ける自由が存し得るのである。しかし、これは未だ必然の一領域に屬する。此點の彼方に、自己目的として妥當する人力の發達が始まり、眞の自由の世界が始まる。元より此世界は、それが、必然の世界を基礎とする限りに於てのみ榮え得るものである。勞働時間の短縮は其の根本條件である』と。マルクスが、其の唯物辨證法を以つて、爲し遂げんと欲したことは、如何にして、此の必然の世界を經過して、さうして、自由の世界に入るべきかの道筋を示すことにあつたのであります。

此の點に於て、彼は英吉利の放任主義者と著しく違ふのであります。放任主義は極端なる徹底したる必然主義であり、宿命論である。英吉利流の政治學、英吉利流の經濟學は、どうしても宿命論の必然論に陷つて來る。それは生産の世界を主として眺め、天然の世界を主として考へる、必然の約束といふことを總てのイデオロギーの本にするのであります。他方に於いて、マルクスの如上の見解は、マルクス以前の社會主義者の多くの者とも異るのであります。これらの所謂社會主義者ら（マルクスは、これらを一括して空想的社會主義者と呼んで居ります）は、必然性といふことを最初から全然無視して掛かる。唯だ意志の自由、自由の世界、自由平等といふことに憧れて、其の憧れるを直ちに現出しようとする。人間は自由でなければならない、人間は平等でなければならないといふ強い要求を彼等は持つ。それは必しも不當なことではない。併ながら憧れは憧れであつて現實ではない。然るに彼等は此の憧れの

世界を直に右から左に移して現出しようとする。革命も辭せず血を流すことも辭さない、一日も早く自由なる、平等なる世界を茲に現出しようとして、其處に至る道行きとして、長い必然の世界の約束を遵奉するに非れば、其れは到達し得られるものでないことを彼等は考へない。是れ卽ちマルクスが彼等を空想主義者と名付けた所以であります。マルクスはこれに反して、人間の社會、人間の本性は、決して一足跳びに沙彌から長老になれるものではない。吾々は長い間文明の幼稚なる世界にあつて天然の必然の法則に繫れて、少しづつ天然を克服して文明を築上げて今日に至つた。けれども、吾々の前途は遼遠である。吾々の努力に依つてもつと天に服從しなければならない。徹底的に天に服從し終つた其の時には、卽ち天を十分に從へることの出來る樣になるのである。長き必然の世界の修練を經て後にのみ、始めて自由の世界に到達することが出來ると、マルクスは斯う考へたのであります。是が卽ち彼の社會進化論であつて、理想哲學を基調とする唯物史觀辨證法に依つて證明されて、社會は正反合といふ必然の約束を色々辿るが、一の合から二の合、三の合、と段々に續いて進化して行く、必然の世界から續いて、自由の世界に入るべく進んでは行くが、大體はまだ自由の世界の中に入つて居らない。唯だ必然の世界の中に於て、天を制せんと欲して、先づ天に順つて居るのである。結局の理想、人類の本當の運命は自由の世界を打樹てるといふことにある。併しそれは直ぐに出來るものではない。平等の世界を打樹てるといふ、それは現實には容易にあることではない。此の自由の世界の來ることを、一日でも早くしようといふには、却て必然の世界に服從することを、より多くしなければならないと主張するのであります。

必然の世界をより能く究めるといふことが、先づ第一の任務である。それには近代の社會を最も能く解剖しなければならない。彼の『資本論』といふあの大きな書物は、少しも理想を說いたのではない、少しも將來を談じたのではない。近代の資本主義社會、所謂ブルヂオア社會の本體は何處であるか、此の本體を視究める爲に、彼は數千頁を費し、三十年の努力を是に傾注したのであります。彼言ふ、自分の努力は近代資本主義的生產方法の現狀、本體を暴露するにあり、暴露すれば後は何も言ふ必要はない。如何にして社會革命をすべきであるか、如何にして此の社會から脫出すべきかといふ工夫は、自ら其中から出て來る。故に空想的社會主義者と違つて、社會主義が實現せられたならば、斯ういふやうになる、あいふやうになるといふやうな、夢物語は少しも說いて居ないのであります。

普通社會主義といふ中、空想的小說的のものは多く將來のことに論及して居ます。今日は洵に不平等の世の中である、不自由の世の中である、不都合の世の中であるが、併し一度社會主義が實現すれば、斯うなる、あゝなるといふことを書く。日本では其の類の小說的のもので大變流行つたものに矢野龍溪氏の『新社會』といふ本があります。諸君の中には或は御存じの方もあり、御存じ無い方もあらうが、是が出版當時には洛陽の紙價を高からしめたものであります。社會主義的理想を現出する、『新社會』其の內容に付て可なり詳しく書いたものであります。西洋で言へばトマス・モーアのユートピアの如き、共產主義の行はれる次第を叙述して、監獄の懲役人を繫ぐ鎖に黃金を使ふ、其他の目的の爲には黃金

は使はぬ。故に若し金の鎖を下げて居ると、自分は囚人である事を表明する事になるから、人々は黄金の使用を避ける。金を無くすることが、どの位人間を苦痛から救ふことになるか知れないと云ふ。或は又婚姻の制度に就いても詳しく書いてあります。今日優生學者の中には、結婚する者は、結婚證明書を兩方から出す樣にせよと主張する人がありますが、トマス・モーアに於ては結婚する前に裸體で見合をしろ、衣類を着て見合をしてはいかぬ。素裸になつて有ゆるものを悉く吟味する機會を男女兩方に與へなければならないなどと、詳しいことを書いて居ります。

マルクスには斯ういふことは少しもありません。將來の社會といふものは、容易に來るものではないから、さういふことを今から言つても、無益であるといふ彼本來の主張からさういふことを問ふに及ばない。斯うしよう、あゝしようといつてもさうなるものでない。發達すべきものは發達して出て來る。吾々の爲すべき唯一の緊要事は、吾々が現に生きて居る社會が如何なるものであるかを知るにある。分つて居るやうでも、存外分つて居らない。其眞相を底の底迄探つて見究める、見究めれば此の社會の矛盾が明になる、社會の人が之を意識すれば、其處に自ら革命の力が湧いて來る。是がマルクスの考へであります。そこで生産の事情といふことに大變に重きを置く。必然の世界、必然から離れて階級といふものは存在しない。如何に社會主義的運動を煽動しやうが、プロパガンダをしやうが、生産の事情が許すだけのことしか出來ない。生産の事情の許さないものは、どうしても出來るものではないと、斯く申すのであります。

斯く觀じて來ますと、然らばマルクスの敎を奉ずる者、マルキシストといふものは、運命論者、宿命論者になつてしまつて、何もしないで居るべきかといふ疑が起りませう。社會は進化するだけ進化するのである、正・反・合の道理で自ら進化するのである。放任して置いても共産主義になり、社會主義になるから、何も骨を折つて運動する必要はない。それが爲に勞働運動を爲し、政治運動を爲して、或は刑法に觸れたりなどして犧牲を出す事は馬鹿々々しいではないかと、斯く極端に煎じ詰めて行くと、茲に大なる矛盾が見出される。マルクスの唯物史觀辨證論法を、理論的に何處までも徹底して行くと、有ゆる社會運動は之は抛擲すべきものであり無駄なことである、社會運動や勞働運動は、これを說くことは無駄なことである、默つて居れば生産事情の進歩するに從つてなるべきようになるから、爲すべき事は生産事情の進歩、國の生産力の發達といふことに全力を傾注するより外はないことになる、皮相的にマルキシズムを解釋すると、さやうに考へられるのであります。

併し乍ら是はマルキシズムの一を知つて二を知らないものであります。必然性に重きを置くマルキシズムのみを知つて、必然性を認めるは、卽ち自由性を得る所以、先づ天に順ふのは手段であつて、結局歸する所は天を制せんと欲するのであることを十分に見究めないものの考であります。マルクスの言葉の中にも、今言つたやうに狹い解釋しか許さないやうなことも見出されます。マルクスのやうな非常に讀書力に富んだ、眼孔の廣い思想家の言を一々摑まへれば、矛盾だらけとも云ひ得られませう。そんなものを引つ張つて來て、得々として論駁することは、意味を爲さないのであります。マルクスを

斥ける爲にも、又正しく理解する爲にも、何の役にも立ちません。正しくマルキシズムを解釋せんとするには其全體を知らなければなりません。あらゆるものを綜合して何處までが本體であるか、彼の眞に重きを置いたのは何處であるかをよく見究めなければならぬのであります。基督が一生の傳道生活に入るに先立つて荒野に於て斷食し修練した時に、惡魔が三度現はれて誘惑したといふことが聖書にあります。惡魔が斯く基督を誘惑する時に用ひた武器は何であるかといふと、聖書の中の文句を引用して、聖書には斯うあるでないか、然らば何故さうしないか、お前のする事は違つて居るでないかと三度も疊みかけて基督に問うたのであります。然るに基督は修練が積んで居て三度共之を拒けて、遂に此の誘惑に打勝つて、始めて救世主として世の中に傳道を始めたといふことが、聖書にのせてあります。斯く、聖書といへども、或文句をチリ〳〵バラ〳〵に斷片的に引つ張つて來れば、基督の信仰を攪亂するに足るやうにも利用が出來る。此點は教育に從事する方々に特に御考を願ひたいことであります。バイブルさへも其通りである、或は論語でも然うでありませう。論語の片言隻句を持つて來れば、孔子樣の教と全然違つた方面に利用することが幾らも出來ませう。佛樣の教でも同じことでありませう。惡意を以て之を斥け、之を陷れようとするならば易々たるもので、どんな聖人賢人に對しても出來ます。政治上に於ては殊にさういふことが行はれます。或る人の言つた片言隻語を捉へて、之を攻擊すれば、如何に要愼深い政治家の發言と雖も、揚げ足を取らうと思つて掛れば必ず取られる。彼の本來の主張とは全然違つて、彼は不忠臣、不愛國で怪からん民衆の利益を蹂躙するものであるといふことは唯だ言葉だけに就て言へば隨分言得られます。少し卑近な例ですけれども、議會中心といふ言葉は、言葉としては非常に拙い言葉であります。しかし、之を使つた意味は、何も皇室を蔑ろにする意味でないことは明である。併し議會中心といふ言葉だけを捉へて來れば怪しからぬ、如何にも不忠臣、不愛國の者であると云ふ風にも言へる。是は丁度惡魔が聖書の文句を引用して基督を誘惑しようとしたと同じことでありませう。

教育上に於ても隨分左樣な事がある。教育勅語を解釋する場合に、偏狹なる解釋を爲し、或は一人極め一人よがり的に、若し哲學的の信條を持つて居る者ならば、其の自分の信條を說明する爲に、勅語に斯ういふ事があるとか、或は明治天皇の御製の中に斯ういふ歌がある。是はどうしても自分の言ふ通りでなくてはいけないといふ。是は最も危險なる事であります。

凡そ人の言、凡そ一つの主義、凡そ一つの學說、凡そ一つの主張を正しく理解せんとするには、其の全般を見なければならない。斷片的に其の片鱗を捉へて之を判斷してはならない。況やマルクス主義の如き、共產主義のやうな、今世界の大衆を動かしつゝある運動に對しては、唯だ其片言隻句を捉へて判斷してはならない其の全體を見なければならない。今申す所の階級必然性の解釋といふものも、極く狹い意味に解釋すれば、あらゆる社會運動といふものは、唯物史觀辨證法と兩立しないといふことが言はれるが、是は矢張惡魔が聖書を引用して、基督を誘惑した筆法と同じものであつて本當の解釋ではありません。本當の解釋は何處に在るか、マルキシズムは必然性の世界から脫出して、自由の世界に入ると

いふところにあるのです。是が初に述べたやうに、マルクスが英吉利の個人主義と、獨逸の理想とを融合し、其間から一の獨自の社會哲學を產み出した所以であります。

九　プロレタリア獨裁の意味と國際共產運動

さて前段に於いて申述べて置いた通り、マルクスは次のことを主張致して居ります。(一)階級鬪爭は必然的にプロレタリア獨裁政治に導くものである。(二)プロレタリアの獨裁は階級を自由へ導く、言換へれば無階級社會卽ち共產社會の實現に導くものである、と。階級が存在し、對立して、利害を異にして爭つて居る事實を、有るが儘に述べただけでは少しも指導原理を與ふることにはならないのです。勞働階級、無產階級に對して斯う云ふ原理を示しただけでは、吾々は鬪ふ鬪つて居ると云ふことを知らしむるだけである。而も鬪つて、無限なる鬪をして居るものであるならば、其の鬪つて居るのは無駄なことではないか、悲慘な運命が吾々を襲つて居ると云ふことを知らしめるだけの話であります。然るにマルクスの敎ゆるところは、此れに止るのではありません。鬪ふのは決して永久に鬪ふのではない。今鬪ふのは畢竟するに將來鬪はないやうになる爲に鬪ふのである。眞の平和を齎らす爲に、己むを得ず鬪ふのであつて、鬪ふと云ふことが本務であるのではない。階級鬪爭は決して善い事ではない、併し必然の世界を經由しなければ自由の世界は來ない。階級鬪爭の時代は必然的に免かれ得ざる經過時代である。階級鬪爭の時代に居る限りは、盛んに階級鬪爭をやるより外はないのであつて、之を緩和すればする程、自由の世界の實現は遲くなる。だから熱心に階級鬪爭に從事しろと云ふ指導原理が其處から湧いて來るのであります。

併ながら階級鬪爭を行へば、直に自由なる世界が出て來るかと云ふと、さうではない、理想の社會は直ちに現はれて來るのではない、其の間に過渡の時代がある。其の過渡時代が卽ち鬪爭の時代である。それは決して希ふべき時代ではない、若し出來得るものならば、而して吾々の意志の自由の裁量が出來るなれば、さう云ふ時代は經たくない。階級鬪爭と云ふ狀態は、決して冀はしい狀態ではない。階級鬪爭するに依て先づ第一に起つて來る所の狀態は、それ自體に於て冀はしいものではない、唯だ此時代を經るにあらざれば、最後の無階級の時代、卽ち階級の對立して居る忌むべき社會でない理想の社會、共產主義の社會は出現しない。其の過渡の時代が卽ちプロレタリア獨裁の社會である。故にプロレタリア獨裁の社會はそれ自らは理想的のものではない。唯だ理想の社會に導く順序であるから、吾々はどうしてもそれだけの必然は認めなければならぬ。昔の共產主義者や社會主義者の言ふが如くに、一足飛に理想の社會に到達するものではない。宿命論者が說き、個人主義者の說くやうに、吾々は、理想と全然異る必然性を甘受しなければならない。其の甘受する狀態は、今は階級鬪爭の時代であつて、此の次に吾々の力に依て持來す第一の形がプロレタリア獨裁の時代である。之を敎へたのが自分の功績であるとマルクスは自ら任じて居る、又實に其の通りであります。マルクスは單に階級鬪爭の事實を說いたと云ふやうな單純なものではありません、それに或る特別の解釋を與へて居るのです。而も其の

解釋は、指導原理が其の中から自ら出て來るやうになつて居るのです。それが現在吾々の見て居る世界に於ては、現に大きな力となつて働いて居る。階級闘爭を認めると云ふこと自身が働いて居るのではなくして、其の階級闘爭と云ふことに下したマルクスの特別の解釋が大なる力となつて働いて居るのであります。今日の國際共産運動は、即ち其れを具體化したものであります。

今日の國際勞働運動は、第三インターナショナルが主としてそれに當つて居るのでありまして、第二インターナショナルなどは、モハヤ殆んど何等の意味を有たないことになりました。それだけに、第三インターナショナルは盛んに活躍して居ります。此頃は、コムニスチック・インターナショナル（これを略してコミンテルンと申します）とも稱せられて居ります。其運動を俗に赤化運動と稱します。全世界革命の運動であります。其の指導原理は、マルクスが己れの特別の功績である、自分が發見したのであると云ふ唯物史觀辨證法に依る特別の解釋中から產れ出た世界革命の思想これであります。露西亞はプロレタリアの獨裁政治を行つて居る。革命に依て、階級闘爭時代から一歩出て社會革命を行つて、プロレタリア獨裁政治を行ひ、形だけは具へたから、彼等に取つて殘る所は共產主義への驀進これであります。ところが此のプロレタリア獨裁政治の維持は意外に困難で、何時崩れるか分らないやうな憂虞の下に立つて居る。併し形としては、兎に角プロレタリア獨裁政治は出來上つて居る。其以外の國には、プロレタリア獨裁政治は何處にも實現して居ない。マルクスの主張の二つの根本的思想の一つは、そこに實現して居るから、殘るものは一つあるのみである。從つて此の方が宣傳の力が非常に大である、又宣傳する熱心も非常に強いのである。第三インターナショナルは、今の所は殆ど世界的宣傳のみを仕事として居るのであります。曰く、吾々は斯く實例を示して居るではないか、お前の國に於てもプロレタリアの獨裁政治を速に斷行したら宜いではないか、それは革命に依れば出來ると云ふことを、吾々は實例で示して居る。階級闘爭を長くやつて居つても、是は必然的に已むを得ざるものとしてやつて居るのであつて、それ自らは決して願はしいものではない、速に片付けば早い程宜いのであると。即ち其處に大に運動の行動の刺戟が存在して居る譯である。單なる宿命論、單なるフエタリズムならば、來るだけのものしか來ないが、是は必然的に來る順序は經て行かなければならぬが、必然と云ふことは、人間の働きに依て、天により能く從ひ、より早く從ふ者程、より能く天を制することが出來るのである。それを教へることは世界革命の宣傳、解り易く言へば世界を赤化しようとすることになるのであります。而して彼等は決してそれを惡いと信じて居るのではない、如何に反抗しても、それは唯だ遲くなるだけで、赤化を防止することは出來ない。必然の時代を長くし、自由の來るのを遲くすることは出來るが、之を免かれることは決して出來るものではない。結局はプロレタリア獨裁を經て、無階級の社會に行くと云ふことは必然的に定まつて居る、是は免かれることの出來るものではない、何處の社會でも免かれることは出來ない。左樣な無益の勞を、長い準備の時期を經過させるのは氣の毒であるから、それを未だ知らない國々の無產階級に、此の必然の運命、即ち人類社會進化の道理を早く十分に教へて、吾々の爲した所に倣はせようと云ふ、それが爲に第三インターナショナルが極力宣傳するのであり

ます。色々の手段を以て、或は目的の爲には手段を選まずと云ふやうな事もやるかも知れぬ。各國の政府は之を防ぎ、英吉利を始め日本でも亞米利加に於ても、赤化運動は斥けるけれども、赤化運動者自らは善い事として居る、根本の心情には善いことをして居ると思つて居る。而もそれは單なる學理としてではなくして、今日に於ては一つの堅い信仰となつて居ります。今日の第三インターナショナルの人々に取つては、唯物史觀は學理學說の域を脫して、既に宗教となつて居るのです。基督教信者が基督教を信じ、佛教信者が佛教を信ずる、否それよりも更に强い信仰を持つて居ります。信仰となれば必ず斯くなるものとして居る。故に此福音を一日も早く知らない民衆に傳へたい。基督教の宣教者たちが福音を未開の民に知らせたいと、昔も熱心に教へ、今も尙ほ傳道に力を盡しつゝあると全く同じであります。それを何か政治上の野心があり、露西亞の勢力を振ひたい、世界を赤化する爲である、形は違つて居るが要するに一國一民族の野心を遂ふせんとするものであると見るのは、大なる誤りであります。左樣な簡單な見方をして居る事は甚だ危いと申さねばなりません。他國を侵略しようとか、他國を併呑しようとか云ふ、正しからざる動機から出た運動は、一時は力が强いかも知らぬけれども、人間が其本心に立歸つて考へる時に、本當に忠實にそれが爲に心を捧げるといふことは、決して長く續くものではない。之れに反し自分は其れを善い事と確信し、其の事自體は、客觀的に見れば間違つて居るにしても、自分たちは立派な善い事と信じて居つて、決して方便として居るのではない。魂を打込んで居るのですから、其の熱心は火を以てしても、鐵を以てしても奪ふことは出來ないのであります。現在のソヴェート露西亞の赤化運動といふのはそれであつて、昔のザー時代の侵略主義と比較し得べきものではありません。其點は十分考へて戴きたい。殊に露西亞に於ては自國は一大革命をしたけれども、自分の國の革命のみでは無階級社會の實現は未だ遠い、世界全體が擧つて露西亞の如く革命を行つて、少くともプロレタリア獨裁政治が到るところに實現するやうになれば、無階級社會の實現が早くなると確信して居ります。從つて、世界の革命運動の促進の爲めに、機會がある毎に乘じて世界革命を煽らうとする。例へば支那に人材を供給して南方を支持し、嫌がられても、何んでも共產主義を植付けようとし、マルキシズムの流布する爲には、出來るだけ力を貸さうとする。丁度亞米利加の傳道會社、傳道局が多くの費用を以て、日本に學校を立て、種々の慈善事業を經營し、日曜學校を設けたりするのも、或は國際聯盟が支局を日本の各學校に置いて之に費用を出して、國際聯盟思想を普及し、又國際聯盟の主なる人を、各國に派遣して國際聯盟の宣傳をする。第三インターナシナルの人々はそれよりも更に最も善い、人類に取つて意義のあることをやつてゐると信じて居る。從つて、學校内に基督教青年會を設けて傳道をしたり、國際聯盟支部を設けて、平和運動をしたりすることを公許する以上、何故コミンテルン支部は、これを設くることを禁ずるのかと反問するのであります。研究以外のものを一切禁ずるのなら青年會も聯盟支部もこれを公認するのは可笑しいではないかと詰問するのであります。教育に當る諸君は此點を篤と御考へ願たいのです。所謂赤化運動といふものゝ本體を究める爲には、是が一つの信仰である、而も其信仰は少くとも今日までの宗教上のどの信仰よりもより多く其根柢を學理に置いて居る。

マルクス唯物史觀の辨證法の中に含まれて居り、其立脚して居るところが、學理的であつて、之を宣べ傳へる熱心は、宗教的の熱心であるといふのであるから、是は容易に防ぎ難いものであるといふことを能く見究めなければならない。單に御座成的な事を言つて聽かしても、所謂赤化運動は到底防ぎ得るものでないことを篤と御反省下さることを切望いたす次第であります。

十　唯物史觀の史的再吟味

抑、此唯物史觀は學理上維持すべきものであるか、ないかといふことを能く見究めるに非ざれば、之に對抗することは出來ない。能く思想は思想を以て鬪へといふ、私も昔黎明運動の時には、其言葉を用ひたが、今日は是が一つのスローガンのやうになつて居る。而して、思想は思想を以て鬪へといふことは、眞正の意味を沒却し去つて、どんな思想を以てゞもいゝから鬪へといふことの如くに解せられてゐます。乍去、兎に角練りに練り、鍛へに鍛へて築上げた所の思想に對して、洵に御粗末な、出來合ひの間に合せの思想を持つて行つては到底互角に鬪へるものではありません。思想は思想を以て鬪へといふことは、向うの思想に對抗するだけの學理上の修練を經た思想を以て鬪へといふことでなくてはなりません。此頃はマルキシズムの思想が流行つて居るから、是は東洋歷史を以て防ぐとか、日本の法制史を研究する事に依つて防ぐとかいふが、緣も由緒もない日本法制史などを以て防ぎ得るものではありません。赤化思想はそんなものでは防げるものではない。法制史を研究することは必要であつて、私は自分としても出來るだけ其の研究に盡したいと思つて居るものであります。併し之を以てマルキシズムと鬪ふといふことは以ての外の考へ違ひであります。東洋の歷史を究めるといふこと、東洋文化の淵源を知るといふことは、洵に必要であります。尤も東洋の歷史を以てマルキシズムの思想に批評を加へ得ることはあります。これは私の『唯物史觀經濟史出立點の再吟味』に題を出して置きまして、何れ續稿を出すつもりのものでありますが、印度の歷史や制度を以て、原始共產制度の說明に充てゝ居る點に於いて、マルクスに大いなる間違ひが存するのであります。印度の經濟史が研究されるに隨つて、マルクスの說いた所は全然覆へされて居ります。斯ういふ事實を明にする爲に、東洋歷史の研究、或は支那の歷史の研究、日本歷史の研究は大いに役に立ちます。私が『唯物史觀經濟史出立點の再吟味』といふ本に於て若干試みたことは、階級鬪爭が始まる前に、原始共產時代があつたといふこと、是は歐羅巴の歷史に就ても今日は最早や主張出來なくなつた。マルクスの時分には、マルクス派でない學者までも、殆ど全部を擧げて其說であつた。私も今から二十八年前に、一つの書物を書きました、其書物は日本に於ても、斯ういふやうな原始共產時代があつたといふことを根柢として、是から出立して日本の經濟史を極く簡單に叙したものであります。當時は私も其考であつたが、其後十年ばかりの間は、少し疑を持ちつゝも、大體其說でありました、十年ばかり經つて、其說は維持することが出來ないといふことを考へ出しまして、其說を訂正し遂に三十年後の今日では、日本に就ては少くとも原始共產制度といふことは言へないと私は信ずるに至つた。併し日本の經濟

史を研究して居る人の大多數殆ど全部は、私の舊い說を、或は私から御採りになり、或は私からでなくして自分で考へ付いたか、主張されてゐます。私の方は既に三十年經つて變つて、今日私と同じ說を取つて居るのは法制史の專攻者で、此間罷められた九州大學の瀧川敎授一人であります。同君は大寶令以前に日本の土地が共有であつたといふことは、何等の證明が立たぬといふことを可なり强く主張されて居ります、是は今日に於て私も全然同說であります。日本に於ても原始共產制度があつたらうといふ考へ方はマルクスの考へが影響したものであります。此マルクスに影響された根源は矢張り私が採つたものであつて、當時の西洋の學問、卽ち私が前に留學した當時の學問界に於いては、原始の時代は何れの民族と雖も共產制度であつたといふことを認めることに於て殆ど學者が一致して居つた。今日に於ては其れは段々變化しつゝある。それは新しき研究の示めすところでは支持されない。舊い研究を其儘襲踏する人は別として、新しい研究をする人は、原始共產制度を全然否認するか、或は疑を持つて居るのであります。而して、私は印度の歷史、日本の歷史は少くとも此原始共產制度存在說に材料を供給しないと信じつゝあるのであります。支那の歷史はどうでありますか、是はまだ何人も研究がそこに屆いて居ないところですが、從來所謂井田の法といふことが一種の共產制度であつた如く考へられてゐましたけれども、井田の法に於ては、私田・公田なるものがあつて、田を九に分割して、其中央を公田とし、他の八つを私田とするといふ事であつたから、土地の私有といふことは認められて居つたものと言はなければなりません。兎に角今日まで吾々の知り得た所に於ては、支那に於ても土地が共有であつたといふことは、さう簡單に主張することは出來ないのであります。

卽ち歷史の研究の結果は、マルクスが、殊にエンゲルスが修正したに依りまして、階級鬪爭の起る前の稍ゝ長い間、或は餘程長い間、原始共產制度といふやうな時代があつたとは、さう一般的には言へないのです。無論共產制度はあつた、近代と雖もそれはある。けれども一般的に、必然的に、歷史上社會進化の一つの階段として、さういふ階段があつたといふことは、先入の見に囚はれてゐる人は兎に角、眞面目に歷史を研究する立場からは、今日は最早や主張が出來なくなつたのであります。

然らば階級鬪爭は何時始まつたか。原始共產制度なるものがあつたとすれば、其原始共產制度なるものが崩れた時に、階級の存立が起る、階級が存立すればそれが互に相爭ふやうな、敵對狀態が間もなく續いて起るといふことは言へませう。其の反對に、原始共產時代がないとすれば、人類の歷史の始めに階級鬪爭の出立點を置かなければならぬ。人類の歷史の最初の出立點に階級鬪爭を持つて來るといふことになると、階級鬪爭は社會主義時代を以て終るといふ說の基礎が一つ崩れるのであります。始めがあつたならば終りがあると云へませう。始めなきものに必ず終りがあるとは、直ぐには云へないからであります。

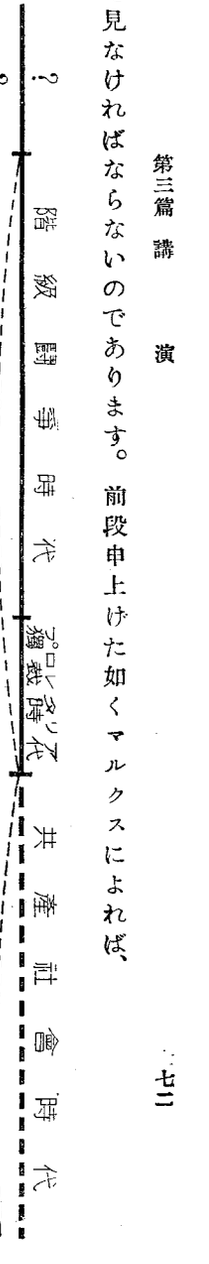
マルクスはヘーゲルに對して、同じやうな意味の非難を加へて居ります。ヘーゲルは社會は斷えざる進化に依つて、今日まで進んで來たものであると說く。而もそれは正・反・合のヂアレクチックに從つて進んで來た、さうして其最も最後に到達したのが、今日の國家であると申します。殊にヘーゲルから

言へば、當時のプロイセンの國家、これが嬰て理想に近い人格の最高表現としての國家であるとされてゐまして、それから先はヘーゲルは說かないのであります。今までは長い變遷の中に發展を遂げて來たが、今日はもう最後で、是から先は變化はないかの如くにヘーゲルは說いて居る。是はヘーゲルに於いては非常な缺陷であるといふことを、マルクスは批評して居ります。如何にも其通りであつて、有名なヘーゲルが說いて居る所は、在る物は總て合理的なり、一見して洵に不都合なもの、不合理的のやうに見えるものでも、社會進化の理法から考へて見れば、今日現在ある所のものは國家制度にしても、社會制度にしても、法律制度にしても、家族の制度にしても、あるべきものはあるべき理である、だから此處に現在するものは總て何等かの意味に於て合理的であると云ふのであります。

是は餘程逆說的な言ひ方でありますが、併しヘーゲル流に考へればさう言へるのである。ところが在る所の物は卽ち合理的なりといふことを社會に當嵌めて、今日ある社會は今あるから合理的である、今日在る所の國家は今あるから合理的のものである、故に不合理的のものに遷り行くことはない。是で終だといふ風にも解釋し得る。マルクスは之を說いて居る。自分はヘーゲルの弟子であるが、併し其點に於ては弟子ではない。社會は今まで絕えず進化發達して來たやうに、今後も尙ほ發達して行くものである。卽ち今後の社會は必然の社會から出て、自由の社會に入るといひます。併し同じ論法をマルクスに加へますと、其階級鬪爭の始まる時期が、エンゲルスの限定したやうに限定されるならまだ宜しいが、エンゲルスの限定した事は餘計な蛇足なりとして、共產宣言の初めの形に於ける如くに人類の歷史は取りも直さず階級鬪爭の歷史なりと言ふことが當つて居るとすれば、階級鬪爭の出立點に限定はないことになる。然らば其到達點、終局點も又限定を下すことはむづかしいではないかといふことになる。卽ち人類があると共に、階級鬪爭は續く、どんなに變化しても無階級時代、卽ち完全なる共產時代を實現することはむづかしいと考へなければならぬことになります。

他面に於いて、社會の原始狀態は、一律的に共產社會で在つたものとすれば、――他日社會が進化する曉に於いては、內容は大いに違ふだらうが、兎に角同じやうな共產主義が可能となるといふとも考へられませう。人間は嘗て共產時代を經過したのである、或る共產的經驗といふものがある、而も古い昔に於てある。然らばまた將來吾々の理知の發達した時、生產事情が發達した時に於て、共產主義も實現せられる可能性があるとも考へられませう。然るに、其前提が破られた後、卽ち過去に於て、一般的に社會の一つの制度として、必ず經過しなければならぬ必然的に經過しなければならぬ、一階段としての共產主義なるものはなかつた、地方的の共產主義的存在物はあつたけれども、一般的の普遍現象ではなかつたと云ふことが確められた曉に於いては、將來社會が、總て皆共產社會になるべしとは言へないことになります。其可能性は新にこれを證明して吳れるのでなければならない。與へられたる儘に、與へられたるものとして直に承認することは出來ないことになります。言葉を改めて申せば、唯物史觀辨證法の證明は、出立點から終局點に至るまで、再吟味して見なければならないぬと云ふ、是が私の今日の主張であります。個々の點を捕へ缺點を撥いても何もならない、唯物史觀全體を俎上に載せて再吟味し

て見なければならないのであります。前段申上げた如くマルクスによれば、



となるのでありますが、此始めが曖昧であります。其點を暫らく論外に置きますと、始めから今日に至るまでが、階級闘爭の時期である。今日より先き何處まで續くか知れないが、兎に角吾々は此中間に居る。露西亞だけは既に此時代を脱出して、プロレタリアの獨裁を實現して居る。之を脱出すれば、本當の共産主義になる。共産主義は階級の無い社會であり、又國家のない社會である。階級のある限り國家がある。マルクスの國家論は極めて簡單で、國家といふものは階級があるから在るので、階級がなくなれば國家もなくなつてしまふ。國家の要は、階級を存立せしめ、これを支持する爲にあるのであつて、既に階級がなくなれば國家はなくなつてしまふ。別に強ひて國家を無くなすといふことは何人もするのではないが、自然に無くなり、息を引取るのである。階級は無くならせなければならない。階級がなければ之を維持する爲の道具である國家存立の要もないから、國家は獨りでになくなつてしまふ。プロレタリアの獨裁時代には國家はまだ在る、在るけれども實は要の無いもので、唯だ形だけが在るので人間の盲腸のやうなものである、必要は無いけれども昔の遺物として存在して居るのである。從つて階級存立時代と國家の存立時代とは全く同延長的である。併し階級存立時代全部が、階級闘爭時代ではない、其永い經過の一部分である。此他の一部分に於ては階級闘爭は止んで、プロレタリアが獨裁して居る、即ち其階級がウント偉くなつて他の階級を壓へて居る互格對抗的なる爭をしないで、一方が增長してゐる時代、是がプロレタリア獨裁時代である。併し階級闘爭は全くは止らない。ウント壓へ付けて居ることに依つて闘爭がないのである、即ち無理に押へ付けて居るのである。それが長く續くと、壓付けられた方が無くなつて、押へ付けた者も、押へられるものがなくなれば、自分もなくなり茲に初めて、無階級の共産時代が現はれて來ると云ふ、これがマルクス國家觀の筋道であります。しかし、此の歴史的説明は、其出立點が曖昧であります。故に若し其出立點が破れるとなれば、過渡時代に對する見解も、自ら一變して來ることになるかも知れないのであります。私は前述の拙著に於いて、マルクスの論點は、一つも殘さないやうに、マルクスの言つたことは片言隻語と雖も打棄てないで、全體を探つて檢討して見ようといふ積りで、再吟味を試みたのであります。

これを要するに唯物史觀は、歴史研究の事實が、マルクスの解する通りに相違ないとすれば、確に一つの眞理であると云へませう。其れと同時に、それは唯だ打勝たるべき狀態としてのみ意味を有つのであつて最終理想の狀態としてゞはない。唯物史觀辨證法は、如何に良い理論法としても、如何に徹底した良い方法論であつても、是は結局打勝たるべきものであり、而も結局滅亡すべきものである。長い運命を持つて、居るものではない。資本主義が倒れゝば、唯物史觀辨證法も亦倒れる。唯だ資本社會を研究批判する爲め、資本社會を解剖する爲の武器としては或は適當して居るとは云へませうが、是が用を

濟ましてしまつて、マルクスの所謂本當の社會になつたならば用を爲さない。此社會に如何なる社會哲學が、マルクスによつて提供されて居るか、それは全然ゼロであります。故にマルクスの說が正しければ正しい程其運命は限られ、其妥當性は定まつたもの、限られたるもの、期限付のもの、短いものであります。マルクスの主張した所が反對に當つて居ないとすれば、彼の主張する所は長い命を有つかも知れぬ。當つて居れば居る程直きに其役目を濟ましてしまつて、他のものに依つて打勝たるべきもの、消滅してしまふべきものと云ふの外はありません。今日共產主義者が此唯物史觀辨證法のみに終始するのは、此意味から言へば、彼等自ら墓穴を掘りつゝあるのであります。彼等が一生懸命に數十卷、數百卷の本を書いて主張して居る事は、蠟燭は全然無用に歸し廢物に歸する爲に努力して居ると言はなければなりません。我々は永遠の眞理を說いて居るものではない、唯だ資本主義の解剖を試みてゐるのであるとは彼等の常に言ふところでありますが、事實としては、自分の主張することが、最上であると心から信ずるに非ざれば、あの熱心は出て來ません。資本主義者は自らを葬るべき墓穴を掘る道行きを急ぎつゝありと、マルキシストは主張しますが、それと同じ筆法を以てすれば、マルキシストは更に努力し、更に熱心に、尙ほ精進して自らの墓穴を掘りつゝある、少くとも學問上に於ては左樣であると言はなければなるまいと私は存ずるのであります。（以上第二回講演）

十一　マルクス勞働價値說の由來

以上唯物史觀について大要の御話を申上げましたから、今日は、マルクスの勞働價値說について、極く大略の御話を申上げます。時間が切迫して參りましたから、迚も全體を申盡くすことは出來ません。唯だ主要の點若干を申述べて、これを吟味するに止める外はありません。

マルクスの經濟說は、英吉利の正統學派の個人主義の經濟學から起つて來たのであります。併ながら、マルクスは正統學派の經濟論を其の儘受取つたのではなく、之に尙一つの他の思想卽ち個人主義とは全然反對なる國家主義、或は有機體主義、或は全體主義を取る獨逸の理想哲學、殊にヘーゲルの哲學を併せたものであることは、屢々申上げ置いたところであります。マルクスは『綜合勞働』『社會勞働日』などと云ふことを說きます。其意は、個人主義學派の說く、各個人がそれ〴〵働いた其働いたものに對して、直ちに報酬を受けるといふ、個人主義的の觀方を變へて、社會的綜合的に見たのであります。一つの社會を成して居る人々の働きは、個々バラ〳〵のものにあらずして、結局は『社會的勞働日』といふものに纏つて來る。社會は或は一日、一週、或は一月、或は一年といふ一定の期間を限つて、社會を構成して居る全員から纏つた綜合した勞働を受取り、而して其の綜合勞働を、又それ〴〵分配すると、斯く觀たのであります。此れは全體主義其ものゝ見方でもなければ、又た元より個人主義其儘の見方でもありません。兩者を打つて一丸となしたマルクス獨得の見方であります。彼の經濟說の根柢たる勞働價値說の出立點は實に玆に存するのでありまして、而して此見方が終始彼の勞働價値論に特色を附與するものであります。

マルクスの唯物史觀から出て來る重要なる一つの主張は、社會の進化は社會の生産事情の進歩、生産事情の變化に依つて支配されるものであると云ふ點にあることは、前回申述べたところであります。生産事情の變化、其の發展を力説すると云ふことは、マルクスの經濟生活全體に對する見方を特色付けてゐるのであります。抑々吾々の經濟生活が、需要と供給とより成つて居ると云ふことは、個人主義學説に於て説かれる所で、何人も認めて居る所であります。從つて、今日の經濟生活は、一に之を價格付けの生活、略して『價格の生活』と名付けます。凡そ吾々が世の中に立つて一家を形づくり、一身を律して行く、其の吾々の一擧一動は悉く價格に依つて言ひ表はされ、又價格に依つて支配されて居る。吾々の爲す所は、價格を藉りて動いて居る。職業に從事し、一定の報酬例へば月給を貰ふ、其月給は卽ち吾々の勞働に對して支拂はれる價格であります。全體として吾々の賣つた勞働の價格は更らに細かな價格に分割せられるのであります。例へば月給百圓を貰ふとすれば、其の百圓の中から家賃に十五圓、米代に二十圓、薪代に幾ら、味噌代に幾ら拂ふ。或は七錢でバット一個買ひ、一錢でマッチ一個を買ふと云ふが如くに、細かい價格に分けられます。百圓と云ふ月給は、私の一ケ月の勞働全體に對する價格であります。此の價格と價格とが適合することに依つて、吾々の經濟生活は圓滿に維持されるのであります。受取るより支拂ふ價格が多ければ、其處に缺陷が生じ、其の缺陷が大きければ終に破滅を招くのであります。價格と價格とが適合して、始めて、我々の生活は安泰なるを得ます。如何に多くの働きをしてもそれは畢竟價格を取るのでなくては、成功とは認められないのであります。而して價格の生活と云ふことは、言ひ換へれば給付の生活であります。勞働に對しては勞働の値を拂ふのは、勞働を一つの給付とするのであります。品物を提供するは、品物の提供といふ給付をするので、それに對して反對の價格を受取ります。價格は常に反對給付を前提して居ます。

然らば此價格は、如何にして決定せられるか。それは需要と供給に依つて決定せられると申します。需要と供給とが相鈎合ふ點が卽ち價格であつて、値が低い時には供給は少く、値のない時は供給はゼロである。其反對に價の高さに從つて供給は增加して來る。他方に於いて、需要は價が高くなればなる程減ずる。段々殖えて來る供給の分量と、段々減じて來る需要の分量が丁度均衡を得る點卽ち供給されるだけの給付が需要せられ、需要せられるだけの給付が提供せられる點 S(供給)=D(需要) D(需要)=S(供給) なる公式を以つて言ひ現はされる點、これが價格均衡點であります。而して此點が個人主義經濟學の出立點となつて居るのであります。但し是には條件があるのであります。曰く自由競爭が完全に自由なる場合に於てと。何故なれば競爭が完全に自由でなく、制限されて居る場合には、縱令價は高くなつても、供給は殖えないかも知れない。或は又價が安くなつても、需要が增さないで、依然として同じ分量しか買はれないかも知れないからであります。而して、此の自由競爭を妨げる最も大なる力は何かと言ふと、獨占であります。賣人と買人とが各々自由に競爭するならば、供給者は需要者が買ふだけの分量を生産するに止めて、其の價は需要者もそれを以て滿足し、供給者もそれを以て滿足する點に歸着すべき筈でありますが、獨占と云ふことが存すると、斯く行かないのであります。買人の獨占が

あると、賣人は自己が受取らんと欲した價よりも、低き値を以て甘んじなければならぬことがあるかも知れない。其の反對に賣人が獨占して居る場合には――其の場合の方が多いのです――買人に取つてもつと安く買ひ得るものも、安く買ふことが出來ず、高い値で買はなければならぬこともありまして、S＝D　D＝Sといふことは成立たない。Dが多いか、Sが多いかといふ事實が成立つのであります。然るに競爭が完全に自由に行はるれば、斯の如き事なく、SはピッタリとDであり、DはピッタリとSであると云ふことになります。

是が個人主義經濟學の出立點であつて、マルクスは之を認め、之を採つたのであります。而して、本來ならば物の價格は如何にして定まるかといふこと、卽ち吾々の經濟生活を支配して居る價格を研究するに當つては、需要と供給との兩方面を、等しく考へなければならぬのであつて、一方のみに偏してはいけないのであります。需要と供給とが相合する點に於て、價格が定まるのであるから、何れかへ其力が偏れば價の點が動くのである。故に一方だけを考へたのでは適當でない。（價格が動けば、SもDも亦た動くことは勿論ですが、此事は今姑く論外として置きます。）これは經濟學說の總てを通じ、總ての學派を通じて認める所であります。社會主義の何れの學派の學說に於ても、これは拒むことが出來ないのであります。何となれば、それは現在の生活の端的なる事實であるからであります。

然るにマルクスが生產事情の變化のみを主として力說することは、其の需要供給の中、需要といふことを全く問題の外に置き、供給の側のみを言つて居ることに當るのであります。生產するのは供給する爲めに生產するのであつて、需要するは生產するのでない、需要は消費する爲めであります。故に生產事情の變化のみを論じて、需要事情の變化、消費事情の變化に就いて少しも顧みないのは、一方のみを看て、他方を考へざるかの觀を與へるのです。唯物史觀に於て、社會上の諸々の歷史上の變遷を惹起する原因は生產事情の變化である、流通事情の變化も關係するけれども、根柢となるものは、生產事情の變化であるとし、消費事情の變化といふことを言はないのは、此の一方觀に墮するものではないかとの疑を惹起すのであります。從つて唯物史觀は偏したものであるかの如き觀を呈する。此點は決してマルクスのみに限られた非難ではないのであります。マルクスが其の思想を採つた二つの源泉の一たる英吉利の個人主義の經濟學、正統學派の經濟學、アダム・スミス以來の經濟學も亦同樣の評を辭することが出來ないので、彼等は價格を觀察するに當つて、需要の測は之を極く輕く取扱ひ、或は之を殆ど問題外に置いて、主として供給のみを論じたのであります。マルクスは決して異例を形づくつたのでなく、彼は其由つて出づる所に極めて忠實であつたのです。其由つて出づる所に極めて忠實であつたから、彼は其の由つて出づる所の個人主義經濟學を最も有力に論破し得たのであります。個人主義經濟學は、今日の資本主義の最も有力なる辯護者であるが、マルクスは其の論法を悉く此の個人主義經濟學から採つて來て、之に對して最も有力なる反對者、最も力强き駁擊者となつたのであります。需要の側を問題外に置き、考察を供給の側に限つたのは、作戰計畫としては、極めて巧妙なるものであつたに相違ないのであります。

然らば需要を全然考へなかつたかといふと、決して左樣ではない、マルクスに於ても亦個人主義經濟學に於ても、需要を全然考慮の中に置かないのではない。然らば何故之を詳しく論じなかつたかと云ふと、彼等は斯く言ふ。需要といふことは、人間が平等である以上、亦平等であるべき筈である。個人主義は平等主義から出立して居るのであります。經濟上に於ても亦人間は平等なりと認めるので、人は其の欲望を充すことに於て差別あるべき筈のものでない、平等であるのである。平等であるならば、差異を考へる必要はない。是は卽ち一つの定數である。是に對して供給の方は、定數でない、非常に變動的な變數である。故に需要を論ぜざるにあらざるも、需要の方は總てに平等である、總てに均等である、總てに共通である。從て是については詳しく論じなくても宜い。吾々が主として力を用ひなければならぬのは變數である。斷えず變化して極りなき供給の方面でなければならぬと考へたのであります。個人主義經濟學が起つて來た十八世紀から十九世紀の初にかけては、歐羅巴は所謂產業革命時代であつて、數百年繼續したる封建制度がすたれ、資本主義が起つた時代であつて、供給の上に於ける、生產の上に於ける進步は、實に偉大なるものでありました。需要の上に於ても無論變遷が起り、質量共に非常なる增進を見ましたが、生產事情の變遷は、是に比して更に非常に大なるものであつた。蒸汽力を發見した事のみでも、生產事情は根柢から革命され、織物を織る力織機が發明されたことに依つても、生產事情は根本的に變革を來たした。各種の發明が十九世紀の初頭に集り、世界の新しき事業は續々として、今まで歐羅巴に無かつた品物を盛んに供給するやうになり、生產事情の變遷は目まぐるしい程大なるものとなつた。而して時勢の產物たるを免れざる經濟學も亦其の事情に非常に影響されて來た。是に於て學者の研究しなければならぬのは、生產方面に於ける、供給方面に於ける著しき變革であります。需要の方面は是に比しては殆ど變化なきものとして、之を最初から除いてしまふのは毫も差支ないことゝ考へられました。マルクスの經濟學說の骨子である勞働價値說は、斯くの如き事情の下に產れ出たのであります。

此くして、唯物史觀の上に於て、生產事情の變化に重きを置き、之を以て古來より今日に至るまでの社會進化を說明し、而して斯く生產事情に重きを置くことが、軈て經濟學說の上に於て根本の學理として、勞働價値說を產出すことになつたのであります。前に唯物史觀といふものは、政治學說と經濟學說との綜合たる社會學說であると申しましたが、右に申上げた事情に照らしてマルクスの特有の經濟學說である勞働價値說の出た由來は、粗ゝ御分りになつたことと存じます。

十二　客觀主義の價格論と主觀主義の價格論

單にマルクス派の學理に限らず總ての學派を通じて、經濟學なるものは、今日まで――將來は別ですが――何を研究する學問であるかと問へば、一言にして答へることが出來ます。卽ちそれは價格を研究する學問である。而して價格の研究の中、其れが、如何にして決定せられるか、例へば米一俵五十圓であるとすると、此價格は如何にして決せられるのであるか、此價格決定の原因、若くは價格成立の原因は

何であるかを攻究するのが、經濟學の中心問題と認められてゐたのです。

今日の吾々の經濟生活は、未だ價格の經濟生活であります。將來は價格經濟の生活から離れて、他の形になるでありませうが、現在は未だ價格經濟の生活であります。マルクスの分類に從へば、少くも資本主義時代の全體、プロレタリア獨裁時代等の全部を引括めて、我々の生活は價格經濟であります、共產主義經濟になつて初めて價格經濟が無くなるのであります。未だ共產主義時代にならない、而もそれが何時になつたら實現するか分らない今日の經濟學は、價格の研究、就中價格決定の原因の研究といふことを中心問題として居るのであつて、其他の研究事項はそれに附帶して起つて來るのであります。而も經濟學の研究は、既に數百年前から爲されて居るに拘らず、如何にして價格が定まるかといふ問題、此中心問題に就ては今日と雖も解決を見ず、二つの大きな思想の流れが相鬪つて居つて、其の何れかに決定することが出來ないのである。而も此二つの流れは全く相對立して居つて、一見すると到底調和することが出來ないかの如く見えるのであります。二つの流れとは、一は客觀主義の價格理論、他は主觀主義の價格理論であります。

客觀主義の價格理論の最も代表的なものは生產費理論、約めて言へば費用理論であります。生產費略して言へば費用といふことであつて、費用が價格を決定すると云ふ說であります。此の客觀主義的の價格理論に對して、主觀主義的の價格理論は、費用に對して利用を主張するのであります。利用理論中に於て、其の最も代表的にして最も有力なるものは、總ての利用を言ふのでなく、利用中の最小なるもの又は限界的なるものが、價格を決定すると主張するので、これを限界利用論と名けます。卽ち生費費理論、限界利用理論此二つの說が今日も尙對立して居るのであります。

限界利用理論は、墺太利學派の價格理論とも申します。何故なれば墺太利の學者が、其中に於て最も有力であつたからであります。是は千八百七十年頃より起つて來た說であつて、年代から言へば客觀的の生產費理論の方が非常に古いので、從つて今日も數の上から言へば、此方が多數を占めて居ります。限界利用理論を唱へる主觀主義的の價格理論を奉ずるものは、數の上から言へば少數であります。又其の起つた年代より言つても割合に新しいのでありまして、新進氣鋭の勢を以て一時は學界を支配したのであるが、つい最近に至つて、卽ち歐羅巴戰爭後に於て、此說に對する反對論が非常に多くなつて、今や四面楚歌の聲に圍まれて居ると評する人もある位でありますが、兎も角今尙ほ對立の勢だけはこれを失はずに保つて居るのであります。

總て物は、如何なる物についても利用と費用の兩方面から考へ得られることは明かであります。例へば此本を一册三圓とする、三圓といふものは、此の本の費用である。私が此本を買ふに要する費用が三圓であると云ふか、或は出版者が此本を作るに要した製造原價、卽ち生產費が三圓を要したと云ふか、兎に角三圓は此の本を手に入れるに就て要した費用であつて、それは、此の本の存する限りは附いて行くのであります。無論其價の變化することはあります。元價が三圓掛つたか、或は何が幾ら掛つたか知りませぬが兎に角、今此の本を手に入れるのには、三圓と云ふ貨幣の價を費さなければならぬ。總て

の物は、皆價格を持つて居るので、價を有たない物は誠に少い。此の頃は人間まで價格を有ち、賣買物の目的物となつて、議員でも罐詰にして買占ると云ふやうなことが行はれる。それには安い議員もあれば、高い議員もある。五百圓で買收される議員もあれば、一萬圓で買收された議員もある。兎に角買收されるのである。而して其買收する人から言へば、其買收費は卽ち一つの費用である。政友會が議員の頭を揃へる爲に、五人十人を買收するに、五萬圓八萬圓出したとすれば、其の五萬圓八萬圓は、政友會から言へば一つの費用であります。

斯の如く、總ての物が價格を有つて居る。其の價格は費用の方面からも考へられるが、又轉じて利用の方面からも考へられるのであります。此の本に對して私が三圓拂ふと云ふのは、私に取つて三圓若くはそれ以上の利用があるからであります。此の本に利用がなければ、私は三圓と云ふ費用を提供する理由はない。而して費用が先きか利用が先きかと言へば、吾々が世の中に出て賣買者となつて取引する場合には、費用と云ふものは既に與へられてあるものである。三圓出すから同じ本を拵へて吳れと言へば、同じ本を作つて來る。所謂註文生産で、物を拵へさせる場合に、幾ら〳〵の物を拵へて吳れ、畏まつたと言つて拵へる、それが註文生産ですが、大體に於て、今日は註文生産に依らずして、商品生産の形式を取つて居るのであります。

今日は商品が出來て居つて、我々はそれに對して御客となるべきか、なるべからざるかを決定する。卽ち商品の存在の方が先きである。デパートメント・ストーアに行くと、吾々の欲する品物が無數に陳ねてあつて、金を出せばそれを家に持つて歸つて使ふことが出來る。併し生産者は、果して客が買つて吳れるかどうかは分らない、見越して生産をするのである。是れだけの品物を此の位の値で作つたら、ウンと賣れるだらうとか、相當に賣れるだらうとか、或は大して賣れまいとか見込を立つて、賣れさうな品物を賣れさうな額だけ作る。故に世の中の嗜好が變れば賣損ふかも知れない。消費事情が一變しても、商品は皆それ〴〵の費用を費さなければ出來ない。故に費用が先きの如く見えるが、併ながら商品を生産する人が、何故生産するかと云ふと、御客があると云ふことを豫期するからであります。其の豫期は外れるかも知れないが、外れるのは間違ひであつて、外れないことが原則なのである。外れないやうに見込を立てゝ生産する。然らば費用と云ふものより、利用が先きである。世の中の若干數の人、或は多數の人、或は大多數の人が、之を自己に利用すると認めるであらうと見越すからこそ、三圓の費用を此の本に掛けることが出來るのであります。

斯の如く總ての物は、生産卽ち供給の方面から言へば費用、消費卽ち需要の方面より言へば利用を有つて居るものでありまして、其何れからも觀察することが出來るのです。利用と費用とは、物に缺く可らざる二つの具備したる條件であります。利用の方面から見ると云ふことは、主として需要の方面より見ることであり、費用の方面から見ると云ふことは、供給の方より見ることである。供給は費用を費すことであつて、需要は之を用ひて自己に利あらしめる、之をして其の用を致さしめるのである。此の需要供給の二つの力が、吾々の經濟行爲を支配して居るのであるから、價格も、費用と利用の二方面を有

つ。然るに其の一方のみを論ずるから何時まで經つても論は盡きない。兩方を合致して論じたら宜ささうなものであるが、今までの經濟學に於てはさうなつて居らないのであります。無論費用理論、生産費理論を主張する學者と雖も、需要の方面を閑却して居らないことは前申した通りでありますが、需要の方は定數であるから、先づ其通のものと認めて、取除けても宜い。吾々が主として力を盡すのは、供給の方面であるから、生産費論、費用の方面の考究に主力を注ぐと主張するのであります。

是に對する反動として、千八百七十年頃から、費用の方面から價格を見るのは誤りである、需要の方面から見なければならぬと云ふ所謂利用論が擡頭し來つて、近時にまで至つて居るのであります。然るに此説は、最近大分頭を叩かれました。それは時世の然らしめる所であります。歐羅巴諸國は、大戰爭の爲めに生産が非常に攪亂され、生産力が非常に衰へて、今日歐羅巴諸國に於ては、何が最も肝要であるかと云ふと、生産力を增進し、それに依つて生産高を增加することにある。故に從來の如く需要方面を説いた學説は、漸次時勢に合はなくなつて、又元に還り、十九世紀の初めの如く、生産力の進歩、發展を基調とした學説、即ち生産費學説、或は費用學説の方が、少くも今日の歐羅巴に歡迎されるやうになつたのであります。學者は必ずしも時勢に適合することを努めて居るのではないが、大なる時勢の流れは學者をしてこれから遠ざかることを得せしめない。生産方面が重きを爲す時代に於ては、生産方面に力を入れ、之を力説する客觀的の學説が、再び元のやうに現はれる。從つて是に對抗して起つた利用學説が衰へて、氣の早い學者は、それが全滅したとまで唱へるやうになつて來たのであります。其の生産費理論の中特に代表的、最も有力なるものは、總ての費用を指して言ふにあらずして、費用の中の最も主なるもの、即ち勞働費を以て價格を説明せんとする説であります。是が樣々の生産費理論中の最も有力なるものであります。而して利用論には、限界利用論のみがあつて、今日は他に利用論はない。全部利用論も成立ち、極大利用論も成立ちますが、併し今日は問題にならないで、極小利用の意味に於ける限界利用論が代表的であります。生産費理論に於ては、今日は勞働費を以て價格を説明せんとする説が最も有力であります。故に生産費理論と利用理論と云ふよりも、具體的に言へば、寧ろ勞働價値説と限界利用説との對立であります。主觀主義とか、客觀主義とか、或は費用理論、利用理論と言ふよりも、具體的に、一方には勞働價値理論があり、之に對して他方には限界利用理論があり、此の二つが相撲を取つて居ると見れば間違はないのです。而して、今日に於て勞働價値理論を取つて居る説の中、其の最も有力なるものは即ちマルクスの説であります。勞働價値理論を採つて居る者は、普通の經濟學者の中にも可なり多くありますが、殆ど對立の勢にあります。限界利用説を取つて居るものは、マルキシスト中にはありませぬ。それは全然マルキシズム以外のものであります。

墺太利學派とか、數理學派とか、多くの學派がありますが、マルキシズム學派は、限界利用理論を名付けて『しもた家經濟學』であると申します。幾らか臍繰金を持つて居つて、其利息を以て衣食して居る、所謂遊手徒食の輩の經濟學である、金の利息を以て衣食して居る者の考へさうな經濟學説であると罵倒して居る。現在の露西亞のマルクス學者中最も偉い一人と稱せられるブハーリンは、最近『しもた家の

經濟學』と云ふ本を書いて、限界利用論を口穢く頭から罵倒して居りますが、今日日本のマルキシストの間には、是が最も愛讀されて居ります。限界利用論の如何なるものかを究めない人は、此の本を一册讀めば罵倒が出來る。又限界利用論者も一時は之に對する答に苦しんだ有樣であつたのであります。

一體ブハーリンといふ人は狡猾な人で、露西亞の革命の勃發する以前に、レニンの命を受けたのでありませうか、否かは分りませんが、限界利用論の最も偉い學者である墺太利のフォン・ボエム・バヴエルク先生の所に弟子入をして、一年か二年程眞面目な顏をして勉强した。バヴエルク先生は、露西亞から來た青年だ、愛い奴と考へて、非常に面倒を見て敎へた樣であります。然るに露西亞の革命となり、先生は戰爭中に殁られたが、ブハーリンは『しもた家經濟學』なる書物に於て先生の攻擊をして居ります。素より學問上の批評に於ては、師もなければ弟子もないからそれは差支ないが、學問以外に個人的の人身攻擊までもし、惡口雜言を吐いて居るのです。其れまでは、私は、ブハーリンは相當尊敬もし、又彼の書いた物は筋道が立つて居るものとして讀みもしましたが、自分の師の惡口を言ひ、一種のスパイとして大學の研究室に入り、先生が亡くなつて後惡口雜言を吐くを見如何にも下等の者と思つて爾來ブハーリンを尊敬する能はざる樣に感じて居ります。尤も彼は隨分感心すべきを言ひますから、それは採りますが、學問上斯やうなやり方は甚だ卑怯で人格的に斥くべきものと存じます。（校正の際追記。果して此人は其後勞農國の樞要の地位から引ずり卸されました。）

斯の如く兩者相容れない狀態でありますが、此の勞働價値論は、マルクスが初めて唱へたのではなく、マルクスは個人主義者たる英吉利の經濟學者から採つたのである。而も其の儘採つたのではなく、無論彼の獨創の修正は加へたのである。併しそれは矢張り修正に外ならぬのであつて、全然變形したものではない。彼が新に加へたものは、勞働價値理論ではなく、全く別の點にあるのであります。

經濟學の鼻祖、經濟學の建設者と言はれるアダム・スミス、及びスミスより出てスミスより更に偉い理論家であつたリカード、此の二人は共に勞働價値論を以て價格を說明した人でありますが、此の勞働價値論の由來としては、更に遡つて、ジョン・ロックまで溯ることが出來るのであります。ロックは千六百八十八年の、有名なグロリアス・レヴォリユーションの哲學者と言はれた人で、先づ英吉利の哲學者中、ヂョーヂ・バークレーを除いては最も偉い哲學者と言つて宜いでせう、認識論の上に於ては、ベーコンなどより遙かに有力な人であります。ロックはひとり哲學論を唱へたのみならず、法理哲學、經濟哲學の考も豐富に有つて居つたのである。就中彼れの說として後世に最も大なる影響を與へたものは、其の著『民政二論』にのせてある私有財產起源論並に私有財產是認論であつて、此の考がずつと英吉利の社會哲學、法理哲學、就中經濟學を支配し、それよりアダム・スミスの勞働價値論が出で、更にリカードの勞働價値論となつたのであります。マルクスは此のリカードから其の勞働價値論を採つて、而して彼の修正を附加へたのであつて、それが今日のマルキシズムの經濟理論の本體を爲して居るのであつて、其の由て出で來た所はジョン・ロックにありと申さねばならぬのであります。

十三　ジョン・ロックの勞働價値論

ジョン・ロックの說を簡單に述べて見ませう。彼は申します。原始の社會には私有財產はない。總ての物は總ての者の共有であつた。神は人間が生きて行くに必要なる、有らゆる物を與へたのであつて、人は其必要に應じて、必要なるだけ總ての物を取つて使ふ事が出來『各人は其欲望に從つて』といふことが、完全に行はれて居た。土地と雖も、人間が少くて土地が多かつたから、何人も所有することなくして、必要に際して入るだけ使ひ、植物にしても何にしても、勝手に採ることが出來た。總ての物は總ての人に共通であつた。併し、此時代に於ても、自分が或る物を使ふ場合は、勞働だけは是に附加へなければならなかつた。例へば川に流れる水は、總ての者の共有であるから、何人も此の水を汲んで飲むことが出來る。併し此の水を炊事用にせんとすれば、川から自分の家まで運ばねばならぬ。又山を走つて居る鹿は、何人と雖も之を射止めて、煮るなり燒くなりして食ふことは勝手である、併し鹿を煮るなり燒くなりして食ふ爲めには、先づ射止めるといふ勞働を附加へ、更に射止めた以上は、割烹料理をしなければならぬ。此狩獵、割烹は、卽ち鹿に對して附加へられたる人間の勞働である。川の水は總ての人の共有であるから、何人も飲み得るのであるが、若し臺所に運んだ水を他人が勝手に飲むとすれば、それは水を取るのではないが、他人が附加へた勞働を取ることになる。山に走つて居る鹿は、早い者勝ちで先きへ射止めた者が、自分の物とする事が出來るのであるが、併し自分が射止めて自分の家に持つて歸り、それを調理して、フォークに刺して食へるやうにしたものを、他の人が來て勝手に食ふとすれば、鹿は總ての者に共有であるが、膳の上にある鹿の肉は、單なる鹿にあらずして、鹿プラス人間の勞働であつて、勞働だけを他人が盜むことになるのである。是は他人に對して禁ずべきである。卽ち共有の物を共通に使ふことは差支ないが、共通ならざる物を他人が取ることは出來ないのである。總ての物は總ての人の共有であるが、各人の勞働のみは共有ではない、各人の勞働は各人のものである。私は私の勞働を爲し、彼は彼の勞働を爲し、第三者は第三者の勞働を爲すので、私は隣人の勞働に對して、何等の權利を有つて居ない。隣人は私の勞働に對して、何等の權利を有つて居るものでない。自分の勞働は自分の用に供すべきもので、是は誰人にも侵さるべきものでない、最も神聖なる不可侵の權利である。各人は自分の人格を所有し、其自分の人格は何人に依つても侵されざると同じに、否然るが故に、其の自分の人格の發露である勞働は、各人の專有であつて、其他に專有のものは何もない、私有なるものは何もない。此處から私有が起つて來るのである。勞働は私有で、他のものは共有である。此共有に私有である勞働を附加へた範圍だけのものは私有化されるのである。川に流れる水は私有物にはならない、併しバケツに汲んで、臺所に提げて來た水は、其の提げて來たといふ點に於て私有物である。各人は自分の必要なるだけは、自分の勞働を附加へて、自分の私有とすることが出來る。併し之れは自分の必要を充す爲にのみなさるべきである。バケツに五杯あれば用を辨ずるのに、十杯も汲んで來ることは、自分の必要以上の水を汲んで來たので、是は共有物に對する侵害である。各人が其の必要以上に水を汲めば、何人かゞ

不足を來すに相違ない。(例へば、彼の關東の大震災の際には、水道が破壞して若干の井戸しかなかつた。從つて水を儉約して使はなければ、一町内の需要に應ずることが出來ないといふ場合に、何時水が無くなるか知れぬと言つて、女中を急立つてバケツを以て無茶苦茶に自分の臺所に水を運んだとしたら、其人は他人の天から享けて居る物を侵害したことになつて、是は許さるべきでない)。自分が飲み且つ食ふために、自分の勞働を附加へて私有化した物は、他人は是に一指も染めることは出來ないが、若し之れ以上一歩にても出るならば、之れは却つて他人の權利をも侵害する事になつて、決して彼に私有の權利を與へない。私有の權利の存するは勞働を附加へたもので、それは畢竟するに各人が其れによつて其欲望を滿すことが、豫期されて居るものに限る。欲望が之を必要とする限りといふ條件を嚴に守るからこそ、私有がジャスティファイされるのである。斯くして私有財産の制度が起つて來て、社會の制度となつたのである。故に各人が自分の必要を超えて私有することは許さるべきでない、又到底辯護されないのである。所が侵されても已むを得ないことがある。ロック曰く、各人が其私有に超過して、自分の欲望する所より遙に多くの物を私有する途が一つ開けて來た、それは何によつてであるかと言へば、貨幣の使用によつてである。貨幣は直接欲望に充るところに遙に超過した物を貯へることが出來る手段を供するものである。普通貨幣を說いて、交換の用具とか、價値保存の用具とかいふが、ロックに依れば、貨幣は直接なる必要以上に、物を貯へて置く手段として起つたものであると云ふ。然らば何故貯へて置くことが出來るかといふと、總ての物は共有から離して、それを私有化し各人の有に歸せしめても、時間を經過すると、其性質上大抵は使用に堪へなくなる。例へば鹿を無暗に屠つて臺所に積んで置けば腐敗する。若しそれを自分が私有化せずして放つて置けば、他人が之を獲り來つて、其の食料とすることが出來るが、自分が多く獲つて他人に食はせないと言つても、其處までは手が屆かないから、食はんとして蓋を開けると腐敗して居る、是は天下の寶を空しくする所以である。所が貨幣は積んで置いて、何時たりとも自分の欲する物を買ふ事が出來、又幾ら置いても腐らないからである。貨幣は永久に其價値を變ぜずして、保存し得るものであると。是がロックの私有財産起源論であり、私有財産是認論でもあるのであります。而して是からして英吉利の個人主義哲學の經濟學理が出て來るのであります。各人が共有物を使用し得る所以のものは、勞働を附加へるからである。私有財産たる値打は、附加へられたる勞働のみであつて、共有物たる天然其物の價値は、全然問題にならない。何となれば總ての物は共有であるから。自分が特に二日の勞働を加へ、彼は三日の勞働を加へたといふことのみが、其の價値を形成するのである。即ち物の價値は、其物を作り出すに要せられたる、即ち天然の共有狀態より引離して、私有狀態に移すに就いて要せられたる勞働の分量と、全く一致すべき筈のものであると。これはロックの說から當然出て來る議論であります。併しロックの說は、現實の社會を少しも說明して居ない。彼も現實の社會に就いて論じて居るのではない。一つの理想的の社會、而も極めて單純な、極めて幼稚な、極めて小さい社會を假定して論を立てゝ居るのであります。現實社會に之を持つて來るには、色々な要素を加へなければならぬことは、ロックも認めて居るのであります。況や此說から、現

在の複雜なる經濟生活を說明する理法を作るには、多くの要素を考慮に入れることの必要なるは明かであるに拘らず、個人主義の經濟學者は、其要素を加へることなくして、ロックの學說、單純なる假定を其の儘現實の社會の說明に充てたのであります。

此成立から考へて、吾々は勞働價値說を以つて、現在の經濟社會に於ける價格決定の原理を說いたものとして受取ることは出來ないのでありまして、先づ之を吟味して見なければなりません。然るに今日に於ては、マルクス派の學者は、勞働價値說のみが唯一の眞理であると異口同音に言ふのであります。勞働價値說のみが眞理にして、他の價格理論は皆誤つて居る、吾々が勞働價値說を主張するは、それが眞理であると固く信ずるが故である、然るに吾々に反對する、所謂マルクスの價値論を排擊する學者、或は排擊の態度を取らない迄も、吾々に反對するブルヂオア學者、卽ち普通の經濟學者は、勞働價値說を認める人もあるが、又認めない人もある、其認めないのは、勞働價値說が眞理でないからではない。彼等は勞働價値說が眞理でないといふことは證明が出來ない。彼等は此勞働價値說が、眞理であらうがなからう、それが、元來之を欲しないのである。若し此の說を眞なりとすれば、どうしても現在の資本主義の經濟組織を否定しなければならぬ。ところがブルヂオア經濟學者は、資本主義を擁護することが、其の御用學者たる當然の任務であるから、それが良くても惡くても、現在の資本家を擁護しなければならぬ。現在の資本家的經濟組織を良いものとしなければならぬのである。然るに、勞働價値說を採つては擁護が出來ないから、彼等は勞働價値說に對して攻擊を加へ、之を排擊するのであると、斯く主張します。是に對してブルヂオア經濟學者の多くの者は曰く、吾々が勞働價値說を排擊するのは、それが眞理でないからである。然るにマルキシストが勞働價値說を一生懸命に主張するのは、何もそれが眞理であると思つて居るからではない。彼等は資本主義の惡口を言はなければならぬ運命に置かれて居つて、資本主義となれば、是が非でも糞も味噌も無茶苦茶に、頭から貶せば宜しいのであつて、それには勞働價値論が最も好い武器である。若し此勞働價値說を採らないとすれば、資本主義に對する惡口が言へない。それ故彼等は勞働價値說を採るのであると言つて、互に罵り合ひ爭ひ合つて居るのであります。

今日歐羅巴に於ても、或は日本に於ても、尙斯樣なる幼稚なる論爭が大部分を占めて居りまして、マルキシストと稱する人々は、マルクスの說でありさへすれば、理が非でも之を辯護し、常に之を正しいとして居つて、マルクスと敵對論者の間に意見の衝突があれば、其說の內容は聽かなくても宜い、必ずマルクスに軍配を擧げるに決めて掛つて居るのであります。他方マルクスを排擊する事を商賣として居る人は、マルクスの說と言へば、其內容なぞは問はない、資本論に書いてあつても、唯物史觀の何處にあるにしても、左樣な事はどうでも宜い、マルクスが斯う言つたと云ふと、二言と言はさないで、頭から駁擊して掛る。所が何ぞ知らん、其れがマルクスの說でも何でもない事が住々あるのであります。

元來勞働價値論は、個人主義的の學說から出て來つたものであります。然るに、此說を個人主義の思想とは全然相反して居る獨逸理想哲學の觀念哲學の有機說を以て包んだ所に、困難が橫はつて居るのであります。他の言葉を以て言へば、勞働價値論は、一の學理であると共に、學理たるよりも更に重要な

る任務を有して居る。それは何かと言へば、實際運動の旗幟となり其れに最も強いスローガンを與へ、實際運動家に對して其熱心を維持し得る信仰の箇條となることこれであります。勞働價値論は、學理學說であると共に、一つの大きな宗教であるのです。曾て日本に來た事のある英國の有名な數理哲學者バートランド・ラッセルは、露西亞の旅から歸つた後、『ボルシエヴヰズムの實際及理論』といふ小册子を著はしたが、其書に於て次ぎの如く申して居ます。ボルシエヴヰズムは今日に於ては、單に學理のみでなく、一つの大きなる宗教である。ボルシエヴヰキの人々は、宗教を否定すると言つて居るが、それは基督教、佛教、マホメット教等の既成宗教は否定するのであるが人は宗教なくしては一日も活きて居れない。ボルシエヴヰズムは今日は一つの大きなる宗教である、宗教として大きな力を有つて居るのであると論じて居ります。が是は何もボルシエヴヰキになつて斯くなつたのではない。既にそれの起る前から、獨逸社會民主黨の中に於ても、マルキシズムは、殊にマルキシズムの主張する經濟說である勞働價値論は、一の信仰箇條であり、熱心なる御題目の箇條になつて居つたのであります。

社會主義者にしても、勞働價値論を唱へないで、尙社會主義を主張して居る者が尠らずあるのであります。社會主義と共產主義と勞働價値論とは、マルキシズムとして連絡して居るが、社會主義の總てを通じて連絡して居るといふ譯ではない。他方に又勞働價値論は、單り社會主義の理論として存在して居るのみならず、前に擧げた如くに、世界經濟學の本家本元の價値理論價格理論の本體を爲して居るのであります。經濟學の理論は、決して社會主義ではない。却て其正反對なる殊に資本主義の最も有力なる辯護論であつたのであります。故にマルキシストを以て唯だ資本主義を惡く言はんが爲に、眞理とは思はないのに、資本主義を惡く言ふ道具に勞働價値論を用ゆるものであると難ずるものは、元より大なる曲解であります。即ち勞働價値論は第一に、英吉利の功利主義、個人主義的の哲學から生れ出でたる一つの理論であります。第二には此論は、元と資本主義攻擊の武器として用ひられたものでなく、却て其反對に資本主義擁護論、資本主義存在必要論の最有力武器として用ひられたのであります。何故資本主義擁護に、勞働價値論が有力であつたかといふと、ロックの說いた如く、抑〻人格は獨立性を有し且つ平等性を有して居る。此獨立にして平等なる人格は、其人格を物に附與するに依つて、共有の中より私有を形づくる事が出來るものである。從つて私有財產といふものは、決して他人を侵害し、他人を掠奪し、他人を侵して成立つものでなくて、人格の最も神聖なる發動であり、發露たる各個人の勞働を具體化して居るものである。最も尊重せらるべく、最も擁護せられなければならぬものである。私有財產制度に弊害の伴つて來ることは、人間萬事に付きもの、已むを得ない事である。私有財產制度の本體其ものは、人間の最も深い高い根本的なる人格の要求に合致して居るものである。この勞働の神聖を最も多く保護するものは私有財產制度である。私有財產制度は決して勞働の敵でない、私有財產制度あつてこそ初めて、其の尊貴、其の獨立性、其の平等性を十分に支持されるものであると、斯く說いて居ります。斯く解釋すれば、勞働價値說は私有財產制度と、其私有財產制度の上に立脚してゐる資本主義に對して、有力なる辯護を供給するものたるは明です。

十四　當爲としての價値論

抑〻經濟學の上に於いて又た一般經濟思想の上に於いて、價値と云ふことを考へ始めたのは、當爲（ゾレン）の觀念から起つて來たものであります。實際に物が賣られたり買はれたりする時の價を其儘に說明するとか、勞働者に拂はれる賃銀の變動を支配する原理はどう云ふものであるか、金利の高低を支配する原理はどう云ふものであるとか云ふことを、事實ありの儘に提示する必要の爲に價値論は現れたのではありません。それは、永い學問的發達の結果漸く現はれ來たことでありまして、初めはさうではなかつたのであります。

實際の經濟生活に於ては色々な價格、色々な所得の高が存在して居るが、是等を唯だ事實其ものとして見るばかりに甘んじて居ないで、如何に之を調節すべきものであるか、如何に之を嚮導して行くべきであるか、其嚮導其調節の原理を立てたいと云ふ要求が、價値論を喚び起したのであります。實際行はれて居る價格や所得は此くかくであるが、それは適切なものでない、正當なものでない、公平なものでない。然らば、如何なる價格が適切、正當、公平なものであるか、其標準を何處に求むべきか、其れに答ふるものが取りも直さず價値論の任務であると考へられてゐたのであります。

現實の價格を引上げるか引下げるかの標準として價値と云ふことを考へる。勞働者に支拂はれる賃銀に對して、當爲の賃銀と現實の賃銀とは何時も對立して居る。勞働者が幾ら〳〵の賃銀を貰つて居つても、それは當爲の價値と違ふものである。當爲の價値から言へば、もつと餘計若くは其反對に、もつと少く拂はるべきであると考へます。此く當爲として、價値は長いこと人間の思想の中にありましたが、其思想は、社會の發達に伴ひ社會的正義の洗禮を受けるに至つたのであります。社會的正義は何を以て根幹とするかと云ふと、平等と云ふことであります。同じものに對しては同じものを支拂ふべきである、同じ價値を有つて居るものは同じ價格を受取るべきである、同じサーヴィスをするものに對しては同じ報酬を與ふべきものであると云ふ平等が、當爲を形造る所の標準となつたのであります。そこで從來の價値論が平等（均衡）價値論に轉化して行つたのであります。希臘時代のことは、今論外と致しまして、中世の基督教界に於ける經濟思想は、必ずしも平等と云ふ考のみではありません、平等の考もありましたけれども、其考ばかりでなく、もつと色々なものを入れた所の正義、基督教的の正義の觀念に合致すべきものとした其の價値論が長く行はれて居つたのであります。これが十八世紀から十九世紀に掛けて所謂自然法理の洗禮を受けて、平等論と云ふものになつたのであります。勞働價値論は平等觀念の洗禮を受けて當爲としての價値論に新なる基礎を與へたのであります。

此點に於きましてはリカードの價値論も、マルクスの價値論も、全く同じであります。マルクスは此立場を否定するのでなく、之を尊重して居ります。マルクスに對する攻擊者の大多數は此平等觀念に向つて非難を加へるのであります。マルクスの說を見ますと、此平等觀念は所謂等價形態と云ふことを以て說かれて居ります。是はマルキシズムの本に始終書いてあるところです。最近帝國大學に敎

師をして居る獨逸の若い學者で非常に優れた學者であるアモンと云ふ人が、某所に於いてアダム・スミスの價値論の講義をしましたが、其中にマルクスの評論を試みて主として其評論の對象として此等價形態を論じて、是は大變な間違ひだと云ふ點に重きを置かれました、併し是は私から言ふと的を外れて居る。マルキシズムの批評としては殆ど何等の意味を持つて居ないのであります。何故ならば、此等價形態論はマルクス獨特の言現し方は持つて居りますけれども、其中に盛られて居る思想は、リカードの思想、正統學派の思想其ものに外ならない。何にも新しいものが含まれて居るのではない。是は幾ら攻擊しても、正統學派の經濟學其ものを攻擊して居るのであつて、マルクスを攻擊して居るのではない。マルクスが新規に附加へたものはないのであるから、彼はちつとも痛痒を感じない。マルクスの勞働價値說は、殊に其の餘剩價値論は此れらの攻擊のために、微動だもするものではありません。マルクスの說でないものを破つた所が、マルクスは破れないと云ふことは當り前であります。

此平等觀念論の僻見たることを示しさへすれば、勞働價値論はすぐ倒れるかの如く考へることは大なる間違であります。單なる僻見がそんなに長く又た力强く勞働階級や思想家を支配するとは常識を以つても考られないことであります。長い間奉ぜられて居る說と云ふものはそれ〴〵意味がある。後世に於て間違として捨てられるものでも、或る時期に於て人を支配する思想は何等かの眞理を有つことが多く見出されます。此事は、有ゆる學問を通じてさうであると言つて宜いと思ひます。勞働價値說が兎に角長い間人間の經濟思想を捉へたと云ふことだけを以てしても、それが決して單なる僻見でなかつた證左ではあるまいか。今日の學問的の批判には堪へないとしても、何等か否定し能はざる眞理が、其中に存するのではあるまいかと反省して見ねばなりません。勞働價値說は、其發生から見ますと、一つの當爲論である。當爲論として吟味せられることゝ、事實の認識として見られることゝは、大變違つて居らなければならぬ。人間は成べく平等を欲する、併ながら現在の全體の人間が決して平等であるのではない。現在の事實としては間違つて居るとしても、當爲としては間違つて居るかどうかと云ふことはまだ分らない。當爲は當爲として吟味されなければならぬ。現狀の說明としては不十分だと云ふことだけを以ては通りませぬ。而して當爲としての吟味は、現在の事實を認識すると云ふ見方とは違つた見方をしなければならぬのは勿論のことであります。

マルクスの勞働價値論は、莫大な文獻を產出してゐる、向後も尙ほ產出するであらう。乍去、當爲の論として見るか、認識の論として見るか、現象を說明するだけのものとして見るか、それとも實體を見る——實體と云ふと語弊があるかも知れませぬが、現象に對しての實體或は本體——本體として見るかに依つて、其論爭の主なる部分は全然無用に歸してしまふ。就中マルクスの說を祖述し、繰返し、說明し、受賣する人々の說と、マルクスの說其ものとは決して同じものではない。マルクスの說は決して分り惡い說ではない。極端に言へば、マルクスの說は經濟學の理論としても最も分り易いものゝ一つであると言つても宜しい。マルクスの言葉全部を理解することは、或はむづかしいことでありませうけれど

も、マルクスの意味した所の要點はさうむづかしいものではない。併し之に附加へた色々な解釋註釋は洵に煩雜なものであつて、今日のやうにマルクスの解釋論が段々多くなつて來れば來る程分り惡くなる。其御荷物を整理するのは大變である、之を整理する爲に一生掛けても出來ないことである。それはマルクスの說を理解することを助けもするであらうが、妨げることも多い。之に比して、マルクス自身に接して見ると著しい違ひがある。マルクスに關する文獻を涉獵しつつマルクス自身を對照して見ると、違ひが發見されます。其處にはマルクス辯護者、排擊者以外に超然として立つ所のものが、マルクスにあります。

さて、マルクスが其の勞働價値說を說くに方つて、大いに重きを置く點は、今日の資本主義社會に於て、資本主と勞働者との間に行はれる取引は、勞働の賣買ではない、勞働力の賣買であると云ふことこれであります。勞働者は勞働を賣り、資本主がこれを買ふのではない。資本主の買ふものは勞働力である。賣る者も勞働を賣るのではない、勞働力を賣るのである。取引の對象となるものは勞働力であつて、勞働其ものではないと云ふ一事これであります。これはたしかに、マルクス獨得の見解に屬するのであります。但しマルクス以前多少此點に考及ぼした人がなかつたわけではありません。其れと同時に、マルクスのやうにハツキリさせた人はマルクス以前には誰もありませぬ。誤解のないやうに十分に說いたのはマルクスが始めてです。勞働價値說の最も有力な主張者であるリカードに於ても此考は全くないことはないのです。リカードは自分自ら稱してプーア・マスター・オブ・ランゲーヂ、文章が洵に下手である――下手ぢやありませぬけれども、或る意味から言へばプーア・マスター・オブ・ランゲーヂです、其意は彼は極めて簡潔に物を言ふ人で、冗長なことは言はない。餘程頭の良い人でないと一遍で頭に這入らない。大抵の人は彼を理解すべく餘りに頭が惡い。長々しく繰返して言へば頭に這入りませうが、リカードの言葉だけでは餘りに簡潔で頭に這入らない。だから彼は勞働力の賣買と云ふことは少しも考へて居ないかの如く考へられて居つた。けれども能く調べて見ると其考はリカードにある。マルクスは決して無から有を生じたのではない。リカードにある說を取つて、それに彼の工夫を附加へてハツキリさせた。此意味に於ては、マルクスはリカードの價値論の完成者であるとの見方も、全然的を外れて居る次第ではありません。けれどもリカードは此點に餘り重きを置かなかつた。尠くとも彼の書いて居るものの上では是は一寸しか出で居らない。餘程注意して見るにあらざれば見出し難いやうに極く不明瞭にしか示されて居ない。之に反しマルクスは大變に詳しく書いて居ります。リカードの考へて居ることをマルクスが取つて、それを彼の說の中心にしたのでありますから、マルクスは單なるリカード完成者ではないのです。

十五　社會的必要勞働と等價形態

勞働力の賣買云々のことを述べるに先つて、申上げて置かねばならぬことが若干あります。其第一は社會的必要勞働と等價形態のことであります。或一つの物を造り出す爲に費された勞働、それは消

えてなくなるのでなく、其物の中に這入つて居る。マルクスは、これを社會的に必要なる勞働と解釋して居ます。社會的に必要ならざる勞働は問題とならないのであります。此意味はマルクスが極く明にして居る。卽ち所謂抽象せられたるところの人間勞働單なる勞働、と云ふことこれであります。コツプを拵へる勞働と言へばコツプを拵へる勞働ですから、本を拵へる勞働とは別物、テーブルを拵へる勞働とも別物、ランプを拵へる勞働とも別物、皆具體的の形を持つて居るものである。之をマルクスは名附けて有用勞働と申します。有用勞働は使用價値を造り出す。何日かの勞働はテーブル一つを造り出す、テーブルはテーブルとして使ふ時に吾々の用に役立つ。一つの有用勞働と他の一つの有用勞働とは到底比較の出來ないものである。他の言葉で言へば、使用價値と云ふものは比較が出來ない、非通約的のものである。大工の一日の勞働と左官の一日の勞働とは比較出來ない。唯だ一日と云ふことが共通であるだけであつて、左官は何日掛かつても大工の仕事は出來ない。大工はどんなに努力しても左官の仕事は出來ない。何れが尊き、何れが多き、何れが少きと云ふことは比較が出來ない。唯だ大工と大工とは比較が出來る。此大工の方があの大工よりも餘計働く、此大工の方があの大工よりもより巧みであると云ふことは出來るけれども、此大工があの左官よりより巧なるか否か、それは比較は出來ない。使用價値は問題にならない。通約が出來ない、平等でも不平等でもない。初めから不等なるもの、違つたものだから比較が出來ない、從て、問題にならない。併しながら其處に共通性がある。それは何ものかを通じて通約され得るものである。そこで等價形態論が出て來るのであります。

一樽の葡萄酒＝10ヤードのリンネル

一樽の葡萄酒と十ヤードのリンネル、是はどうしたつて比較出來るものではない。全然違つて居る。併ながら今日の資本主義社會に於ては斯う云ふ等價形態が成立つ。十ヤードのリンネルをやれば一樽の葡萄酒が得られると云ふ等價形態が成立つ。此等價形態が出來ると云ふのは、何か其處に共通のものがあるからである。何ものかに依つて兩者が通約出來る。共同分母に引直し得る。勞働價値說でなく、其の反對の利用價値說を採る者から言へば、其の共通なるものは利用であります。利用を共通者と見る考へ方の方が勞働價値說よりは前に起つたのであります。卽ちアリストテレースが說いて居る、プラトーも說いて居る、ソクラテースも多少言つて居る。總て共同分母に引直して通約するものは、人がそれを要する度であつて、其れによつて異なれる使用價値が等價形態に置かれるのであると說きます。マルクスはアリストテレースのやうなあんな偉い學者でも勞働が通約者であると云ふ眞理を見出すことが出來なかつたのは、希臘では奴隷制度を採つてゐて、勞働と云ふものゝ眞相が分らなかつたから、其考が附かなかつたのであると唱へて居ります。而して主張します、此場合、兩者に共通のものは勞働である。一樽の葡萄酒の中には十ヤードのリンネルの中にあると同樣な社會的必要勞働が這入つて居る。一樽の葡萄酒は十ヤードのリンネルに等しいと云ふのは、一樽の葡萄酒の中に這入つて居る勞働は十ヤードのリンネルの中に這入つて居る勞働と等しいと云ふことである。此の通約者である勞働があるから、價値の比較が出來るのである。此外には價値の比較は出來ない。隨つて勞働

は價値を比較する唯一の尺度で、勞働以外に價値の比較者となるべきものは何にもないと申します。併し其の謂ふ所の勞働――十ヤードのリンネルに這入つて居る勞働、一樽の葡萄酒に這入つて居る勞働と云ふのは、十ヤードのリンネルを拵へるに要した現實の勞働の謂ひではありません。一樽の葡萄酒を拵へるに要した現實の勞働の謂でもありません。茲に社會的必要勞働と云ふのは、リンネルを拵へるとか葡萄酒を拵へると云ふやうな具體的な有用勞働を言つて居るのでなく、抽象せられたる人間勞働のことであります。約めて申せば、其れは、觀念としての勞働であつて、具體的の勞働ではないのであります。

マルクスの社會的必要勞働とは、觀念としての勞働であると申上げると、マルキシストの人たちは一齊に起つて反對するでありませう。しかし私は斯く見る外ないと確信するものであります。マルクスはヘーゲルの觀念哲學から出發した觀念論者でありまして、彼の勞働價値說に特別な魔力、魅力を與へ、多數の人々を捉へる力を有せしめたものは、彼の經濟學說でなく、觀念論であります。其觀念論の最も精彩を發揮して居るのは此等價形態に於ける勞働と云ふ觀念にあると存じます。彼は使用價値と交換價値の區別を詳しく資本論の一番初めに論じて居ります。勞働價値說と云ふけれども、其勞働と云ふのは有用勞働でないことを具さに說いて居るのであります。これを現實の有用勞働と速斷して、彼れ是れ評論するのは、全く的外れと評し去るの外はありません。價値の本體とか、價値の尺度とか云ふときには抽象せられたるところの勞働の謂ひです。所が賃銀を受取るものとしての勞働は、抽象せられたる勞働でなく、具體的の、感性的の、現實の形を持つて居る所の勞働のことであります。大工一日の手間が幾ら、左官一日の手間が幾らと云ふときは、具體的の勞働に對する賃銀を意味するのであります。抽象せられたる人間勞働に賃銀を拂ふのではありません。價値の本體を說くものとしての勞働と、現實の勞賃受取者としての勞働とは、本來まるで違つたものであります。即ち勞働賃銀の受取者と見た所の勞働、言葉を換へて言へば、所得分配論に於ける勞働と、價値の尺度としての勞働とは全く別のものであります。現實のみを說明すると云ふのならば、此樣な抽象せられたる人間勞働などと云ふことは全然要らないことである。併しそれでは本體を摑むことが出來ない、本體を摑まうとするには、觀念を中に入れなければならぬ。そこで抽象せられたる人間勞働を觀念しなければならぬ。總ての存在から感性的の性質を皆取除けてしまふ、吾々が經驗に依つて得た一切の感受し得可き性能を取つてしまふ、さうすると物がなくなるかと云ふと、さうはならない。其處に何物かゞあつて始めて物が存在すると云ふことが分る。併し何があるかと云ふことは分らないが、誰が見ても赤い、誰が見ても暖いと云ふのは其ものをして赤からしめ、暖からしめる所の本體があるからである。其は吾々の感覺だけでは分らない。感覺を以つては色々なものを直感し得るのみである。其直感を集合して其間に原因結果の關係を立てるは悟性の働きである。コップは堅いもの、丸いもの、透明なもの、中は空であると云ふことなどを皆取除いても、コップと云ふものはなくならない。諸々の有用勞働を悉く抽象して取つてしまつてすつかり物がなくなるかと云ふと、なくならない。價値と云ふものがある。甘いと云ふ性質

を砂糖から取去つても、砂糖の價値はある。其殘りは何であるか。マルクス曰く、それは抽象せられたる人間勞働である。此抽象せられたる人間勞働と、賃銀の支拂を受ける勞働とは、全然別のものと見なければならぬ。全然と云ふと誤弊がありますが、是は混同してはならぬ、別に見なければならない。乍去、此抽象せられた勞働と云ふものは、ちつとも實際の事實を說明するものではない、唯だ當爲であります。實際幾日の勞働が此處に這入つて居ると云ふことを言ふのではない。觀念の上に於て、抽象的の人間勞働がどれだけのものに當るかを社會が認める、社會的に通用する、其れが社會的必要勞働であります。但し、玆に社會的に通用して居ると言つても、實は平等の觀念から言つたので、社會主義、共產主義が實現せられた社會に於ては、それは卽ち勞働の價となるでせうけれども、今日の資本主義社會に於ては左樣ではないのです。現實の價値となり價格となつて居るものは、それより遙か上のものであるか、下のものであつて、それとは何れの道違つたものである。故に、これを以てのみしては、現在の事實の說明は出來ないのであります。現在の事實の說明は別である。所が價値論と云ひ、價格論と云ふと、先づ第一に現在の價値、現在の價格を說明すべきものと考へられる。それを說明すべきものでなければ何等の用もないと豫斷してかゝるのが通例であります。そこでマルクス價値論の排擊と云ふものは容易く出來る樣に考へる人が出て來るのであります。

十六　指導原理としての勞働價値論

今日に於ては、マルクスの說は勞働運動者の間、勞働者の間に、非常な勢力を得て居ます。社會の現狀に不安を持ち不平を持つて居る賃銀に依つて生活して居る多數の賃銀勞働者が、あの面倒臭いマルクスの說を出來るだけ骨折つて分らうとして、是が分つたとして熱心になつて階級鬪爭の陣營を築いて居ると云ふのが、現在の事實であります。彼等は彼等が現在置かれて居る環境を見、此環境にマルクスの說がピシッと合ふことを見出してマルキシストになるのです。だからマルクスの勞働價値論が假令學問的にすつかり排擊され得たとしても、此多數のマルキシスト、現實さう云ふ環境に立つて居る所の多數の人の說は變らないのです。歐羅巴竝亞米利加の勞働者であるマルキシストの大多數、又學者的のマルキシストの中でも最も徹底した人々は、現在の雇傭關係の事實を先づ見る。抽象せられたる人間勞働から這入つて行かないで、有用勞働から這入つて行く、具體的の、感性的の、有用勞働、經驗的の眞の有用勞働の現在の事實、而も其有用勞働の價値の決定と云ふやうな原理問題よりも、此有用勞働が如何に支拂はれて居るか、もつと簡單に言へば如何なる賃銀を貰つて居るかと云ふ事實から這入つて行きます。さうして此事實を判斷し批判すべき標準としては、今言ふ抽象的の人間勞働を以て本位とする勞働價値說、觀念的の勞働價値說を以てするのです。さうすると兩者の間には非常な距離がある、是は不都合であると感じます、而して階級鬪爭の意識を强くすることになります。其現在の事實とは二つあります。其一つは勞働者は勞働を賣ることに依つて生きて居るものでなく、勞働力を賣ることに依つて生きて居るものであると云ふこと。第二に、勞働を買ふ相手卽ち資本主、雇主は、勞働力其ものが欲

しいのではなく、勞働が欲しいのである、けれども勞働力を買はざれば勞働は自分のものにならない、仕方がないから勞働力を買ふと云ふことこれであります。他人の勞働を得ればそれに依つて餘剰價値を產出すことが出來る。本當の目的は餘剰價値を得ることに在るので、其手段として勞働力を必要とするのである。勞働を得るには先づ勞働力を買はなければならぬ、だから雇主と勞働者との關係は必然的に厄介なものである。ストライキなどを起さないでも厄介なものである。況やストライキを起したり何かして取扱に困るものである。欲しいものは餘剰價値であり、其剰餘價値を今日の資本主義的組織の下に於て產出し、之を自分の懷中に入れようとするには、他人の勞働を自分に得なければならぬ。他人の勞働を自分に得るには、今日の資本主義の經濟社會に於てはこれを買はなくても宜い、他人の勞働は買へない、賣買の目的物にならない、賣買の目的物になるものは勞働力である、勞働力を買へば其勞働力が作出す所の勞働は此勞働力を買つた買主のものになる、そこで勞働力を買ふ、勞働力を買ふには勞働者を雇ふ形を取る、だから雇傭關係は手段である。斯う云ふ事實を勞働者は見る。之を當爲たる勞働價値說から見ると、其間に大變な距がある、のであります。マルキシズムの駁擊者の多數は、逆に此現在の事實を見ては居りますけれども、其解剖が不十分である。今日の雇主、勞働者間の雇傭關係なるものは、要するに勞働力の賣買に外ならないと云ふことをどうしても見出すことが出來ない。現狀を否認する者から云へば、當爲に當嵌めることが一番露骨に、一番徹底的に、一番手つ取早く、一番鮮明に、現在の勞働力の賣買の事實が、人類平等の思想に對して正面的に衝突するものであり最も不都合なものであることを分らせるに適して居る。是程明瞭に現在の勞働者に訴ふるものは外にはない。此說が學理上支持し得るや否やは、彼等に取つては第二義的であります。學者が何と言つても吾々の體驗は此通りである、此の端的な事實を前にし乍ら、思想善導だの何んだ彼だのと言つて、學者が幾ら抽象的に講釋しても、少しも善導などにはならないどころか、學者が排擊するとか何とか言つても、此事實を少しも打破して居ないではないかと主張するのであります。

マルクスが此根本的の說の上に建てた上層建築が、資本主義の下に於ける勞働者等の經驗にピタッと合ふと云ふことから推論して、其基礎も又堅固、眞實、妥當なものであると斷定するのが、マルキシストの立場であります。之れに反し、マルクス排擊者批評者の多數は、先づ此下層の基礎を見て、此が妥當でないことを見、而して其上に建てられた上層建築の妥當を疑ふのであります。茲に兩者の根本的差違が胚胎してゐるのであります。マルクスの餘剰價値論を以て、その勞働價値論と切つても切れない有機的關係に在るものだと主張するものがありますが、マルクスの餘剰價値論は勞働價値論を通して行くのが一番分りよいものであるけれども、是は切つても切れないものではありません。何故なれば今言ふやうにマルクスの勞働價値論は抽象論であり、觀念論であります。之れに反し其の餘剰價値論は具體論、賃銀の仕拂はれる雇傭關係の實相に付て立てた論でありまして、兩者は切つても切れない關係を有つものではありません。更らにまた、勞働力の賣買と云ふことと、抽象的觀念的の勞働價値說と離すべからざる關係を有つと考へる人がありますが、これまた當つて居らないのであります。偶〻マル

クスに於ては兩者を結付けたのでありますけれども、決して切離し得ざるものではありません。何故なれば勞働力の賣買と云ふのは現狀的事實の解釋であつて、勞働價値說は經驗的に事實上證明されることではなく、觀念的にその妥當性が概念されることであります。此意味に於きましては、餘剩價値論と勞働價値論とは、これを全然別にして考へなければならないのであります。マルクスの勞働價値論が全然誤であつても、餘剩價値論はそれが爲に微動だもしないのです。但し實際は微動だもしないと云ふことはありませぬ。入口が壞れても建物は壞れはしませぬけれども、建物中に容易に入り込むことが出來ない不便は起ります。

十七　均衡原理としての勞働價値論

リカードに於きましても、遡てアダム・スミスに於きましても、降てリカード以後の諸の正統學派の經濟學者に於きましても、現實の價格或は現實の價値と、自然價格或は自然價値とを區別して居ります。此れらの學者が、自然的と言ふのは本來は極めて不自然的なものであります。本來自然的と言へば何等人爲の干涉を加へずして自ら其所に出て來るものと云ふ意味でなければなりません。ところが彼等の自然的と言つたのは、非常に努力しなければ其所に現れないところのものであるのです。其れは、觀念の上は於ては自由自在であります。人間の思想は自由でありますから、其自由なる思想の上には何等の掣肘を被ることはないのです。此意味に於ける觀念的な考へ方は決してマルクスに創るのではありません。彼は獨逸の觀念哲學に精通して居つたからのみでなく、正統學派の經濟學說にも通曉して居りまして、敵の刄を取つて敵を倒したのであります。卽ち資本主義の最も有力なる辯護者であり說明者である正統學派の經濟學說の最も重要なる武器たる勞働價値說を取つて、資本主義に致命傷を與へたのであります。其致命傷を與へた武器は實は具體的なものではなく、抽象的なものであります。卽ち英吉利の學者たちが、自然價値、自然價格と言つたものを、マルクスは其體系中に取り入れたのです。自然價値、自然價格を出立點として立つた英吉利の正統學派の經濟學說は、それだけでは決して現實の價値、現在の價格を說明するに足りないものであります。從つて、彼等の說くところは、實は理想的の社會、自然的と云ふことに合ふ諸〻の條件を備へた社會に於てでなければ妥當しないのであります。其樣な社會は現實には存して居りません、現實としては、其れは却つて極めて不自然的なものであります。マルクスは其條件を具へた社會を共產社會と致しました。英吉利の學者たちは、これを自然的社會と見ました。マルクスは之を實現されるものと見る、正統學派は必しも現實されると云ふことには重きを置かない。其自然價値なるものはアダム・スミスとリカードとの間には重要なる差がありますけれども、結局次の如きことに歸着するのです。現在吾々は物を賣つたり買つたり、賃銀を得たり、賃金を貸して利息を取つたり、土地を貸して地代を取つたりして居る。此價格、此所得なるものは必しもそれが値打する所のものと同じものではない。又其反對に總てのものはそれが持ち來すところのものを値して居るのではない。然るに自然的社會に於ける自然價値なるものは其持ち來たすところと、

其値するところと、正確に合致する價値である。更に詳しく言へば、其社會に於ては勞働が卽ち値するものであつて、其外には何にも値するものはない。人は一日勞働すれば、其一日の勞働分を値として受取る。一日分の勞働を値として受取ると云ふことは一日分の勞働を與へたと云ふことである。與へたものを受取る、受けたるものは卽ち與へるものである。G(勞働)＝T(交換價値)である。總てのものには其値を支拂ふ、唯だ其の値のみを支拂ふ、支拂はれるものは、必ず其値のみである。然り唯だ其値のみである。然るに今日現在の社會に在つてはさうではない。今日の社會に於ても、形式上は、總てのものは其の値を受くることとなつて居る。然し事實は決して左樣ではない。此のG＝Tと云ふ公式は、歪められてゐる。歪みがない自然的社會に於ては、各人の働きが皆同じであるから、自分が働らいただけは、人も自分に働らいて呉れるのである。そこで之を等價形態に引直すことが直ぐ出來る譯である。G＝T與へるものは卽ち受くるものである。Aが一日勞働を他人の爲にすれば、其勞働の產物は自分のものでなく他の人のものになる。其代り他人はAの爲めに何をして呉れるかと言ふと、Aが一日の勞働に依つて出來したものと全く同じものを與へて呉れる、同じだけの分量の勞働の這入つて居るものを與へて呉れる。併し其有用さは違ふ。例へば私が人の爲に一日畑を耕すならば、私をして畑を一日耕さした私の雇主は、私に一俵なら一俵の米を呉れる。其一俵の米を受くるのは私が一日働いた勞働の結果である。一日働けば誰でも一日働らいた勞働に對する報酬を受ける。アダム・スミスは此形を以て現在の社會を說明する出立點としたのです。所が其出立點は一體は當爲、卽ち判斷の標準なのであります。然るに、彼はこれを判斷の標準と言はず、現實價格理論の出立點としたのであります。從つてD＝S　S＝Dと云ふ公式が成立つものと見たのであります。自分が需要するだけは自分は供給せざるを得ない。自分が十のものを供給することに於て、自分は十の自分の需要を滿す。だから需要と供給とはきちつと合ふ。斯の如く經濟社會と云ふものは絕えず均衡を保つて居る。但し此均衡が亂されることはある、けれどもそれは永くは續かない、色々なる運動がそこに起つて均衡を回復しようとして居ると、かく主張したのであります。これが、今日でも未だ經濟理論の基調となつて居る經濟生活均衡說であります。現代の代表的經濟學者たる英吉利のマーシャル先生以下均衡說論者は無數にあります。然るに實際の經濟社會に於ては、需要と供給とは洵に跛なものであります。アダム・スミスは素朴的に考へまして、成程跛ではあるけれども、其の跛的狀態は自由競爭が完全に行はれさへすれば取除かるべきものである。自由競爭が十分に行はれないと、D＞S若くはD＜Sと云ふことが起る。そこで彼は自由競爭を極力主張したのであります。(リカードも、此點に於ては其衣鉢を繼いで居ります。)獨占と云ふことがあればD＝Sと云ふことにならない。所が當時は各種の獨占が段々打壞されつゝある時で、殊に英吉利に於いて左樣でありました。故に謂へらく、獨占の生命はもう長くないものである、自由競爭に對する制限は遠からずして悉く取除けられるであらうと考へたのであります。從つて獨占狀態のことについては深く論究するを要しない、何れ當然さうなるものとしてD＝S　S＝Dと云ふ公式を出立點としたのであります。從つて、經濟政策の任務としてはD＝Sと云ふ此式が妥當する

やうな社會さへ現出すれば宜い。國家は產業奬勵をしなくてもD＝S S＝Dでさへあれば、最も公平なる價格が成り立ち、そこに所得の公平なる分配が行はれ、社會の不公平は無くなつてしまふ。勞働者に對する需要が勞働者の供給と同じならばストライキも無くなつてしまふ。賃銀の不當と云ふことは無くなる。唯現在は自由競爭でなく、どちらかに獨占がある、或は兩方に獨占があつて、其間に不當が起つて、是が勞働者に不平を起させ、或は社會問題を起させるのであると、大體さう云ふ風に考へたのであります。だからアダム・スミスやリカードには社會政策的の考は少しもない、唯自由競爭さへ行れるやうにすれば、それで宜しいので、仕事は洵に簡單になります。

マルクスも亦た此の出立點を採つたのであります。マルクスが此出立點を採つた所以は彼に深い考があつたからであります。現在の社會卽ち資本主義の現在はD＝S S＝Dとは餘りに遠ざかつて居ると云ふことを、マルクスは十分に見ました。此點はリカードとは違ひます。リカード其他の十九世紀初の經濟學者は、平等社會の狀態が歪められて居ると云ふことは段々消滅するものであるとしたのです。然るにマルクスは反對に、資本主義の續く限りは自由競爭は行はれない、本當の平等は實現しない。そこで如何しても共產主義を實現しなければ平等は望まれない。人間は平等を要求する强い根本的な要求を有つてゐる。其點だけから言つても資本主義の運命は定められて居るものである。資本主義社會が如何にも不都合なものであると云ふことを暴露しよう、それには平等社會の狀態に立脚してゐるアダム・スミスやリカードのD＝S S＝Dと云ふものは卽ち受くるものなり、受くるものは卽ち與ふるものなりと云ふ原理を持つて來るのが最も適切である。此原理を當嵌め、此鏡に現狀を映せば、如何にも醜い所が容易く暴露せられる。正常狀態と違ふことが判然と分る。外のことは何にも言はなくても、現狀を暴露すれば勞働者の革命意識は養ひ得られるから、現代の社會を批評し現在の社會の實狀を描出すればそれで宜いと申すのであります。淨玻璃の鏡に照らす、其の淨玻璃の鏡とは正統學派特製の鏡で、本當の鏡ではないけれども、兎に角或目的を以て使はれた鏡、よく見世物に在ることですが、其鏡の前に行くと顏が長く映つたり、橫に映つたりする、あれを以て見ると、人が皆化物のやうに見える。所が他の鏡を持つて來ると必しもそんなでもない、餘り見好くはないかも知れぬがそんなに變なものではない。D＝S S＝Dと云ふ鏡を持つて行けば非常に變である。受くるものは與ふるものなり、與ふるものは受けるものなりの公式と今日の實情とは、如何にも相合致して居ない。マルクスは色々考へ、十分考究した結果、此鏡を持つて來るのが、資本主義社會の現實を暴露するに一番適する。諄々しいことを附加へなくても、それで資本主義社會の不都合なること、並に資本主義社會の學問である經濟學が、如何にも人類の本當の使命を說くに足らないことを暴露し得ると云ふことを有力に知つた。此點に於ては彼は大なる天才であります。マルクス以前にもえらい經濟學者がありましたけれども、マルクスに比べては到底同日の論にならない程追はれてしまひましたのは、此暴露戰術をマルクスが徹底的に採つたからであります。卽ち正統學派の最も有力な武器を取つてそれを最も能く應用

したからであります。

十八　勞働の賣買と勞働力の賣買

時間が切迫して參りましたから、他の點は悉く省略致して、マルクスが甚だ重きを置いて居る勞働の賣買と勞働力の賣買との區別が、何故重要な關係を有つかについて、今少しく重ねて申上げて此講話を終らうと存じます。

勞働力の賣買と云ふことは、必ずしも全く新にマルクスに始つたことではないと云ふことは先刻申上げた。リカードにもある、併しリカードには極めて不明瞭にしかない。マルクスは此點を明にした。總ての價値の源であり又價値を計る物差としての勞働と、それから賃銀を受取る主體としての勞働力とは違ふものである。ところが雇主が勞働者を雇ふときに於ては、此二つのものを同時に得るのであります。總ての價値の源であり總ての價値の尺度である勞働を勞働者から取ると同時に、雇主はさうでない意味に於ける具體的の勞働例へば紡績工一日の勞働製鐵工一日の勞働を自分に取る、抽象的の意味に於ける勞働も得るし、具體的の意味に於ける勞働をも得るのです。詰り勞働者が一日雇主に雇はれて働いた其結果、其所に抽象せられたる人間勞働の一日分と云ふものが無論這入つて居らなければならぬ。例へば五十日働らいて一つのものがすつかり出來上るとしますと、出來上つたものには五十日分の抽象的の意味に於ける人間勞働が其中に這入つて居るものである。この五十日の人間勞働は、個別的個人的なものでなく、社會的に必要な勞働である。社會的に必要ならざる勞働は幾日費しても價値にならない。雇主が勞働者を雇ふときに於ては、社會的に必要ならざる勞働をさせはしない、多少は誤算があるかも知れぬが、其れは永く續くものではない、屢〻それを繰返すときは資本主は破産する外はない。合理的に經營して居る資本主ならば、社會的に必要なる勞働のみしか勞働者にさせないやうに努める。然るに、五十日間働く此勞働は、同時にまた賃銀を受ける主體です。五十日働けば金何十圓かを貰ふ、一日働けば日給幾らかを貰ふ。此の場合マルクス以外の學者は、此勞働を勞働者が賣つたと言ふ。例へば硝子工場に働く硝子工は五十日間働いて生産した五十日間の賃錢を貰へば、五十日間の勞働を金例へば百八十圓に換へて賣つた、五十日間の硝子工の勞働の價格は百八十圓であると云ひます。ところが其勞働の價格の中に這入つて居る價値は何が之を決定するかと言へば、勞働價値論から言ふと、矢張勞働である。五十日間の勞働の中には五十日間の勞働が這入つて居るに相違ない。それ以上のものもなければ、それ以下のものでもある筈は元よりありません。それでは何にも說明したことになりません。勞働以外のものゝ中には勞働が這入つて居ると云ひ得るけれども、勞働の中に勞働が這入つて居ると云つたのでは何にも說明したことになりません。是が一寸考へると能く躓きの石となるのです。マルクスに於て平均利潤論が躓きの石だと言はれてゐます。しかし其の躓きの石に來る前に、もつと大きな躓きの石があるのです。一體どうして此の說明を以て勞働の價値の說明が出來るか、勞働價値論の本體は勞働以外の他のものに付て先づ考へた、其れに付いては疑は起らな

いとする。所がマルクスは勞働は一つの商品であると屢〻說いてゐます。勞働が商品でないと云ふことは共產主義社會なら言へるけれども、今日の資本主義社會に於ては勞働を賣つてそれに對する値を受取るのであるから言へない譯で、是はどうすることも出來ない事實である。が若し勞働を商品とすれば、五十日の勞働を賣つた、其賣つた五十日の勞働價値は何である、五十日の勞働なのである。さうすると總ての他の商品の價値は、勞働價値論を以て能く說明せられるとしても、他の商品と同じ價格を以て賣られたり買はれたりする商品としての場合の勞働の其價格は、何で說明されるか、說明せられないのであります。雨天とは何ぞや、雨降る天氣なりと言ふが如くであります。それは何にも說明したことにならぬ。吾々は雨が降ると云ふことを知りたい、天氣と云ふことを知りたい、雨天とは雨降る天氣では分らないのです。そこで、マルクスは、賣られるものが勞働と見るから間違ふのであつて、賣られるものは勞働力であつて、勞働ではないと說くのであります。ところがマルクス自身でさへも實は初は其所までは考へ付かなかつたのであります。河上博士が飜譯して居られます『賃勞働と資本』と云ふ彼の著書があります、極く短かいものであるけれども、マルクスの學說を最も簡潔に最も要領よく書いたものです。其中には、勞働者はブルヂョアに勞働を賣ると記してあるのであります。後に至つてエンゲルスが、これを勞働力と訂正して辻棲を合せましたが、當時のマルクスは、明かに、賣り買せられるものは勞働であると信じて居つたのであります。それではどうしても勞働價値說を以て勞働の價値を說くことが出來ない。勞働價値說を以ては勞働以外の價値は說くことが出來るけれども、肝腎の勞働其ものゝ價値を說くことは出來ない。玆に氣が付いて、マルクスは勞働力と云ふことを言出したのであります。何故勞働力を以てすれば勞働價値說を以て勞働の價値を說く所以となるかと言ひますと、其は斯うです。勞働者が資本主に渡すものは勞働力である。勞働者が幾日か働けば、彼等の働らいた勞働全部は資本主のものとなつてしまつて、勞働者のものではない。其勞働者から得たものは幾ら高く賣らうが安く賣らうが、資本主の勝手で儲は資本主の懷中に這入る、利益分配などゝ言つて後でやることもありますけれども、普通の場合には提供したものは全部資本主のものになつてしまふ。然るに此の勞働は賣買の目的物にはならぬ。其は唯だ資本主の手に渡るにすぎない。斯くて勞働だけは、商品の價値は勞働に依つて定ると云ふ原則の通用範圍以外に置かれることになります。是は實は問題の回避であります。けれども此の回避は單なる回避でなく、大いに意義を持つものであります。其故は實際の事實に當つて居るからであります。實際の事實として、今日の資本主は決して勞働に對して、其相當の價を拂ふものではありません。此點は實にマルクスの言つた通りであります、此點に於てはマルクスは大なる經濟論家であります。自分が裏の畑を耕して大根を作るとすれば、其大根は全部私のもので誰のものでもない。自分が人にやるにあらざれば、全部自分のもので其利益の全部を受ける。故にD＝Cと云ふ公式が完全に當てはまります。其處には餘剩價値と云ふものは全然ありませぬ。餘剩價値がないから搾取られると云ふことがない。今日の社會に於て、資本主は他に雇はれて働らくものでないから、自分の働らいた所の結果は全部自分のものになる。だから資本主の働も若し勞

働價値原則を以て說かうとすれば說ける。與へる卽ち受けるなり、受ける卽ち與へるなり。所が勞働者はさうでない。勞働者は一日働いても、其一日の働に對して受けるものは、勞働の價値の全部ではない、其一部分です。其一部分とは如何なる部分かと言ふと、勞働力の維持に必要なるだけの部分これです。故に、彼の賣るものは勞働ではなく勞働力である。勞働力だけは Ω＝F の公式に從つて其値を受けます。勞働力は之を維持するだけの賃錢(子孫養育の費用も含みます)を貰はなければ、勞働者は死んでしまふ、又た後が絕える。其の以外の勞働は何にも受けることは出來ず、資本主に只取られてしまふ。恰も海岸の好い景色を樂しまうと思へば海岸に何程かの地所を占めなければならぬ。其地所を占める爲には地代を拂はなければならぬ。併し其地代は決して景色の代ではない、景色の代の一部分である。唯景色を見ようと云ふには此地所を持たなければならないから、此地所だけには代を拂ふ。其代を拂つた人は支拂つた代價以外に景色を樂しむことが出來る。勞働者に對し勞働者が勞働力を支持するに足るだけの賃銀を拂ふことの出來る者は、勞働力を取るのみならず一日の勞働の全部を取る。だから資本主は勞働力を買つて置いて、實は勞働を自分に取る。買ふものは勞働力で宜い、勞働を買はなくても宜い。勞働力を買ひさへすれば、勞働はくつ付いて來る。勞働者が八時間働けば、其八時間の勞働全部が資本主のものになる。ところが勞働力を維持するに足るだけのもの、勞働者が一日を支へるに足るものは、一日八時間働らいたものに及ばない。勞働能率が段々進めば進む程僅かなもので宜い。一日一時間働いてそれで生活費は出來るかも知れぬ、之を名付けて必要勞働と言ひ、其以外の勞働を餘剩勞働と言ひます。雇主は必要プラス餘剩勞働の全部を自分に着服し、勞働者には必要勞働分だけしか拂はない。餘剩勞働分は全部雇主の所得となります。從つて雇主は必要勞働を可成少くしようとする。それには二つの方法がある。其一つは勞働時間を長くすることこれです。八時間働らいて居るものを十時間働かせる。八時間働かせる場合四時間分で宜いとすれば、後の四時間は只取ることになり、十時間働かすれば後の六時間は無代で取ることになる。だから勞働時間を長くしようとする。マルクスはこれを名付けて絕對的餘剩勞働、それに依つて得らるゝ所の餘剩價値のことを絕對的餘剩價値と言ひます。所がそれが出來なくなると第二、相對的の餘剩價値を產み出す工夫をする。時間は延長しないが、能率の增進だの、產業の合理化だの、テーラー・システムだのと勞働者の能率を高めることに依つて、必要勞働分を少くしようとするのであります。能率が高まれば、同じ八時間でも餘計なものを生產する、併し食べるものは同じものを食べて居るから、今まで八時間の半分が彼等を支へるに必要なものであつたけれども、能率が高まれば三時間だけで十分に自分を支へるだけのものを作り出す、或は二時間で作出すと云ふことになると、今まで四時間しか出來なかつた餘剩勞働は六時間或は七時間に殖える。それだけ雇主の懷中が殖える、マルクスはこれを相對的餘剩勞働と名付けます。雇主は勞働者が其勞働力を支持するに足るだけのものを拂へば宜い。併し勞働者の與へるものは勞働力ではなくて全體の勞働である。かくて、勞働價値說が當嵌まることになります。勞働者に支拂はれるものは全體の勞働に對してゞはない。五十日の勞働に對する賃銀は五十日の勞働に對する賃銀であ

ると云ふことは此場合には言へなくなり、又言ふ必要がなくなつて來る。五十日の勞働に對して支拂はれる賃銀は、十五日分の勞働に對するものであるかも知れぬ。彼等が五十日間の生活維持に必要なるものを得るに要する勞働は、十日分か十五日分であるかも知れません。だから勞働の價値は矢張說明出來ることになります。然し實は勞働の價値を說明するのでなく、勞働を提供するに要する日限の間勞働者の生活を支へて行くに足る諸の生活必要品と云ふ貨物、商品の中に入つて居る勞働を說明するのです。これは、事實に於いて、勞働其ものゝ價値を說明したのではない。唯だ勞働者生活要品と云ふ貨物の商品の價値を、勞働價値論を以て說明したゞけであります。卽ち問題を回避したのですが、是は大いに有力な說であります。

しかし勞働者は、此現在の事實と D=a と云ふ當爲の公式とを比べると非常な不都合を見出ます。吾々は八時間働けば八時間の產物全部を貰ひたい。然るに事實上雇主が我々に支拂ふものが、吾々の勞働力を支へるに足るだけのものに止つてゐるは不都合である。勞働力のみが賣買せられると云ふ資本主義を廢せと主張します。斯くて勞働全收權の主張と云ふことが起つて來るのです。(此字は生存權と云ふ字と共に私が拵へた字ですが、此頃は此語は汎く使はれるやうになりました。唯或人々は收の字を報酬の酬の字に直したりして居ます)。社會主義と云ふものは勞働全收權の主張である、斯う云ふことになります。今日では社會主義と云ふものは勞働全收權を主張するものである、生存權は主張する者もありしない者もある、此の主張は社會主義と社會主義でないものとの區別の標準とはなりませんが、其はむしろ共產主義の主張であります。これに反し社會主義は勞働全收權を主張するものだと言うて間違はありません。殊にマルキシズムは勞働全收權を主張するのです。其根本思想は當爲たる D=a の公式を實際に實現しようと云ふに在ります。それは共產主義にしなければ行はれない。勞働全收權を主張してそれが十分に認められる社會は、卽ち共產社會に外ならない。資本主義社會に於ては勞働全收權を認むることはどうしても出來ないと主張します。しかし本當の共產社會には勞働の全收とか半收とか云ふことは全然成立たざる筈です。(無政府共產主義を主張するクロポトキンは此點を指摘して、マルクスを痛擊して居ります。其れはマルクスに取つては慥かに一の痛所でありませう。)兎に角斯くの如くに勞働者の切實な要求に合ふものが、マルキシズムに在る以上は、さうしてそれが勞働價値說の上に立てられて居る以上は、勞働價値說は勞働階級の最も大切なる信條としてこれを動かすことは容易に出來ないのであります。幾ら學者が排擊した所が、實際の勞働者が之を棄てる見込はないのです。此點は向後長い間變るまいと考へます。勞働價値說を學問的に吟味するに當つては、此點を十分考慮に入れて置かねばならぬのであります。單なる駁擊、若くは部分的の修正は何等の力をも有ち能はないのであります。此事は篤と御含みを願はねばなりません。

× × × × × × ×

最早時間が盡きました。申盡さゞる點の多いことは甚だ恐縮に存ずる次第であります。殊に最終の部分の勞働價値論については、時間がなくて急ぎました爲め、御話が前後錯綜して、甚だ不備なものと

なつて仕舞つたかを恐れるのであります。然るにも拘らず、永い間御清聽を賜つたことを、厚く御禮申上げます。（以上第三回講演）

（昭和三年十二月二十五―二十七日千葉縣主催中等教育研究會（會場千葉中學校）に於ける講演を稍々著しく修訂添削して此一篇とす。）

厚生經濟研究　終